月下の夜想曲

宇治総

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月下の夜想曲

【Ｎコード】
Ｎ１０１７Ｄ

【作者名】
宇治総

【あらすじ】
悪魔城ドラキュラＸ月下の夜想曲のＦＦです。ＰＳＰ版があまりにも懐かしくてついカッとなってやった。今は反省している。アルカードが城に入るところから始まります。――それにしても……アルカードってこんなに喋ったか？

第一部（前書き）

「ヒッヒッヒ！　ありがとうございます」

相当設定などを補間、一部改造、捏造いたしました。お話を書く上で仕方なかったんです！　やめて、石なげないで！

第一部

星が近い。

もう何百年も前のことになるのか――母に手を引かれて、木々の葉叢（はむら）を透かして月を仰いだ時のことを、アルカードはふと思い出した。あの熱く新鮮な感動は幾百年のときを経て、樹木の血が琥珀へと姿を変えるように、きらめく硬質のなにかとなって胸の内側に飾られている。あのとろりとした星の瞬きも、金色の手のぬくもりも、耳を叩く烈風に絡めとられて一瞬のうちに背後へ流れていった。

見上げていた頭を再び正面に向け、アルカードは毛の生えた四肢を躍動させた。オオカミに変じる魔力もじきに失せてしまうだろう。未だ目覚めを意識していないうちから身を灼き続けている吸血衝動は、はるか昔に血によって魔力を養うことを止めたアルカードにとって長年の宿敵であり、敗北の許されぬ業敵であった。真祖の血に宿る強大な魔力も、この単純にして逃れえぬ業の前にはどうやら敵しないようだ。寸刻ごとに力を増し、それを抑えようとする魔力のせめぎ合いは、彼にとって慣れ親しんだ葛藤とでも言えるべきもののはずだったのだが。

猛烈な勢いで流れていく闇のただ中に、突然幅の広い跳ね橋が現れる。針のような小さな驚きに慌てて足を止め、アルカードはいつの間にか暗視の能力を欠いていた事実に苦笑した。

――今の俺は多分、ただの人間とそれほど変わりはしない。

目覚めたその足で父の居城跡を目指したのは、何をどうしようという考えに基づいてのことではなかった。身を苛む吸血衝動とはその根を異にする、それでいてひとしなみに抗いがたい宿命が背中を押した、とでも言うよりほかはない。かつていくたりかの人間と共にその城の主を斃（たお）した、あの時と同じに。

永遠の眠りが覚めたという事実は、アルカードの半身に流れる呪われた血によって成されたものの復活に他ならない。主の斃れてよ

り瓦礫に地衣の生(む)すままとなっていた城跡には、まさにその一端が跳ね橋となり、それを繋ぐ太い鎖に姿を変えて顕れていた。
鋭いオオカミの嗅覚が懐かしい血の匂いを嗅ぎ取る。只人(ただひと)には涼やかに感ぜられよう秋の夜風も、アルカードには己の体のうちから吹いてくる腥風(せいふう)のように思えた。
軽く頭を振って変身を解くと、アルカードはかすかな鞘鳴りと共に腰の剣を抜き、背中に吊ってあった大時代的な盾で左腕を鎧った。盾はかつて今のアルカードと同じ苦しみに良しとして甘んじていた父から、剣は父に人を愛することの喜びと苦痛をもたらした母から贈られたものだ。強大な魔力で闇のうからを席巻する夜の一族たるアルカードも、血を絶つこと既に数百年の体には、かつて父を討ったときの力など到底望むべくもない。思い出のよすがに棺に眠っていたそれらは、人間がそうするように自衛の為になくてはならないものになってしまった。
――お帰りなさいませ。
暗い洞(うろ)のような城門の奥から声が響いてきた。両手に持った思い出の品とはまた違った懐かしさを想起させる、地鳴りのような低い声。
「帰る場所はここではない。俺も、お前もだ、デス。闇のうからの故郷は一つ」
「ではいらっしゃいませと言い直しましょう、アルカード様。いったいなにをしに参られましたか？」
「……知れたことだ。あの日を忘れるお前ではあるまい、そこを退いてもらおう」
わざわざ俺をアルカードと呼んでみせたということは、三百年前の意趣は健在だという証拠に他ならぬ――アルカードは自分でも驚いたことに一抹の寂しさを覚えた。
――無理からぬことだ。
闇が忽然と灰色の髑髏(どくろ)に形を成した。元は濃紺の仕立てのよいものであっただろう、身にまとうローブは返り血に染んで襟元より

下は真っ黒で、その両端から生じた細長い諸腕には赤錆びた長大な大鎌が携えられている。父の右腕として信任の篤い悪魔、光からも陰からも怖れられる彼に名はなく、同族たちからは畏怖を込めて「死（デス）」と呼び習わされていた。

「その手に持ったものはなんのおつもりか。人間共の真似事をなさる趣味がございましたか？」

表情の作れぬ骸骨は、呆れたように両手を挙げて溜息をつく振りをして見せた。そう言うデスの大鎌はまったく恐怖を生み出す為だけに作り出されたもので、彼自身から成っている。

「かつてのドラキュラを知るお前なら、検討はつくはずだ」

「お父上の御行跡を尊ばれるなら剣を置き、今こそ牙を研がれよ。荒れるままの骸を晒していたこれまでならいざ知らず、ことほどさように門は開かれた。ドラキュラ城は復活を遂げた。お父上も御再会の時を心待ちにされておりましょうぞ」

「お前と話している男はドラキュラではない」

「しかし子だ、尊い血を引いた。何者も血には逆らえませぬ。アドリアン様、三百年前の事とて、いまさら我らに遺恨（いこん）のあり得ようはずもござらぬ。――お戻りなされよ」

「俺の体を絆（ほだ）すのは父の血だけではない。――愚者のふりはやめろ、デス。それとも、会わぬ永（なが）のあいだにこんな茶番を趣味に持ったか」

デスは大鎌の石突きで苛立たしげに跳ね橋を一突きすると、心持ち肩を落としたように俯いた。

「只人のごとき真似をして恥じぬとは……夜の一族のなんと情けなき有様よ。そのような醜態をさらしてまで、未だ人間の味方をなさるか。――よろしい。我らの元へ戻れとは申しませぬ。せめて手を引いて頂きたい」

「戦いたくないのは俺とて同じ事。だが、それはできぬ相談だ」

「仕方ありませぬな」

そう言うと、デスは石像に変じたかのように身じろぎひとつせず、

しばらくの間アルカードを凝視(ぎょうし)していた。
――俺に残された力を測っているのだろう。
アルカードは盾を体に引きつけて、ぽっかりと空いたデスの眼窩(がんか)を睨み返した。真正直にあの鎌で斬りかかってることなどあるまい。どんな攻撃を仕掛けられるにせよ、さしあたって相手の出方を待つしか方法はない。
「……この場はいったん退きましょう。城内は広い。翻意(ほんい)もあり得ましょうほどに、今一度よくお考えくだされ。――お互いのために」
言いながらデスは左手を無造作に振り上げた。瞬間、盾と左腕を縛(いまし)めていた留め金がはじけ飛び、盾は勢いよく空に吸い込まれていった。舌打ちする暇(いとま)もなく盾を目で追ううちに、右手の剣ももぎ離されるようにして門の奥に消し飛んで行ってしまった。
「……！」
デスは現れたときと同じく、音も立てずに忽然と消えていた。

「城内は広い、か」
まさしくデスの言ったとおり、ドラキュラ城は広い。アルジシュ川を見晴るかす威圧的で峻厳(しゅんげん)な外観は、かつてポエナリ城と呼ばれた昔も、母が逝ってよりのち悪魔城と呼ばれるようになったあとも変わらない。ドラキュラの名と威容は、ルーマニアはもとより中東欧全土の人民の心胆を寒からしめたものだが、彼も、彼の居城も、その内部は外から伺える程度の規模ではない。無限の部屋と廊、その中には細部に至るまで世界中の様々な文化を取り入れた意匠を凝(こ)らし、一つとして同じものはない。それでいて統一感を崩さない変幻自在の麗容は、まさしくそれが人の手に因るものでないことの証左であった。
門をくぐり、並の民家なら数十軒は入ろうとも思える巨大な回廊

に足を踏み入れる。とても人間業とは見えぬ、これまた巨大な筒型穹窿の下で、アルカードは低級霊や骸骨共の手荒い歓迎を受けた。
人外達の反応は二つに分かれた。血の匂いを嗅ぎ付けて一目散に逃げ出してしまうものと、本能からか命じられた為か、こちらに襲いかかってくるものに。が、大局的に見れば前者は明らかに少数派であった。
武器のない身には堪えた。身を削るようにして僅かな魔法を生み出し、殺意をもって飛びかかってくる魔物にだけ効率的にそれを放つ。が、縦横に攻められ浅くない傷が増えるにつれて、アルカードは刻一刻と追い詰められていった。
城に押し込んでわずか寸刻、早くも抜き差しならぬ状況に陥っていた。亡者の残骸に混じって落ちていた薄錆びた剣を拾い上げると、アルカードは走りながら近づくものすべてをろくに見もせず斬り払った。
――まずい。
長い回廊の半ば以上を走り終えたころ、背後から凄まじい轟音が響いてきた。ちらと振り返れば、入ってきた入口が落とし格子によって塞がれているではないか。出口も時間の問題かと視線を戻すのと、出口が入口と同じようにして閉じてしまうのは同時だった。
アルカードは麗貌をゆがめて舌打ちをした。あの丸太木を組み合わせたような巨大な格子を破壊することはできない。ではせめて壁を背に、襲いかかる人外共をすべて斬り伏せるか――いや、無理だ。アルカードは走りながら、先ほど拾った剣を眺めてみた。どうひいき目に見ても人間の手になる粗悪な代物で、なにがしかの魔力が籠もったものにはとうてい見えない。背後を慕う魔物を半分も斬らぬうちに折れて飛ぶだろう。
アルカードは身のうちから炎を呼ぶのを止め、別種の魔法を練りだした。今の状態で成るかどうかは賭だったが、他に方法もない。成らねば人外共に食い散らかされて滅びるのみ。
落とし格子にぶつかる瞬間、アルカードは苦心して作り出した魔

力を解放した。途端に視界は水の中のごとくぼやけ、一切の音が遮断される。

成ったか――アルカードは大気中を漂いながら安堵した。もし手があれば胸をなで下ろしたことだろう。

霧への変身も一瞬のことで、すり抜けた背後の格子に人外共が衝突する音と共に変身は解け、アルカードは宙からひとたまりもなく墜落する。体は思うように動かず、体内で拮抗していた吸血衝動が鎌首をもたげて気も狂わんばかりであったが、とりあえず虎口は脱したようだ。ふと見上げるといつから降り出したものか、虎口の外は氷雨が篠ついていた。

雨――！　魔物の群れどころの騒ぎではない。流れ水は夜の一族にとって真の虎口だ。雨に体を叩かれながらアルカードは残るすべての力を振り絞って這い、庇のついた落とし格子の下辺りまで戻ると、それきり動かなくなった。

肩を突かれる感触に、アルカードは重い瞼を上げた。

周囲は闇のままだったが、雨はすでに止んでいる。気を失っていたようだ。辺りに魔物がいなかったのはまったくの幸運だった。

――こうしてはおれぬ。

生乾きのマントを引きずって、アルカードは半病人の態で立ち上がった。めまいを堪えながら辺りを見回してみる。雨が降ってきたのも道理で、頭上には屋根がなかった。庭園燈の散立するそこは城の内郭をぐるりと巡る外庭のようで、夜目にもつややかな純白の石畳の上には、同じ色の椅子や卓などの調度が雨ざらしにも拘わらず、作りたての清らかさをもって鎮座している。城外を取り巻く未開の森めいた雑多な木々とは趣を異にし、整然と植樹され完璧に形をととのえられた月桂樹やニワトコに囲まれて、アルカードは遅まきながら安堵の溜息を漏らした。

「もし」
まったくなんの前触れもなく、耳元で声が囁いた。剣を探す暇もあればこそ、アルカードは飛び退って声のした方へ手をかざす。が、声の主を焼くはずの一点の炎さえ、手のひらから生まれることはなかった。
――霧に変じた代償は大きかったようだ。
苦々しい思いで声のした方へ目をこらす。闇の中にぼんやりとした光球が生じ、その中に羽を瞬(またた)かせたこびとが浮かび上がった。
「……妖精(イエル)か」
アルカードはようやく肩の力を抜いた。
妖精は闇のうからの中でも別して無力な存在だ。せいぜいがいたずらをしかけて人間を困らせたり、愛玩用に籠のなかで飼われたり、腹を空かせた人外共のえさになる程度の生き物である。いかに弱り切った我が身を省みても、まさかこの弱小な魔物が仇をなすとは思えなかった。
「貴方様は、あのう、夜の一族のお方でございますか？」
夜の一族か――アルカードは腹の中で自嘲した。なんと夜の一族の裔が、他ならぬ夜の世界で妖精一匹始末できないでいるのだ。今こそ力を喪ったのだと思えば、自嘲もことさらに胸に響いた。
「いかにも」
「貴方様は、あのう……間違っておりましたらなにとぞ御寛恕(かんじょ)くださいませ。あのう、ひょっとして、貴方様は御城主様のご一族のお方でございましょうか」
妖精の声は小さく聞き取りづらかった。喪失に沈んだ心にはへりくだった言葉も勘にさわる。自然とアルカードの声は荒くなった。
「だったらどうしたというのだ、妖精(イエル)」
妖精は息を呑むと、石畳の上に降りてぺたりと這いつくばった。
「お赦(ゆる)し下さいませ、お赦し下さいませ！　無力な者の言葉にございます、お赦しを――！」
「いい、わかった！　悪かった」

アルカードはあわてて両耳を塞いだ。いかにも妖精らしく小さな声だと思えば、いったいこの小さな体のどこから出てきているのか、赦しを乞う声は木々の梢（こずえ）を揺らさんばかりの大音声（おんじょう）である。

妖精の口が閉じるのを待ってから、アルカードはおもむろに両手を下ろした。

「お赦しを――！」

「もういい！　赦す！　赦すから黙れ！」

アルカードがわめくなり、妖精はぴたりと黙った。

「……何用だ、妖精（イエル）。俺が何者か知っているなら、あるいは先に知ったのなら、近づかぬ方が身の為と思うが」

大きく溜息をつくと、アルカードはだるいのを堪えて言った。当の妖精はいかにも畏（かしこ）まって聞いているというふうに、こちこちに固まっている。

「それは、はい、存じております。あのう、貴方様の御正体が何者であらせられるのか、ということと、御城主様のお側（そば）周りの方々から、貴方様にお城から御退場願えという命令をいただいた、ということでございますが」

「……」

妖精と話すのは非常に根気が要った。めまいがひどくなるのを感じて、アルカードは返事をせずに近くにあった椅子に腰掛けた。目の前の卓に遠慮がちに妖精が降りてくる。

「……本題に入る前に、妖精（イエル）。もう少し簡潔に話せ。そしてもう少しだけ大きな声でしゃべってくれ。非常に聞き取りづらい」

「申し訳ございません、弱き者の言葉でございます。御方様にはなにとぞ――」

アルカードはうんざりするのを抑えて事務的に続けた。

「それを止めろと言っている。お前が同族に話すような言葉でいい、俺は気にせぬ。お前が俺の何にそれほど気を遣っているかは知っているが、お前が思うほど俺は大きな存在ではない」

はあ、と妖精は生返事をした。

「と、申しますと？」
「ありていに言えば、俺の魔力は枯れつつある。この体を維持するだけでもはや精一杯なのだ。あと百年もすればお前でも俺を討つことは可能になろうほどにな」
「滅相もない！　討つなどとはとんでもないことでございます。アドリアン様は我が御城主様の――」
じろりと睨みつけると、アルカードの肘から指先ほどしかない少女は押しつぶされたように額づいてしまう。
「あのう――」
「アルカードだ、俺の名は。アルカードは言葉を改めろと言ったな……もしお前に彼の言うことを聞いてやる気があるなら、だが」
妖精は口をぱくぱくさせながら、しばらくのあいだ卓の上で跳ね起きたり這いつくばったりを繰り返していた。
「……そろそろ本題に入ったらどうだ。俺も暇ではない」
「申し訳……すみません、はい、わかりました。本題に入ら、入ります」
妖精はしどろもどろにそう言うと姿勢を正した。
「アルカード様にお仕えしたいのです」
「ならぬ」
間髪（かんぱつ）入れずにそう言われて、妖精は不意打ちを食らったように押し黙った。
妖精の要求にはとうに感づいていた。強大な力を持つ魔族の中には、より弱い者を惹（ひ）きつける魅了（みりょう）の魔力を先天的に備えているものが存在する。夜の一族がその最たるもので、彼らの血の匂いはあらゆる生物を魅せ、その心を操り、時として狂わせるのだ。当のアルカード自身に魅了された経験はほとんどなかったが、人間、人外を問わず、訳もなく付きまとわれた記憶はあった。
――この妖精は花に引き寄せられた蝶だ。その花のまさに枯れんとしていることにも気づかず、葉の裏に潜（ひそ）みおる蜘蛛も眼中にない。
「お役に立ってみせます」

これほど真摯に言われなければ笑い出したかもしれない。アルカードはむしろ憐れみを込めて妖精を見下ろした。人間の子供よりも非力な妖精が、悪魔城を攻略するいったいどのような有効な手だてを持ちうるというのだろう。巷間強大だと言われるところの（それは甚だ間違いではあるのだが）アルカードでさえ、門をくぐった途端に滅ぼされかけたというのに。

「妖精」

アルカードは椅子から身を乗り出すと、先ほど通り抜けた落とし格子のほうへ指をさした。

「あの奥でな、魔物共に襲われた。健常であるなら歯牙にもかけぬ、低属の者共だ」

はい、と妖精は答えた。

「骸骨、死霊、色々いたな。独力で撃退せんとしたが、敵わなんだ。そこでこれを拾った。おそらくは魔物共が持っていた得物だ。それほどよいものでもない」

卓の上に拾った剣をごとりと置いた。そのようです、と妖精は答えた。

「これを振り回してな、その落とし格子のところまで駆けて、一か八か霧に変じた。――お前が見いだしたのは、そうした次第で気息奄々となっていた俺なのだ」

妖精はようやく警戒の色を見せ、ご無事でなによりでした、とだけ答えた。

「さて、もしあの渦中にお前がいたとしたなら――俺は少しは楽に戦えただろうか。お前も共に錆びた剣を振るって、いくばくかの人外共を蹴散らしてくれただろうか」

「……」

「もし仮に、それの成らずして俺が滅ぼされたとする。さて、俺に与したお前を、彼らはどう遇するだろうか。『敵は滅ぼした、お前は元の住処に戻れ』と言うだろうか？　それともお前を裏切り者として籠の中に幽閉するだろうか。あるいは常々妖精はどんな味な

のかと気にかけていて、折良くその疑問を解く絶好の機会に恵まれたと雀躍(こおどり)するだろうか。――夜の一族たる俺も、彼らの腹具合にまでは責任は持てぬ」

「お役に立ってみせます」

「どう役に立つのかわからぬうちは、連れて行くことなどできぬ。邪魔だ」

「ではお約束ください。お役に立ってみせたなら、お仕えしてもよいと」

約束するまで妖精は手の内を明かすつもりはないようだ。吹けば飛ぶと思っていた目の前のこびとも、その根は意外に頑固であるようだった。

「……役に立つ、立たぬは俺の判断になるぞ。お前は不利な約束を結ぼうとしている」

「約束を願う方が不利なのは常です」

「わかった、アルカードが約束する」

まだ連れて行くとも言っていないのに、妖精はぱっと顔を上げると華やいだ笑顔を浮かべた。よほど自信があるのか、それともなにか別の意図があるのか……。

「では私についてきてください。お約束通り、お役に立ちます」

アルカードは剣を握って立ち上がると、飛び立った妖精から五歩も離れて後についた。

この妖精が俺を罠にかけない保証がどこにあったというのだろう――いまさらその可能性に思い当たって、アルカードは己の楽観に胸中で舌打ちした。そうとも、いかに無力な妖精でも、罠を作ることくらいはできるのだ。

妖精が案内したのは通ってきた回廊のすぐ近く、城壁の内側に据(す)え付けられた防御塔のひとつだった。アルカードに扉を開けさせ、上へ続く螺旋(らせん)階段へは行かずに、階段に寄り添うようにして巧妙に隠してある跳ね上げ扉を指さした。

「お手数ですが、それを開けていただけますか？」

妖精の体から放たれる薄ぼんやりとした光をたよりに、跳ね上げ扉のノブを掴む。鍵はかかっていなかった。

――ここで襲われたら……。

かなりまずいことになるだろう。逃げ道もなく、武器も頼りにならず、魔法はおろか一寸先も見えない。それに加えて、最前からめまいと頭痛が交互に襲ってきており、罠のことなど考える余裕まで失っていた。頭の中に金属製の棒のような何かが埋まっていて熱を持ち、それが脳幹に太い痛みを間断的に与えているような、常ならぬ苦痛。視界は赤みがかり、気のせいかぼやけてきている気さえする。

均衡が破られつつあるのだ――体の中の吸血鬼との戦いに決着がつこうとしている。アルカードはいたずらに焦躁に駆られた。

床下に現れたのは黴臭い螺旋階段で、上に向かっているものよりも数段狭い。湿った壁に体を凭せかけながら闇の中を降りていくと、最下層にはこぢんまりとした玄室のような部屋があった。ここが行き止まりのようだ。

「部屋の中になにか浮いているのが見えますか？」

妖精の言葉に目をこらすと、闇の中に小さな発光する物体が浮いていた。正方形のサイコロのように見える。手を伸ばしてみると、革の手袋越しにあたたかな波動が感ぜられた。「……これはなんだ」

「お手に取って見て下さい」

罠か、と思いつつも、アルカードは手を伸ばした。波動の中に魔力を感じたからだが、たとえ何も感じていなくても唯々として従ったことだろう。もはや思考には霧がかかり、意識もおぼろになりつつあった。

光るサイコロを握った途端、アルカードは両目に鋭い痛みを感じてその場に膝をついた。やはり罠だったか！　妖精風情にいいようにしてやられた怒りが体内にかつてない力を注ぎ込む。

「貴様……」

もやはこれまでかと頭上の妖精を睨み上げた。上首尾にほくそ笑んでいるかとも思われたが、その面は意外にも困惑に彩られている。大方アルカードが滅びなかったのを訝しんでいるのだろう。

「あのう……大丈夫ですか？」

「よくもそのようなことをぬけぬけと――」

妖精に必殺の一撃を見舞おうと剣を振り上げてから、アルカードはようやく周囲の異変に気づいた。――闇の中であったはずが、部屋の中の細部まで見て取れるのだ。

「力が……これは、魔導器か？」

手に握ったサイコロからは、強い魔力の奔流（ほんりゅう）が尽きせず体内に流れてくる。めまいも頭痛も嘘のように失せ、闇を見通す力は蘇り、霧のかかっていた五感は冴えに冴えわたった。

妖精は振り上げられた剣を見て、何が不興を買ったのか皆目わからぬといったふうに地面に這いつくばっていた。

「お、お赦しを……私がなにか粗相（そそう）を……いたしましたでしょうか……」

「いや、すまぬ。顔を上げてくれ」

しゃがみ込んで優しい声をかけると、カエルのように伏して震えていた妖精はそろそろと顔を上げた。

「悪かった。お前が罠を仕掛けたものかと」

しばらく様子を伺ったあと、妖精は恐るおそる「誤解は解けましたでしょうか」と呟いた。

「もちろんだ。――これはひとかたならぬ援助だ、恩に着る。お前はお前が思っていた以上に俺の役に立ってくれたのだ。本当に感謝している」

アルカードは笑顔でいらえた。

そもそも魔導器ひとつにアルカードを満たす魔力の備わっていようはずもないが、満足に物も見えなかった先程とは雲泥の違いだ。これで少なくとも魔物の襲撃から身を守るくらいのことはできるだろう。

「それでは――」
「約束は守られねばならぬ。ならぬが――お前は俺についてくることがどれほど危険なことなのか、十全に理解しているのだろうか」
「もちろんです。アルカード様の御為ならば、元より身命はいといません」
妖精は両手両足を駆使して熱っぽく語った。魔力が少し戻ったせいでより強く魅了されているようだ。アルカードの言った危険というのは、まさにこのことも含んでいるのだが、今それを言っても妖精は理解すまい。
「そういう覚悟を聞いているのではない。お前は行きずりの俺に忠誠を誓ったばかりに、ドラキュラとすべての闇のうからを敵に回すことになるのだ。――俺はこの城を滅ぼす為にここへ来たのだから」
「アルカード様は……御城主様の御血族と聞いておりましたが」
妖精が呆けたような顔で言った。どうやらアルカードが三百年以上前に一度、その「御血族」を倒していることは知らないようだ。意外にも思え、同時に末端などこのようなものかとも思えた。
「そうだ、そしてそのことに矛盾などない。――さあ、答えろ。同族に楯突き、主に弓引く覚悟がお前にはあるのか。無論、もってお前の滅ぶ可能性もぬぐえぬことになろうが」
「……二言はありません。わたしはアルカード様に忠誠を誓います」
おそらく――アルカードは思った。この妖精はドラキュラに会ったことがないのだろう。顧みれば回廊で戦った魔物共のうち、こちらを見るなり逃げ出していった者がいくばくかいた。思えば彼らもこの妖精と同じに、あのドラキュラの抗いがたい魅了に接したことがないのだろう。
たとえ一目でも見ていたとしたら、あの強烈な強制力を伴う魅了に背くことなどできないはず。「わかった、お前の忠誠を容れよう」

妖精は完全に血の上った態でアルカードの周りを飛び回りながら、
「お役に立ちます！」を連呼した。

「イェル。一つ聞きたいことがある」
アルカードはおそらく知るまいと思いつつも、己に言い聞かせるつもりで聞いてみた。
「はい。なんでしょう？」
他にあといくつか魔導器の所在を知っているという妖精の導きに従って、アルカードはすでに城内へ足を踏み入れていた。何とも知れぬ機械や薬品の散乱する施設で本格的な襲撃を受けたが、やはり魔導器のあるなしが勝敗を分けたと言っていい。アルカードは慣れぬ剣を振るい、限りある魔法を駆使して奮戦し、妖精も持ち前のはしっこさで仕掛けを操作するなどして、彼女なりによく主を助けた。何段階もの階層に細かく分かたれたその施設は、どうやら城主のために薬物を開発する錬金術の研究棟のようだった。
呼びかけられてにこにこする妖精の足下には、恐らくはこの研究棟を管理していたと思しき、中級魔族の死骸が横たわっていた。アルカードの姿を見るなり誰何することもなく襲いかかってきた彼も、二つ目の魔導器を手に入れたアルカードの手によって、すでに隠世へ帰っていったところだった。
「オルロックを知っているか？」
「……御名だけは」
やはり知らぬか――アルカードは落胆が顔に出ぬように努めた。
アルカードにはドラキュラの元へ真っ直ぐ進むつもりなど毛頭なかった。彼には縁遠いこの城にも、協力を仰げそうな知己の二、三はいるのだ。
その筆頭がオルロックだ。同じ夜の一族であり、幼い頃からの気の置けぬ友人でもあった。アルカードと同じく人間に一定の理解を

示し、ドラキュラの苦しみを我がものとし、アルカードと共に吸血を拒んだ、夜の一族のなかでも珍(めず)らかな存在である。その実力もよくアルカードと伯仲(はくちゅう)する、ドラキュラ討伐に望みうる最大の力の持ち主と言えた。

――オルロック……今はなにをしているだろう。

最後に逢ったのは三百年以上前のあの日のことだ。ドラキュラ城の最上階で侵入者達を待ち受けていたオルロックは、人間達の中にアルカードがいるのを見て取るや、その襟首を掴まんばかりにしてこちらの翻意を懇願した。お父上を討とうなどと常軌を逸している。お前は本当にやり遂げるつもりなのか？　その前に私が立ちふさがったとしても？

どうか長年の友誼(ゆうぎ)に免じて、この私に免じて、ここは退いてほしい――そう言って涙するオルロックに、俺はなんと答えたのだったか。確か運命だの、宿命だのと言葉少なに呟(つぶや)いていたような気がする。ドラキュラへの忠誠からではなく、俺への友情から親身になって説きさとしてくれた親友に、いったい他のどのような言葉をかけてやれただろう。

「私にドラキュラ様を見捨てることなどできぬ。だがお前と戦うことなどなおできぬ」

今も耳に灼きついて離れぬ、あの声と共に消えていった友は、今も変わらぬ情を俺に持ち続けてくれているだろうか。

「アルカード様？」

「……いや、知らなければいい」

アルカードは頭を振って感傷を追い払った。フラスコの破片を踏み砕いて魔物の亡骸を横切ると、彼が最後まで退(ひ)かなかった木の扉の前に立ち、形ばかりおろしてあった錠ごと扉を吹き飛ばした。中には案の定、鈍い光を放つ魔導器が浮いている。

これで三つ目――見慣れた竜公(ドラクル)の家紋が刻まれたメダリオンを握りしめると、身のうちに新たな力（なくなったものが恢復しただけのことなのだが）が湧いてきた。

「おめでとうございます」
妖精は無邪気にぱちぱちと拍手をしている。振り返って労をねぎらうアルカードの声は明るかったが、その心中は以前沈んだままである。
城内の各所に点在していると思われる魔導器は、おそらくは城を維持するために配置されたものだ。建築のことわりをことごとく無視して平然とそびえる悪魔城、それの崩壊を防ぐかすがいとして作り出されたものに違いない。そして作り出した張本人は、他ならぬドラキュラその人――いわばアルカードは敵の力を借りて戦っていることになる。
――ドラキュラ城はまさに広い。魔導器はまだ数多存在するはずだ。しかし――いったいいくつ集めれば足りる？
同行していた人間達を見るたび吸血衝動に苦しんでいた三百年前でさえ、今のアルカードとは比べるべくもない力を持っていたのだ。夜の一族は樹木が年経るにつれて年輪を増やすように、その力はおおまかにどれほどの時を生きたかで測れる。かの三人の聖人達と力を合わせてなお敵し難かったドラキュラは、アルカードにとって空白であった三百年の間になにがあったにせよ、その力は増すことはあっても減じていることなどあり得ないだろう。
それに加えて二度と目覚めるまいと玄室に入ったアルカードには、いまや年輪の功どころか三百年分の負債が重くのしかかっている。人の生き血という、夜の一族にとってもっとも基本的な糧（かて）を拒み続けてきた報いなのだから、いまさら甘んじて嘆することもないのだが……。
「……それにしても、三百年の年月の重さよ。イェル」
妖精はよくわからないなりに「はあ」と相づちを打った。
「蔵書庫の場所はわかるか？」
考えるのは止めよう、今は行動するときだ――アルカードは頭を切り換えた。
「はい、ここからさして遠くない位置にあったかと」

幼時をこの城で過ごしたアルカードも、数百年の時を経て戻ってみればまったくの門外漢にひとしい。ドラキュラ城は復活するたび、いや、今もどこかでその内部は変化しつつあるのだ。聖人君子と悪鬼畜生の両面の貌をもつ城主に鏡あわせのごとく、その居城は頻繁に表情を変えてとどまるところを知らない。

「あのう、もし覚えておりましたら聞き流してください。わたしの知っている最後の魔導器はお堂にあります。方角的には真反対になりますが……」

「覚えている。蔵書庫へはまた別の用がある」

あれを頼むよりほかないか――まずは何を措いてもオルロックの行方を捜したかったが、居場所も解らぬようではそれもままならない。道案内を頼む、と妖精に声をかけると、アルカードは懐の中の重みを確かめるように軽く跳ねた。

――金が足らぬかも知れぬ。

アルカードはふと思いついて足を止めると、右手に提げていた剣をつぶさに眺めた。まさにささらのごとくといった態で、遠からず折れるかノコギリ状の棍棒に生まれ変わってしまうことだろう。これの代わりも用立てるとなれば――いったいいくら要求されるかわかったものではない。

「イェル。こちらへ」

アルカードが手招きすると、妖精は尻尾を振る犬のように嬉々として飛んできた。

「イェル。蔵書庫へ行く前に、お前にやってもらわねばならぬ仕事ができた」

「はい。なんなりと。わたしにできることであればなんでも、できないことでも――」

勇み立つ妖精を宥めると、アルカードは宙を指さした。

「あの彫像を見てくれ」

妖精が振り返って見上げた先には、錬金術にふさわしからぬ宗教的な彫刻が二人を睥睨していた。周りを見渡せばそういったものは

大小取り混ぜていくらでも散見でき、むしろこの施設は別の目的で生まれた部屋に移設されたものなのかもしれぬとアルカードは思った。

「はい。ええと、あれでしょうか」

「そうだ。いや、あれでもそれでも構わぬ。彫刻の頭や首に石が埋め込まれている。赤や黄や、色々あるな。見えるか？」

「はい。よく見えます」

「うむ。――あれを剥(は)がしてきてくれ」

「はい。は？」

妖精は力いっぱい頷(うなず)いてから、突如夢から覚めたように目を見開いた。

「うむ、石を集めてくれ。――これを使うといい。これならお前でも持ち運べるだろう」

無事だった長机の上から金属製のへらのようなものを選び取ると、目を白黒させる妖精の前へ差し出した。

「はあ……あのう、聞いてもよろしいですか？」

「俺に答えられればいいが」

「石など何に使うおつもりですか？」

「交換する」

「……あのようなものを喜ぶのは、カラスか人間だけです」

「お前は賢いな。さだめし回収作業もはかどろう」

妖精は褒められるとくるくる回りながら盛大に照れた。五回転ほど回った時点でぴたりと止まる。

「お知り合いにカラスが……？」

「うむ、惜しい」

それだけ言うと、アルカードも手近な彫像に取り付いて目玉をほじくり出した。妖精は手元のへらを見、アルカードを見、頭上の彫像を見上げると、首を傾げながら目玉めがけて飛んでいった。

広い室内の彫像すべてが盲目になる頃には、両手いっぱいに抱えるくらいの石が集まった。
「よくやった。これだけあれば十分だろう」
「……それはようございました」
アルカードは盾を覆(おお)っていた布でそれをくるむと、マントに隠すようにして小脇に抱えた。妙に憔悴(しょうすい)した様子の妖精に再度道案内を頼み、自身も歩き出そうとしたとき、室内の空気の匂いがにわかに変わった。
「アルカード様」
「……人間がこの近くに来ている」
妖精も気配の変化を敏感に感じ取り、身を硬くしてアルカードに寄り添う。
つい先程激戦を繰り広げた室内には、隠れようにも障害物のたぐいはほぼ全壊していた。あれこれ思案しているうちにも背後から足音が響いてくる。重い長靴(ちょうか)の音で、人数は多すぎて靴音からは把握できない。これほど大多数の人間がドラキュラ城にいること事態、至極異様であった。
足音がぱたぱたと止むと、はたして西側の入り口から妙な棒がにゅっと突き出された。棒はゆっくりと左右に振れると、続いてその棒をこれまた妙な格好で構えた人間がそろそろと入場してくる。一人、二人、三人……中途(ちゅうと)から十人単位でなだれ込んできたので、アルカードは数えるのを諦めた。
人間達はいずれも男で、お揃いの角張ったお仕着せのような服を身につけていた。腰の白い腰帯に剣を下げ、手にはいずれも妙な棒、というよりは杖の出来損ないのようなものを携(たずさ)えている。なにかの儀式だろうか、先端にトゲが付いているのは、あるいは短い槍なのだろうか。三百年もの眠りはこのような場面でも認識の弊害(へいがい)を生んだ。
「エリオット様、ここは安全のようです」

人間の群から若い男の声が上がると、各々地面に背嚢（はいのう）とカンテラを置き、杖を壁に立てかけて寛（くつろ）ぎだした。男達とは正反対の部屋の隅（すみ）にいるせいで、向こうからこちらは見えていないようだ。

「皆、休むのはまだ早い。部屋の入り口の数を調べて、各五名ずつの歩哨を立てろ。装填を確認し、銃は常に手の届く位置に置け。油断すまいぞ」

一拍置いて、エリオットと思しき男がよく通る声で言った。声に機敏に反応し、十名ほどの人間が立ち上がって辺りを探索し始めた。そのうちの二人が真っ直ぐこちらへ歩いてくる。気づかれる前にアルカードは息を吸い込んだ。

「まこと油断すまいぞ、エリオット。この部屋は未（いま）だ安全ではないのかも知れぬのだ」

アルカードの声に、群れ集まっていた人間達は一斉に杖を手に取る。こちらへそろそろと近づいてきていた二人は慌てて飛び退ると膝をつき、部屋に入ってきたとき人間達がそうしたように杖を構えた。

「誰だ」

エリオットの落ち着き払った、しかし鋭い声が飛んでくる。アルカードは声のした方へゆっくりと歩んだ。

「……エリオットに忠告する者だ。お前にはさしあたって休憩よりも、そちらの方が必要のように思われる」

人間達はアルカードの正面と斜め後ろの二手に分かれると、全員が一斉に杖を構えた。エリオットだけが腰の剣を抜き、その切っ先をこちらの胸に向けている。

「……では私に忠告する者よ、忠告のお返しをして進ぜる。この部屋は貴様にとってなお安全ではないのだ、とな。――名乗れ、闖（ちん）入者よ」

この男が指揮官であることに疑いはあるまい――揃いの服こそ同じだったが、頭に戴（いただ）く帽子には他の者のつけていない羽根飾りが揺れており、口ひげを蓄えた厳しい顔も、見渡せる限りの男達よりは

明らかに年かさに見受けられる。
「お前の故郷では先に居座っていた者を闖入者と呼ばわるのか。あまつさえ人の名を尋ねるのに剣の刃をもってするのか。――お前の作法にとやかく注文をつけるいわれもないが、それならばこの城はお国の常識にかからぬということだけ、先の忠告に付け足そう」
エリオットの突きつけた剣を胸で受けるようにして、アルカードはきっぱりと言い放った。
「……銃を下ろせ。バイアン、グレン、この男の武器を取り上げろ」
睨み合うこと十数秒、エリオットは後ろの男達にそう命じると剣を収めた。
「下郎！　卑賤の手でこのお方に触れるなっ！」
背後から妖精が飛び出すなり、例の大声で人間達を威嚇した。眼は真っ赤に輝き、その貌は平素の愛らしさとは結びつけようもなく歪み、牙を剥きだしている。その小さくとも凶悪なかんばせ――巷間弱小と侮られる妖精も、闇のうからに違いはないのだ。
「イェル、やめろ。――バイアンにグレンといったか。武器を渡す、受け取れ」
ギイギイと威嚇音を上げる妖精を掴んで遠ざけると、ぼろぼろに刃こぼれした剣を手渡した。どのみち近い将来使い物にならなくなるはずだったのだ。彼らに処分してもらうのもいいだろう。
「……それは魔物か？」
エリオットが妖精に向かってあごをしゃくった。
「重要なのはお前達に敵意を持つか持たぬかではないのか？　人間達の言に従えば、この城には魔物しか住んではおらぬそうだが、当節は魔物よりよほど礼儀を知らぬ人間が増えた。余人の住処を我が物顔で占拠し、武器をもって誰何するは非礼であるということくらい、この小さな魔物ですら知っている」
アルカードの険のある声にさすがに無礼を悟ったか、エリオットはしばらくアルカードを睨んだのち、言葉を改めた。

「……失礼した。死闘に次ぐ死闘で気が立っていてな――貴殿の言われるとおりだ」
被っていた帽子を脱ぐと、アルカードと妖精に向かってきっちり二回頭を下げた。
アルカードは真実激怒していた。が、人間達の非礼に対してではない。
あるいは剣を取り上げてくれたのは幸いだったのかもしれぬ――我が身を刺さんとするほどに、アルカードは己の浅ましい吸血鬼の性(さが)を呪っていた。
男達が部屋に入ってくる前から彼らの体の匂い、代謝の匂い――そして血の匂いを嗅ぎ、膨れあがる吸血衝動に抗しかねていたのだ。彼らを様々な方法で追い詰め、切り刻み、吹き出すあたたかい血を口中に含むことだけを、アルカードは飽かず夢想していた。
おぼろな明かりで顔の判別がつきがたいのは幸いだった。アルカードはエリオットと会話しているあいだ中、ずっと彼を食物を見る眼で見ていたのだから。
「改めてお聞かせ願いたい。貴殿の――」
「エリオット様！　これを」
先程アルカードの剣を預かった二人組の片割れが切迫(せっぱく)した声を上げた。アルカードの渡したなまくらをカンテラで照らし、エリオットに示して見せる。
「……貴殿、これをどこで手に入れた」
エリオットの言葉に再び険が戻った。
「城の入り口で拾った」
アルカードは一度深呼吸をすると、事実だけを簡潔に述べた。
エリオット達はアルカードの言うことを全面的には信用していない様子だった。いったん部下達の方へ向き直り、「さっき言った通りだ、歩哨を立て、休める者は休め」と命じ、自身も懐からパイプを取り出した。
「吸われるか？」

「結構だ」
エリオットは肩をすくめるとその場に座り、手に持ったなまくらの来歴を語り出した。
「この剣は別働隊に配属されていた男のものだ。――ああ、我らがここに来た理由を明かしていなかったな」
アルカードにはどうでもいいことだった。それが態度に出たのか、エリオットは「いや、そんなことはどうでもいい」と完結してしまう。
「そんなことよりも――叶わぬを承知で、一つお願いしたいことがある。貴殿がどこへ行かれるかは知らぬが、道中それとなく気をかけておいてくれれば、それでよいのだが……」
「何人だ？」
「何？」
アルカードの呟きに、エリオットは一瞬言葉に詰まって聞き返した。
「部下の数だ。相当数を連れているようだが」
この部屋にひしめいているだけでも五、六十人はいるだろう。さらに別働隊とやらを勘定に入れれば、率いてきた数は百や二百の大台を超えるかも知れぬ。
「私が二百、別働隊が二隊で、各百五十人を統率している。いや、統率していた」
五百人といえば、城の中に入れるにはちょっとした大軍だ。ドラキュラ率いる人外共には全くの寡兵に過ぎないが、はたして事情を知らぬ人間がどう考えるかはアルカードの想像に余る。
「我らが城に攻め入ったのは昨日の未明だ。たった一日――たった一日で我が隊の兵力は四分の一、つかず離れずしていた別働隊のうち、一隊は壊滅を確認した。もう一隊の方も恐らくは……」
アルカードの剣が物語った、というわけか。エリオットのかんばせは薄暗いカンテラの明かりに舐められて、その憔悴の陰をより濃く落としていた。

「……頼みとやらを聞こう」
エリオットの顔に少しだけ赤みがさした。
「こうなってはもはやドラキュラ討伐は失敗だ。だが、我らにはどうしても引き返せぬ理由がある。討伐の頼みの綱であり、我らの希望――アリエルお嬢様を敵中に見失ってしまったのだ。お嬢様をお連れせぬ限り、この城を出るわけにはゆかぬ」
やはり目的はドラキュラ討伐にあったか――真実、悲壮な声だった。この隊は遠からず全滅の憂き目に遭うであろうし、そのアリエルとやらが生きている可能性などほぼ無に等しい。『お嬢様』などと呼ばれる類(たぐい)の人間がこの城で命を繋(つな)ぐことなど不可能だ。
「お嬢様はお若くしていらっしゃるが、立派なヴァンパイアハンターだ。不思議な力をお持ちだ。今もどこかできっと生きておいでに違いない」
吸血鬼(ヴァンパイア)――人間達が夜の一族を呼び習わすのに、これほど侮辱的なやりかたなどないだろう。アルカードにとって半分は人事でも、もう半分は多分に怒りを禁じ得ない呼称である。
「わかった。道中、それとなく探しておこう。わかる限りの特徴を教えてくれ」
「背中まで届く黒髪で、小柄、色は透き通るほど白い。家令たる私が言うては贔屓(ひいき)とも取られようが、たいそう可憐な方でな。武器はお持ちでないが、緋色の革でできた鎧をつけておられる。一番の特徴は瞳だ。何色とも取れぬ不思議な光彩で、ヴァンパイアハンターたる力もそれによるものだという話だが――」
アリエルを語るエリオットのかんばせに、先刻の陰は見つけられない。訥々と語る顔には時折微笑が浮かび、その端々にいかにも人の良さげな細かい皺が現れる。
家令ということは、大方五百人の隊伍は家中の者に募兵を合わせた急ごしらえのものだろう。エリオットはアリエルとやらの護衛のつもりで兵を指揮してきたに違いない。
「――ヴァチカンに信仰を疑われれば、出兵を拒むことなどでき

なかった。アリエル様はまだ十四なのだ。神敵を前に怯むことこそなくとも、その内実は虫も殺せぬお優しい御気性だ。御本心を言えば、このようなところに来たくなどなかったに違いあるまい……」

エリオットの語りは愚痴になり、独白になり、最後は声を詰まらせて悔恨になっていった。

「……特徴はそれだけか？　話が終わったのなら、俺はもう行く。俺の目的を果たすためにも、そのアリエルを助けるためにも、行動は速やかなほうが望ましい」

エリオットは洟をすすり上げると立ち上がった。その顔にはもうつかのま兆した感傷の色はどこにも伺えない。

「もしアリエルお嬢様を見つけ出したなら、我らへの知らせは無用だ。貴殿の能う限りお守りして差し上げて欲しい。近隣のどのような小村へでもよい、必ず安全な場所へお移ししてくれ。頼む」

「請け合った」

いきおい遺言のような響きを伴うエリオットの言葉を背中に受けて、アルカードはうべなった。

「……エリオット、奴らは匂いを嗅ぎつけてやってくる。数十人単位で動いていては、早晩全滅は免れぬだろう。たとえ個々人の生存確率は落ちようとも、命に代えるべき任務があるのなら、俺としては単独行動を勧める」

「ご忠告痛み入る。――貴殿に代わりをお渡しするのを忘れていた」

これを持って行って欲しい、という言葉に振り返ると、目の前に鞘がらみの一振りの剣が向けられていた。

「私の剣だ。お嬢様に示せば、貴殿の身の証にもなろう」

「わかった。――ではさらばだ。願わくばお互いの目的が十全に果たされんことを」

剣を受け取ると、アルカードはそれきり振り返ることもなく部屋を出た。

――アリエル。ヴァンパイアハンターか。

鞭を振り回す黒髪の少女を想像して、アルカードは軽く頭を振った。

「随分と……人間にお優しいのですね」

一時間ほども歩いただろうか、周りが無数の背の高い本棚に囲まれるようになったころに、それまでずっと押し黙っていた妖精が口を開いた。

蔵書庫に入ってからは魔物の襲撃がぴたりと止んだ。

無尽の蔵書類を傷めぬようにとの城主の配慮からであろうが、ここが安全であるもう一つの理由をアルカードは知っている。この蔵書庫の主は人間でありながら永遠の命を与えられ、数多の蔵書と財物の管理のために、特にドラキュラがここへ住まわせているのである。人の身でありながらそのようにして取り立てられている者も、昔はもっとたくさんいたのだが。

「すみません……皮肉ではないのです。ただどうしてもわからなくて」

妖精は自分の言葉に返答するようにそう付け加えた。恐らくその疑問をぶつけるための言葉をずっと選んでいたのだろう。

「妙か。俺が人間と接するのが」

「はい、妙です」

正直なやつだ――アルカードは苦笑した。

「では話しておいたほうがよかろう。これから向かう場所にも人間がいる」

妖精は露骨にいやな顔をした。

「協力者になりうる人物だ。好きになれとは言わぬが、胸中をさらけ出すことはせぬがいい。あれに臍(へそ)を曲げられてはゆく先もおぼつかぬ」

はあ、と生返事を返すも、妖精のふくれ面(つら)は直らなかった。

足音が無数の本棚に反響して、まるで大勢で歩いているように聞こえる。一列数十架の天井まで届きそうな棚が、アルカードのはるか背後から遠く行く先までずらりと並んでいるさまは、幾年を経ても壮観と言わざるをえない。この蔵書すべてを管理し、どこになにがあるかまでを把握している司書は、正しく異能者と言えるだろう。ドラキュラは後年、執拗に人間を目の敵にするようになっても、才能の登用にかけてだけは公平であり続けたのだった。

ふと違和感を感じて、アルカードは天井を見上げた。

「……イェル」

「はい」

「何か……匂わぬか」

古い本や木の香りに混じって、異質な香りがかすかにする。アルカードは足を止めると辺りに首を巡らせた。

「わたしには特に……」

アルカードは匂いのする方へと、本棚の列に折れていった。進むにつれて徐々に香りが強くなっていき、強くなるにつれて止めようもなく足は速くなる。

――甘い、なんというかぐわしい香り。爺が変わった香水でも出したのだろうか。

「アルカード様、お待ちを――」

妖精の声も耳に入らない。頭の片隅で何かが激しく警鐘を鳴らし、それに覆い被さるように太い痛みが襲う。視界の端が赤く染まっていく。アルカードはなかば駆けだしていた。

――ああ、そうだ。この香りは……。

「どうなされたのですか？　いったい――」

「待ちなさい」

追いかけてきた妖精の背後、幾重にも並ぶ本棚の陰から人影がすべり出てきた。

――人間の……女！

年頃は少女と女の中間といったところだろうか。深緑色のベルベ

ット地でできた服は胸繰(むなぐ)りが深く開き、軽装と言うよりはもはや薄着と言っていい。後ろで結った見事な金髪の巻き毛が剥き出しの首筋にかかり、その白磁の白さを際だたせている。

アルカードは立ち竦(すく)んだ。

見るな、眼を塞げ！　この場から走り去れ！　懐の魔導器を砕けんばかりに握りしめて、アルカードは今(いま)し体を突き破ろうとする吸血衝動を抑えるためだけに、持てるすべての力を己の内奥(ないおう)に集めた。それでも見開かれ充血した瞳は、杭で固定されたかのように女の首筋に留められ、足は意志に反して一歩、二歩と女のほうへ近づいてゆく。眼はもはや女の喉に走る滑(すべ)らかな血管のみをかたくなに見通し、耳はそこを流れる血潮のせせらぎのみを捉(とら)えた。

「……貴方、闇の力を持っているわね。何者？」

女が訝(いぶか)しげな声を上げる。答える余裕などなく、アルカードは口中で伸びてきた牙を歯茎(しけい)に刺した。痛みによって衝動を逸(そ)らそうとしたのだが甲斐はなかった。いまや己の血の味すら他人の血への渇望を想起する。

「見たところ人間のようだけど……この城に来た目的はなに？」

――目的？　そうだ、俺には目的があった。

その瞬間、内なる力のせめぎ合いは拮抗し、不利であったはずの人間の心が力を増し始めた。そうとも、俺には目的がある。ドラキュラを滅ぼすこと。そしてなにより――俺が第二のドラキュラにならぬこと！

アルカードは歯を食いしばると、マントの中で右手を左腕にまわし、五指でその肉を深くえぐった。痺れるような激痛が脳髄を貫き、アルカードを縛めていた吸血鬼の性をつかのま押し潰す。

「この城を……消すことだ」

背筋を伸ばして視線を切り、ようやく娘の全体像を視線に収めた。

――辛(から)くも打ち勝てたか。だが、魔導器があと一つでも足りなかったら俺は……。

「あら、私と同じね。ま、貴方にそれができるかどうかは別とし

ても、その言葉、信じてあげるわ」
私はマリア、と女は破願(はがん)した。生命力に溢(あふ)れる美しい娘だとアルカードは思った。
――ドラキュラはまさしく、こういった娘の血を好む。
「貴方は？」
ドラキュラと己にいまさらながら負の共通点を見出し、アルカードは自分でも大人げないと訝しむほど不機嫌になった。
「……アルカードだ」
無愛想な紋切り口調に、マリアは大げさに口をとがらせて見せた。
「あら、無愛想なのね。まあいいわ。――アルカード。貴方、この城に詳しい？」
「……ここは悪魔城で、観光地ではない。お前のような娘が来るところでもない。――お前が知らなければならない城の詳細など、そのくらいだ」
はたしてマリアは相貌に血を上らせた。わりと短気な性分のようだ。
「言ってくれるじゃない。貴方のいう『お前のような娘』がどんな娘か知らないけどね、私がここにこうして無傷でいること自体、貴方のその間違った認識を改めてくれそうなものだけど？」
「そうだな、今こそ認識を改めよう。――速やかにこの城を去れ。去ったのちは二度と来るな」
そう言うと、無表情に事の成り行きを眺めていた妖精を手招きし、アルカードは踵(きびす)を返して奥へと歩き出した。
「ちょっと、待ちなさい！　待ちなさいったら！」
マリアは完全に頭に来たらしく、わめきながら後をついてきた。
「言うだけ言って逃げるなんて、なんて人なの。男なら男らしく……」
言葉を切るとアルカードを追い抜いて顔をのぞき込んでくる。
「……貴方、男、よね？」
アドリアンは女の子みたいねえ、と母がことあるごとに言ってい

たのを思い出して、アルカードはなんとなく情けない気分に陥った。マリアの不埒な発言は完全に無視した。
「ねえ、ここは魔物がいないようなんだけど、なぜかしら」
「……」
「アルカードは以前、ここに来たことがあるの？」
「……」
「貴方って本っ当に――！」
「着いた」

蔵書庫の突き当たり、北側の隅に、壁と同じ色の目立たない扉があった。マリアが目を白黒させているあいだに扉に手をかけ、ノックもせずにそれを引く。
「久しぶりだな、爺」
部屋の奥側にしつらえた机に座り、猫背で本に目を落としていた老人が、声に反応してちらと顔を上げた。上げた顔を戻そうとして動きを止め、鼻の上に置いた眼鏡を上げ下げしながら椅子から立ち上がる。
「これはこれは……お懐かしや。どなたかと思いましたぞ、アドリアン様」
「息災のようだ。ここも変わらぬ」
アルカードの笑顔に、老人はおどけて帽子を持ち上げた。その下は見事な禿頭である。
「はてさて、アドリアン様にはいよいよお父上の元へお戻りですかな？」
「無論ちがう。それではこの城が現世に現れたこと、爺は知らなんだな」
ほうほう、と老いた司書は感心したように頷いた。わりに驚いているふうには見えない。

「いやはや、なにぶん籠もりきりでございましてな。この城の御本で知らぬ事などないのですが、世情にはとんと疎いのでございます」
あごひげをもぐもぐさせながら、他人事のようにあっけらかんと語るその口調には、彼の言うところの『世情』になんら未練のないことが伺える。この老人は異能者であると同時に世捨て人でもあった。
「それにしても――お戻りになられぬのでしたら、いったい何のご用でいらっしゃったのですかな？」
「悪いが手を貸して欲しい」
司書の目に狡猾な光が宿った。相変わらずの好々爺の顔に目だけが炯々と光っている。
「これは……さて、御本であればいくらでもお貸しいたしますがなあ。ふうむ」
「頼む。この城では他に頼る者もおらぬ」
「お言葉ですが、ドラキュラ様に牙を剥いたお方に協力するわけには……私とてドラキュラ様のお罰を被るのは御免でございますからなあ」
そう言ってとぼける司書の顔には、全く別の言葉が書いてある。アルカードは半ば以上予想していたその言葉を読み上げた。
「金だろう？　爺。ここまで読みやすい顔も考えものだ」
はたして司書は高らかに笑い出した。
「無論、わかっている。それなりの礼はする」
「そうですか！　いやはや、ドラキュラ様に対し奉り弓を引くなどとは畏れ多いことでございますが、お小さい頃より存じ上げているアドリアン様の御為なれば、さて、ここは老骨も一肌脱がずにはいられますまい。どうぞなんなりとお申し付けくだされ」
立て板に水とはまさにこのことで、司書はぺらぺらとまくし立てると立ち上がり、魚が水を得たように矍鑠としだした。肩の後ろに浮かんでいた妖精が「下郎」と呟く。

「アルカード」
司書の言葉を切れ目を縫(ぬ)って、マリアが小さく声をかけてきた。
「あのお爺さんは何者？　人間？」
「守銭奴だ」
「……答えになってないわ」
「アドリアン様、とりあえずは何を御用立てましょうかな？　なんでもございますぞ」
司書が部屋の一角に据え付けてあった燭台を引くと、奥の本棚が左右に開き、雑多な物品が山積みになった広い空間が現れた。
「ドラキュラの作った魔導器を知っているか？」
「はい。もちろんでございます。それをご所望ですかな？」
「そうだ。あるだけ頼む」
「魔導器、魔導器、と。――魔導器は高くつきますぞ？　ええと……」
いやらしい笑みを置き土産に、司書は目当ての品を探すために隠し部屋に入っていった。
「……ねえ、アルカード」
「……なんだ」
「魔導器って――」
「知らぬが身の為だ、マリア。人間に扱える代物ではない」
マリアの言葉を遮(さえぎ)ってぴしゃりと言い放った。
「でも――」
「くどい。俺は去れと言ったぞ。死にたくなければ去れ。死にたいのならここから出て好きなところで横になれ。俺は手伝えぬ」
正直、マリアに傍(そば)にいられるのは辛かった。吸血衝動に心は安まらず、何より嫌ってもいない相手に辛辣(しんらつ)な言葉を投げかけるのは存外に耐え難いのだ。母譲りの優しさだと自分に言い聞かせても、アルカードは自分の繊細な一面があまり好きではなかったのだが。
「アールカード」
「いい加減に――」

妙な節をつけて呼ばれて、これは引きずって外に放り出すしかないかと振り返ると、指先に小さななにかを挟んで満面の笑みを浮かべるマリアとはち合わせた。
「魔導器って、これでしょう？」
「……なぜ人間がそれに触(さわ)れる」
アルカードは呆然とマリアの麗貌を見やった。
魔導器はそれに秘められた魔力を受け入れられるだけの器を持った魔族でなければ、触ることはできない。小物が不用意に触ればその体ははじけて四散する。それは人間でも同様のはずだ。
「さあ？　なんででしょうねえ。貴方の認識が間違ってたこと、いまさらだけど認める？」
「……認めざるをえまい」
マリアはただの人間ではない、ということだ。考えられるのは闇のうからを狩るハンターか、キリスト者(もの)達が密かに選りすぐった魔導師か――いずれにせよ、魔導器の魔力をはじくことができるこの女は、かなりの力の持ち主なのだ。
「……それは人間が持っていても仕方のないものだ。こちらに渡して貰おう」
「へえ？　私、気に入ってるんだけどなあ、これ。ほら、ここのところの細工なんて綺麗だと思わない？」
「……思わん」
「あっそう、じゃいらないのね。ああよかったあ」
マリアは多分に演技の入った大げさな仕草で六芒星印(ペンタグラム)を懐に締まった。
――まさかこの城で、二十年も生きぬ娘になぶられるはめに陥ろうとは……。
「……いや、そうだな。……綺麗だった。今思えば」
「そう？　ひょっとして嫌々言ってない？　貴方っていつも仏頂面なのねえ。たまには笑ってみたら？　ほらほら」
「……爺、魔導器はまだか」

一つくらいなくても違いなどあるまい――多分に後ろ髪を引かれながらも、アルカードはマリアに背を向けた。当のマリアは腹を抱えて無邪気に笑っている。

「はあ、ああおかしい。――冗談よ、アルカード。お詫びにこれは貴方にあげるわ」

まだ笑いに細かく震えながら、マリアは手のひらに魔導器を乗せてよこした。アルカードは半眼でそれを摘(つま)み上げると、「礼を言う」と呟いた。その様子を見て何がおかしいのか、またもマリアは笑い出す。

四つ目の魔導器はアルカードの肩から力を抜いてくれた。渇きはより御(ぎょ)しやすくなり、そのせいかふと唐突に、今のような渇きとは無縁だった幼少時代を思い出した。

それは思い出せる限りで一番古い、一枚の絵のような思い出だった。まさしくこの司書室での出来事で、まだ子供だったアルカードの後ろには母がいた。たしか本を借りるか返すか、そんなたわいもない用事で司書の元を訪れていたはずだ。アルカードがなにかを司書に言い、彼がそれに答えて冗談を言う。母がそれを聞いて笑う、という、実になんでもない日常的な記憶だったが、なぜか今とても懐かしく思い出されてならない。

――さて、あのとき俺はなんと言ったのだったか。

「いや、お待たせいたしました。ドラキュラ様が保管をお命じになったのは、この二品でございます」

司書が重たげに抱えて持ってきたのは、二メートル以上もある長大な箱と、その上にちょこんと乗った宝石箱だった。

「小さい方は私には触れませんで、まあ、どうぞ開けてお手に取ってみてくだされ」

長方形の箱の中身は槍だった。触ってみた感じでは槍はまったく武器として作られており、穂先に埋め込んである石の方が魔導器のようである。

「これは血か？」

宝石箱から出てきたのは鎖に繋がった、ちょうど妖精の頭くらいの球形の水晶で、中空の中には赤い液体が封入されていた。
「ドラキュラ様の血でございます。――その魔導器は別して強力ですぞ。ま、そのぶん値も張りますが」
「……」
なんとなく所有がためらわれる一品ではある。が、贅沢を言ってもいられない。
「おお、よくお似合いですぞ。――実を申せば、その槍はドラキュラ様御自らお作りになったものでしてな。それと、その柄の文字――」
槍の柄には螺旋状に、上半分がラテン語、下半分がスラヴ語でみっしりと聖言が刻まれていた。ちょうど二言語の間に一回り分の余白があり、装飾的な字体のアルファベットがぐるりと柄を一周している。
「これは……」
「それをお彫りになったのはリサ様でございます。――妙でございましょう？　その真ん中の文字、ドラキュラ様の御名が逆に記されているのです。単にお間違えになったのだと思いますが」
柄の中央には「ＡＬＵＣＡＲＤ」と彫ってあった。
昔日の母に今日という日のあるを予測できたとは思えない。それでもこの偶然か必然か定かではない一致に、アルカードは運命を感じた。
「……切れ味に関係はあるまい。この二品、貰おう」
司書は喉を鳴らすような笑い声を上げた。
「ありがとうございます。――他ならぬアドリアン様の御用立てですからな、お代のほうも精一杯泣かせていただきましょう」
「それはありがたい」
そんなつもりは毛頭ないのだろうが、皮肉のつもりでアルカードは答えた。
「金が少しと、石だ。足りるかどうかはわからぬが」

懐から金貨の袋を取り出し、小脇に抱えていた包みを机の上に置く。このときの司書の動きは一見の価値ありで、特に金貨を数えて懐に仕舞うまでの速度などは魔物じみたところがあった。

「さて、お次は……」

まるで金勘定と宝石の吟味が食事の代わりとでもいうように、司書の髭面は舌なめずりせんばかりである。使う用途もないのになぜ金儲けを喜ぶのだろうと、アルカードはつい来るたびに同じ事を考えてしまう。

「アルカード様」

妖精が耳元で囁く。司書はもうアルカードのほうなど見向きもせず、机の上に広げられた数多の石を蝋燭の炎に透かして、ためつすがめつ眺めるのに忙しい様子だ。

「……なぜ報酬など約束するのです。あんな老人、力ずくでなんとでもなるかと思いますが」

石集めに意趣を持ったのか、妖精の提案はいつになく過激であった。

「お前が取ってきてくれた石でこの槍を購えた。お前が贈ってくれたようなものだ、感謝している」

そう言うと指先で妖精の小さな頭を撫でてやった。この人間嫌いのこびとに何を言っても納得すまい――アルカードは搦め手で攻めることを覚えた。

「よい石ですなあ。しかし細かい傷がついていますぞ。無造作に袋に詰めて持ち運ぶなどもってのほかでございます。ああこれは……」

司書は机にかじりついたまま、時折思い出したように注釈を入れるほかは何も耳に入らないようだった。当分感激の涙で震えるのに忙しそうな妖精を置いて、ちろちろと机の上の石を盗み見ていたマリアに声をかけた。

「なに？」

「本当にこの城に挑む気があるのなら、ここでもう少し装備を調

えていくことだ。――あまりにも無防備に過ぎる」
マリアの格好は、アルカードの（三百年以上前の）常識からすれば半裸にもひとしいものだった。彼女の身につけたベルベット地のドレスに緋色の腰帯は、どう控えめに見ても防具としての効果など期待できそうもない。そのうえ脚も首も二の腕も剥き出しで、これではほんの少しどこか引っ掛かれただけでも、出血による命の危険はぬぐえないだろう。
「似合わない？」
マリアは自分の体を一通り眺め回すと、両腕を開いて見せた。この女はなにを言っているのだろう――アルカードは心底呆れた。
「この城において、ということであれば、まったく似合わぬ。裸と同じだ」
「……そりゃあね、この上にも一枚着ていたわ。でもなくしたんだから仕方ないじゃない」
マリアはさすがに憮然（ぶぜん）とした。
「爺、石は余りそうか？」
司書はまったくうわの空で、顔も上げずに「傷次第でございますが……ええ……おそらくは……」と途切れとぎれに呟いた。
「余ったらでいい、この女になにか羽織（はお）るものを見繕（みつくろ）ってやってくれ」
その場にいた全員が同時にアルカードを注視した。ついでに司書は後生大事に持っていた石を落として割った。
「……アドリアン様、そういえばこの方は？」
「知らぬ。そこで会った」
「アドリアン様の御用であれば、爺はなんとでもいたします。いたしますが」言うと、マリアを胡散臭（うさんくさ）そうに一瞥（いちべつ）する。「たとえいくら積まれても、見も知らぬ方にドラキュラ様の財物をお譲りするわけには……」
この守銭奴の口から『いくら積まれても』などという言葉が出てくるとは――アルカードは腹の中で驚倒した。

「わかった。――マリア、これを使え」
言いながら、アルカードは着けていた漆黒のマントを脱いでマリアに放った。
「これで良かろう。余った石で適当に見繕ってくれ。この俺に」
「アドリアン様、なにをなさいます！　それはドラキュラ様御手(おて)ずから……！」
「いいわ、結構よ。せっかくだけど貰えないわ。丈も合わないし」
司書は椅子を蹴倒して立ち上がり、マリアは司書とマントを交互に見やりながら困惑の態である。
「着けてみろ。それは地面に接しないようにできている。たとえ引きずったとしても穴が開くようなやわな造りではない」
「アドリアン様！」
「爺、俺も暇ではない。勘定を急いでくれ」
司書はしばらく机に手をついて赤くなったり青くなったりしていたが、ややあって大きな溜息とともに「わかりました。この方のためになんでも見繕わせていただきます」と折れた。
「……ありがとう。一つ貸しにしておくわ」
司書に睨まれながら、マリアはアルカードにマントを返した。
「無用だ、余れば捨てた。魔導器と換(か)えたと思え」
司書は石の勘定を止めると、溜息を連発しながら隠し部屋の中へ消えていった。
「……アルカード。アドリアンって、何のこと？」
隠していたナイフを突き出すように、マリアは唐突に切り出した。爺め――司書室へ入った時から気になっていたが、やはり聞き流してはくれないようだ。
「何度言っても、あれはそう呼ぶのをやめぬ。大方(おおかた)昔の知り合いに似た者でもいたのだろう」
アルカードは適当に誤魔化しておいた。アドリアンはアルカードにとってすでに死者の名となっている。アドリアンを名乗る気もなければ、ごく一部を除いて呼ばせる気もなかった。

大して待つこともなく、司書は若草色のマントと赤い石のついた留具を手に戻ってきた。
「よいものですよ……アドリアン様に感謝なさることです」
いかにも仕方がないといったふうに、司書は渋々マリアにマントを手渡す。渡されたマントを身に着けると、マリアはくるりと回って「似合う？」と聞いてきた。
「大分ましになった。それを脱ぐくらいなら下のものを脱げ、自身の為だ」
「……」
「それと爺。買い物ついでに、一つ聞きたいことがある。――オルロックの行方（ゆくえ）を知っているか？」
しょげ返って連発していた溜息がぴたりと止まる。
「……オルロック様なら時折おいでになります」
「在所（ざいしょ）を知っているか？」アルカードは勢い込んで尋ねた。
「……御在所を聞かれて、いかがなさいます」
司書は警戒とも心配とも取れない、複雑な表情を浮かべていた。なにが彼をそうさせるのか、この話題を喜んでいないようにも見える。
「久闊（きゅうかつ）を暖める……という答えでは不満か？」
「……オルロック様の御在所はわかりません。しかし、あの方は定期的に礼拝堂へ通われているようです」
言おうか言うまいかよほど迷っていたのだろう、司書はたっぷり十秒も黙ったのち、そう呟いた。
「わかった。――爺、世話になった。笑って送ってくれ、永（なが）の別れとなろう」
「次のご訪問はもう三百年くらい後になりそうですな。ですが、もう赤字はこれきりにしていただきたいものです」
司書はよろよろと蹴立てた椅子に座ると、苦り切った笑顔を浮かべた。
「……リサ様もこういった交渉ごとにはたいそうしっかりしてお

られました。血は争えませぬな、あまり爺をお虐め下さらぬよう」
その時の気持ちをなんと表現したらいいだろう――母との血脈を言葉に表されて、まったく唐突に躍り上がりたくなるほどの喜びがこみ上げてきた。
――いや、もし部屋の中に爺しかいないのであれば、俺は本当に踊り出したかも知れぬ。
「……ねえ、爺」
アルカードの呟きに司書は目を見開いた。母の血が最古の記憶を呼び覚ましたのか、あのとき口にし、耳にした言葉がありありと思い起こされた。
「ねえ、なんでここには絵本がないの？」
老司書の姿形は数百年前となんら変わらない。ただ彼を見上げるばかりだった子供は、今や見下ろすほどに大きくなったけれど、アルカードの心は数百年前のあの日に飛んでいた。
「それは――ドラキュラ様があまり絵本をたしなまれぬからでございますよ」
司書はあごひげを撫しながら、困ったように答えた。彼の言葉は一言一句と違わなかった。
――なんであの方が絵本などご覧になりますか！　ああ苦しい！
母の快活な笑い声を聞いた気がして、アルカードは嬉々として背後を振り返った。が――そこに立っていたのは見知らぬ金髪の女だけ。
天にも昇る心地から、一気に地獄へ叩き落とされた気分だった。つかのま温もりに包まれた心臓はたちまちにして凍り付き、ただここで得た三つの魔導器の力だけが、燃え損ねた骨のように残った。
「……イェル、行くぞ」
マリアを視線で退けると、アルカードは妖精を伴って足早に司書室を出て行った。

錬金術研究棟にエリオット達の姿は伺えなかった。
首尾良くアリエルとやらを救出した……とは思えない。既に人外共の胃袋に収まったか、先行するかたちで礼拝堂へ向かったか、はち合わせなかったからには蔵書庫方面へは来ていないだろう。
アルカードは妖精を先導に、研究棟入口の吹き抜けを天井へ向かって昇っていた。魔導器――蔵書庫で手に入れたもののうち、特に強力だったドラキュラの血の力を借りて、アルカードはコウモリにその姿を変じている。
やはり中身が中身だからであろうか、妖精は「薄気味悪い気配がいたします」と言って、特にその魔導器には近づきたがらなかった。アルカードとてその球の中に入っているのが父親の血だと思えば、あまりいい気分ではなかったのだが。
上から下へ流れていく各階の研究室では、おびただしい数の骸骨達がこちらに目もくれず、忙しく立ち働いていた。ビーカーを振る者、煙の吹き出るフラスコを持ってあたふたする者、小動物の入った檻を抱えて走り回る者、架台に横たえたなにかの死骸を思案げに切り刻む者――どこかおかしみを感じさせる彼ら末端の魔族には、きっとドラキュラの興亡など想像の埒外であるに違いない。城主の全き滅びをみない限り、城は現世、隠世の違いはあれ存在し続けるのだから。
――爺は何を懸念していたのだろうか。
来るべきオルロックとの再会には不安の種が蒔かれた。司書はアルカードがオルロックに協力を求めることを見越して、暗にその望みはないと示唆したのだろうか。
――そうかも知れぬ。俺は一度、あれに背いているのだから。
言葉を尽くし涙を流して訴えた情を、あの日アルカードは無下に蹴っている。もちろん再考の余地などない決意であり、たとえ百度あの日に立ち戻ったとしても結果が変わることはなかっただろう。それでも――オルロックにとってそれがなんの慰めになる？　畢竟、

アルカードの裏切りの罪も、オルロックの悲しみも、軽くなることはありえないのだ。
「アルカード様、こちらです。アルカード様」
慌てたような声に我に返ると、先導して頭上を飛んでいたはずの妖精は、いつの間にかアルカードを追いかける形になっていた。
「行き過ぎです、アルカード様」
「……」
無言で妖精に従い、研究棟とは趣の異なるタイル張りの廊へ出た。
「あの人間のことをお考えですか？」
アルカードが変身を解いたなり、妖精はそれを待っていたように聞いてきた。勘こそ外していても、物思いに耽(ふけ)っていたのはアルカードだけではなかったらしい。
「……我が忠良(ちゅうりょう)にはよほど人間の匂いを好まぬらしい。それはどの人間のことを言っている？」
アルカードはむしろ自分を元気づけようと冗談めかして言った。
『わが忠良』の言葉に妖精はくるくると三回ほど回転し、ややあって真顔でぴたりと止まった。
「あの金髪です」
すぐには返事をせず、アルカードは黙って歩き出した。妖精は返事を聞き漏らさない為か、彼の肩にしがみつかんばかりに密着してくる。
「イェルは嫌いか」
「はい。あれはアルカード様を侮辱しました。許せません」
即答もいいところである。が、それほど嫌った人間に噛みつかなかったことにアルカードはむしろ感心した。
「イェルは人間が嫌いだ。そうだな」
「はい。大嫌いです」
「そうか。――ではお前に酷な誓いを立てさせたことになる」
こいつには話しておいても差し支えまい――アルカードはふくれ面の妖精の頭に指先を乗せた。

「我が母は人間だ。俺は純血の魔族ではない、半人だ」
「……質の悪いご冗談を」
「本当だ。――我が半身を厭(いと)わしく思うのは構わぬ。だがそれがお前にとって重荷になるのなら、いつでも好きなときに離れるがいい。破誓(はせい)には中(あた)らぬ、お前は十分役に立ってくれた。これからも十二分に役に立ってくれることを俺は疑わぬが」
「……」
妖精は無表情だった。夜の一族の魅了も、この真実の前にはあってないようなものらしい。彼女が蔵書庫で押し黙ったまま、司書やマリアをこんなふうに眺めていたのをアルカードは思い出していた。
――潮時のようだ。
「俺とお前が共にいるのを見た魔物は、今のところすべて滅ぼしている。今ならまだ同族の元へ戻れるだろう。城のどこかに身を潜めるのもよいが、いっそのこと外に出てみてはどうだ？　――俺はこの城を滅ぼすつもりでいるが、もしそうなったときお前が瓦礫の下敷きにならぬ保証があれば、いくばくかでも心の安らぎになる」
返事はない。いや、そもそも聞いているのかさえ定かではない。その場に力なくたゆたいながら、妖精はただ青くなって途方に暮れているのみだった。
道案内がいなくなるのは痛かったが、この小さな家臣の命には代えられまい。アルカードは妖精を置いて再び歩き出した。
「……忠良、と言ったのは冗談ではないぞ。アルカードはお前の忠義を忘れぬだろう。――さらばだ」
肩越しに振り返ると、妖精は踵をかえして道を戻っていくところだった。

――ここは……。
礼拝堂ではないな、とアルカードは訝しんだ。
妖精と別れた廊下の奥には、行けども行けども十字架の一つさえ見当たらなかった。照明は次第に暗くなっていき、乾いた血と鉄の

匂いが色濃くなっていく。いくつかの赤錆びた鉄扉をこじ開けた先には、無骨な石畳と石柱、松明に囲まれた円形の闘技場という、いささか懐古趣味的な古代の遺跡を思わせる空間が広がっていた。

――イェルが間違ったか、あるいはここを抜けた先が礼拝堂なのか。

多分どちらでもあるまい、とアルカードは思った。城の内部が変化しつつあるのだ。

アルカードは巨大な円形闘技場を見晴るかす、桟敷席のような露台の上にいた。眼下の闘技場からは不穏な金属音とくぐもった喊声が遠く響いてくる。

――人外共が戦い合っているのか。

アルカードは露台から身を乗り出すと、松明から上がる黒煙を縫って目をこらした。

三十ほどの何者かが闘技場の隅で争っているように見える。その大部分が姿形もまばらな魔物の類で、遠目にも追い詰められているのが明らかな人影は四、五人ほどしかいない。闘技場のあちこちに撒かれた人体の破片を確認するなり、アルカードは露台から跳躍した。

「こちらを向け、我がはらからよ！　アルカードを滅ぼして名を上げてみせよ！」

注意を引くために大音声でそう呼ばわると、着地と同時に槍の石突きで思いっきり石畳を打った。槍は持ち主の予想を上回る力で地をうがち、周辺の地面を爆破するようにはじき飛ばす。アルカードの挑戦よりもこちらのほうに驚いたらしく、二人にまで減っていた人間を含むすべての魔物が一斉にこちらを向いた。

――これが魔導器の力か……。

身につけた六つの魔導器は、いまやアルカードを狩られる者から狩る者へと変貌させていた。心は忘れかけていた力を振るう快楽に奮い、四肢はさらなる酷使を願って躍動する。

――ああ、俺は畢竟、こういう生き物なのだ。

魔物達の黒いかたまりに飛び込むと、振りかぶっていた槍を叩き下ろす。避ける暇もなく三体の武装した骸骨達が巻き込まれ、たちまち灰になって消し飛んだ。

「お前達、エリオットの手の者か？」

人間達の生き残りを背中に庇い、槍を素早く突きながら、アルカードはそう叫んだ。ちらと肩越しに伺えば、二人のうち一人はすでに助かりそうもないほどの重態で、もう一人の方は武器も持たずに腰を抜かして震えていた。

――話どころではないな。

魔物達はアルカードを強敵と認めたようで、各自散発的に打ちかかっては来るものの防戦一方になりつつあった。そのうちの一体がこちらを見据えながら、背にした壁の方へそろそろと移動していく。その先にははるかな天井から伸びてきた数本の鎖。

応援を呼ぶつもりだ――アルカードはとっさにそう直感した。昂ぶっている今ならむしろ援軍は望むところだったが、そうなれば背後で震えている人間の方は生き残れまい。大きく踏み込んで向けられた得物を槍で払うと、アルカードは素早く魔法を練りだした。

「隠世のひずみより来たれ、雑霊ども」

魔力を解放すると、アルカードは振り返って無事だった方の人間に飛びかかり、有無を言わさずその体を抱きすくめた。呼び出した百の雑霊は、主以外のすべての命を求めて周りの者を殺傷する。彼らが欲望を満たし終えるまで、アルカードは小柄な人間の体をマントで覆い隠していた。

喊声と絶叫が闘技場に相こだまし、それが絶えると間髪入れず肉を引き裂き、血を啜る雑霊どもの宴が始まる。アルカードは人間を立たせて肩を抱くと、血で汚れていない闘技場の端へ引きずっていった。

「しっかりしろ、お前はエリオットの手の者か？」

手の甲で頬を張ると、人間はまったくいまさらのように絶叫を上げ、四肢を無茶苦茶に振り回しだす。まさか殴って静かにさせるわ

けにもゆかず、業を煮やしたアルカードは彼をしばらくそのままにしておいた。
「僕は……助かったのか……」
雑霊達が帰省するころになってようやく、人間は我を取り戻したように呟いた。よく見れば声変わりして間もないくらいの少年で、乾いた血に彩られたかんばせはまだあどけない。エリオット達が身につけていたお仕着せも、少年には借り着のように似合わなかった。
「お前は助かったが、他は全て死んだ」
少年は俯(うつむ)いてぐずぐずとすすり泣き始めた。アルカードはまたも待つことを余儀なくされ、溜息をつくと仕方なくその場に座り込んだ。
「貴方が助けて……くれたんですか……？」
腕を目に当てて泣くことしばらく、少年はしゃくり上げながらもようやく話せる状態に立ち戻ったようだ。アルカードの「話せるか？」という問いに、少年は首を縦に振った。
「確かに助けたが、それはどうでもいい。お前はエリオットの手の者か？」
「……エリオットは父です。貴方は父のお知り合いですか？」
アルカードは黙って腰に吊っていた剣を鞘ごと少年に渡した。
「父の剣です。……父は……父は死んだんですか……？」
「死んではいない。少なくとも、それを渡されるまでは生きていた。――お前は父上の部隊にはいなかったのか」
「はい。僕は別の隊にいました。みんな城の入口であの悪魔たちに捕まって……僕は剣を落としてしまって……」
あの剣はこの少年のものだったのかも知れぬ――アルカードはあのなまくらを見つめるエリオットの貌を思い出した。
「ヒューも死んだんですか？　僕の隣にいました。僕が丸腰だったばっかりに、あいつが僕を守ってくれたんです。槍で腹を突かれたけど、痛くないって笑ってました。笑ってたんですけど……ヒューは死んだんですか？」

「死んだ。まさしくお前を守って戦い、死んだ。見事な死に様だった」
アルカードはやや創作を交えてヒューとやらの最後を語った。少年の傍(かたわ)らで虫の息だった人間か、背後の闘技場でバラバラになっているうちのいずれかがそうだろう。どのみち今や彼の両親でさえ見分けが付こうはずもないが。
「捕まったと言ったな。他の者はどうなった」
少年は唇を噛みながら、無言で闘技場のほうを指さした。
「……僕もああなるんでしょうか」
「お前次第だ。――なぜ殺さずに捕まえたお前達を、今このようにして始末したのかがわからぬ。何か心当たりはないか？」
「新城主様御行幸(ごぎょうこう)の祝いに血祭りに上げるのだと……悪魔たちがわざわざ皆に知らせていました。楽には死なせない、悲鳴で城主様をお迎えしろと」
――新城主？　城主はドラキュラではないのか？
「……ここは話し合いには向かぬな。移動するぞ、立てるか？」
血の匂いに辟易(へきえき)して、アルカードはそう提案した。辺りに立ちこめる、血の海を泳いでいるかのような濃密な血臭に心が沸き立つのを感じたが、同時にいかに魔導器を所持しているとはいえ、あれほど如何(いかん)ともしがたかった吸血衝動を苦もなく押さえ込めていることにふと疑問を抱く。
――あの魔導器、ドラキュラの血はそれほどの力を持つのだろうか。力は大分戻ってきてはいるが、それでも三百年前の俺には未だ比肩(ひけん)し得ないはずなのだが。
「はい。……あのう、こんな事を聞くのは失礼かもしれませんが……貴方は人間の方ですか？」
『人間の方』という言い方がなんとなくおかしく、アルカードは苦笑をマントの襟で隠した。
「お前の父上も同じような事を言っていた。俺は悪意があるかないかのほうが重要ではないのかと言ってやったのだが」

暗に少年の疑問に答えたつもりだったが、彼は特に驚きの色を見せなかった。
「お礼がまだでした。お助け頂いて、ありがとうございました。お名前を伺ってもよろしいですか？」
「アルカードだ。――礼は無用だ、借りを返したに過ぎん」
借り？　と首を傾げながらも、少年は礼儀正しく名乗り返した。
「僕はエリオットの息子、アドリアンといいます」

「――父は大反対したんですけど、お嬢様は僕より二つも年下なんです。自分より小さな女の子が闘ってるのに大の男がお屋敷で震えてるなんて、間違ってますよね」
血臭わだかまる闘技場を後にして、アルカードは真っ暗な隧道（すいどう）を歩いていた。
闘技場には四方に出入り口がしつらえてあったが、そのうち三つは外から仕掛けで開閉する扉のようで、残りは小さく開いた洞穴のような入口が一つあるだけだった。選択の余地もなくアドリアン少年を従えて、アルカードは明かりの灯らぬ隧道に踏み入ったのだった。
隧道は狭く、天井はアルカードの身長よりすこし高いくらいで、幅も人が二人並んでなんとか歩ける程度しかない。初めこそ一寸先も見えない暗闇に不安を鳴らしていたアドリアンも、アルカードが手を引いて歩くことしばらく、ようやく少年らしい快活さを取り戻してぺちゃくちゃとおしゃべりを始めた。
「――お嬢様はヴァンパイアハンターなんて呼ばれて有名になってしまったんですけど、実は吸血鬼なんて見たこともないんですよ。ご本人がそう仰（おっしゃ）ってました。あんなところに行きたくない、もっとウィーンにいたかったって――」
――しかし奇縁だ。この城で同じ名前の持ち主に会うとは。
アドリアンという名前がことさら珍しいものだとは思っていないが、狭い城のことで、同じ名前の人間に遭遇するのは実に初めての

出来事だった。もっとも――中身の方は似ても似つかぬようだが。
「――そのピアノの先生がまた面白いんですよ。ちびのあばた面で、雷みたいな声でしゃべって――」
「静かに、アドリアン」
アルカードは唐突に立ち止まると、高い声でしゃべりまくっていたアドリアンを遮った。
隧道の行き止まりに、鉄格子の窓をはめ込んだ重厚極(じゅうこう)まる鉄扉があった。小さく開かれたその格子窓からほんのかすかに光が漏れており、それに混じってひどい死臭が漂ってくる。
――さて、どうしたものか。
「アドリアン。見えぬだろうが、ここで行き止まりだ」
「え？　はい、ええと、どうしましょう。引き返しますか？」
「扉がある。が、中はどうしようもないことになっているらしい。俺は入ってみるつもりだが――お前はここで待つか？　もし奥に道があるなら迎えに来よう」
アルカードは振り返ると、自称『大の男』を見詰めた。いかにも繊細多感そうな少年である。この奥にあるものを見せても良いことなどないだろう。
――柄にもなく気を遣っているようだな、俺は。
「いえ、もちろん僕も行きます。僕だって男です。目の前に困難があることがわかっていて、それでも逃げていいのは女の子だけだって、父も言ってました」
そう言ってアドリアンは薄い胸を張る。珍しく心を配ったアルカードとしては溜息をつくのみだった。
扉は重かったが鍵はかかっていなかった。エリオットの剣をアドリアンに渡して「それを使わずに済めばいいがな」と呟くと、一気に鉄扉を引き開けた。途端に魔物が覆い被さるようにして、凄まじい異臭が隧道に流れ込んでくる。
「うわっ、何だこの臭い……！」
「これを被っていろ」

悲鳴を上げるアドリアンの頭に脱いだマントを覆い被せると、アルカードは彼の手を引いて中へ歩み込んだ。
中は一見牢屋のようだった。隧道の狭さはそのままに、その両側を挟んだ無数の鉄格子がはるか闇の向こうまでずらりと続いている。三メートル四方程度の窮屈(きゅうくつ)な牢の中には――やはり案の上、白骨から死後一週間程度のものまで、実に様々な状態の死体が無造作に転がっていた。さらに立ち並ぶ牢の中には、一定の間隔で特別大きく作られたものが存在し、その中には人体を縛り付ける架台と、縛り付けた人体を料理するための用途もわからないような道具が満載していた。この呪(のろ)わしい空間がただ囚人を閉じこめておくだけの施設ではないことが如実(にょじつ)に伺える。
「なんだか……もの凄い臭いがするんですが……これ、取らない方がいいんでしょうか……」
腐った血にぬめる床に足を取られながら、アドリアンがマントの下から好奇心と恐怖の綯(な)い交ぜになった声を上げる。
「夢に見たいのなら取るがいい。数多の眠れぬ夜を過ごした上でな」
「……やっぱり止めま――」
うわ、とアドリアンが背中に突っ伏してくる。アルカードは棒を呑んだように歩みを止めていた。
――何かの間違いだ。しかしこの血の匂いは……。
「アルカードさん、どうしました？」
「……だれかいるの？」
一番奥の牢から、か細い女の声が響いてきた。死者の怨念と腐血にいろどられたこの牢にまことそぐわない、それは鈴を転がすような可憐な声だった。
「ばかな……」
アドリアンの手を放ると、アルカードは声のした牢に向かって駆けた。一歩近づくごとに強くなる血の匂い――男と女の性質の違いはあれ、あの日より忘れるはずもない、彼の血の匂い。

牢の鉄格子を掴んで、闇の中に目をこらす。狭い部屋の隅に汚い藁筵(わらむしろ)が延(の)べてあり、その上に白い服を着た少女がちょこんと座っていた。――間違いない、この娘は……。

「アドリアン！　来るな！」

牢内にわんわんと鳴り響くほどの怒鳴り声に、律儀にマントを被ったままこちらに近づいていた少年が阻(はば)まれたように立ち止まる。

「アドリアン……そこを動くな」

アルカードはそう言い放つと、近傍(きんぼう)にあった松明をすべて消して回った。アドリアンはいまだにマントに飲み込まれたまま、背筋を伸ばして気をつけをしている。

――惨(むご)いことをする。

牢の中で壁を見据えていた少女の両目はくり抜かれ、辺りと同じ虚(うつ)ろな闇がわだかまっていた。

「だれかいるの？　助けに来てくれたの？　私はアリエルです。アリエル・ダナスティです。だれか助けて――」

――グラント、お互いこの城のくびきからは逃れられぬ運命のようだ。

牢内に訪れた真の闇から、少女のすすり泣く声が這い寄ってきた。

「お嬢様！　お嬢様、アドリアンです！　エリオットの息子です！」

アリエルの声を聞きつけるなり、アドリアンはマントを剥ぎ取って突き当たりの牢へ飛んでいった。

「アドリアン！　エリオットもいるの？　さっきのはエリオット？　エリオット、ここへ来て！　助けて！　なにも見えないの！」

「そりゃそうです、僕だってなんにも見えませんよ！　この真っ暗闇じゃお嬢様の顔だってなにがなんだかさっぱりです！」

こいつを連れてきたのは正解だった――泣いたり笑ったりしなが

ら大声で話し合う二人を見て、アルカードはひとまず安堵の溜息を漏らした。
「そうなの？　ここは暗いのね？　――目がとても痛かったの。どうかなってしまったのではないかと思ったわ。エリオット、声を聞かせて。ここから出してちょうだい」
「エリオットはここにはいない。別の場所でお前を待っている。――このアドリアンが彼の代わりだ」
そう言って持っていた槍をアドリアンに手渡すと、アルカードは鉄格子の前までアリエルを呼び出した。
「俺はアルカード。エリオットからお前を救出するよう依頼されていた。歩けるか？」
アドリアンが「え？　そうだったんですか？」と間の抜けた声を出す。
「靴がないわ……」
「大事ない。アドリアンがお前の靴となってくれるだろう。――アドリアン、服を借りるぞ」
言うなり返事も聞かずに袖を引きちぎり、一筋の細い帯を作った。アリエルに声をかけて招き寄せ、急ごしらえの目隠しを目のぐるりに巻いて縛る。
「ああっ、軍服を破いたりしたら父に叱られますよ。ああ、これどうしよう……」
「……ねえ、どうして目に布を巻くの？」
アドリアンののんきな物言いを忍びやかに笑うと、アリエルは不安げに問うてきた。
「後で話す。とりあえずここから出るぞ。アリエル、これを被って後ろの壁まで下がれ。アドリアン、お前も離れろ」
「離れろって……鍵かかってますよ、ここ」
「灼き切る」
鉄格子も錠前も恐ろしく頑丈で、とても普通の炎や武器でなんとかなるようには見えない。少々荒っぽくなるが――アドリアンから

取り返したマントをアリエルに手渡すと、アルカードは隠世の炎を呼び出した。
「隠世のひずみより来たれ、黒き炎」
両手のひらのあいだに、まったく光を伴わない球形の小さな炎が現れた。慎重にそれを操作し、錠前の前まで持って行く。
「熱い……何なの？」
「アリエル、それにくるまっていろ。絶対に肌をさらすな」
アリエルが堪(たま)りかねて弱り切った声を上げた。アドリアンは「熱っ！　なんだこれ！」と叫びながらすでに牢屋の入口付近まで避難している。
少しでも操作を間違えばアリエルは一瞬にして炭化するだろう。じりじりと炎を動かし、錠前を灼き切った時点で炎を消す。牢内から安堵の溜息が聞こえた。
「よし。――アドリアン、開いたぞ。アリエルを背負え」
「……アルカードさんは凄いなあ、なんでもできるんですねえ」
人間が皆こいつのようだったなら――人外の技にただ賛嘆するだけの少年に、アルカードは妙に感心してしまった。
「……アドリアンは力持ちね。わたしこのまま寝ちゃってもいいかしら？」
「もちろんです！　――疲れたら交代してくださいね、アルカードさん」
アリエルを背負ったアドリアンの手を引いて、アルカードは元来た隧道を戻った。よほど疲れていたのだろう。闘技場に出る頃には、アリエルはアドリアンの背中で小さな寝息を立てていた。
――荷物が増えたな。
この二人を伴(ともな)ったまま礼拝堂へ行くか、それとも一度城を出てエリオットの言うとおりにするか――アルカードは思案に暮れた。今の力ならなんとか二人を庇って進めなくもない。だが確実に足手まといになるだろう。しかしここから城の入口へはかなり遠い上に、飛行できる妖精が案内してくれた道のりは、コウモリに変身できる

アルカードならいざ知らず人の脚では踏破(とうは)不可能だ。戻るにしても新たな道を探さねばならず、時間は果てしなくかかる――。

――オルロックに相談する事柄(ことがら)も増えた。が、もはや考えまい。

「アルカードさん、またあれやりませんか？　あの熱いやつ」

円形闘技場入口のうちのひとつに近づくと。アドリアンは無邪気に提案してきた。アルカードの身長のざっと十倍はあろうかという巨大な格子戸で、無論格子の太さもアリエルの牢のそれとは比べものにならない。やや消耗気味の今のアルカードに、アドリアンの胴周りと同じくらいの鋼の格子を灼き切れるかは自信がなかった。

「簡単に言ってくれるな。あれは――」

「ハエども！　盗んだものを返して貰おうか！」

アルカードの声を遮って、よく通る男の声が頭上に響いた。

残響を追って見上げれば、アルカードがやってきた露台の向かい側に同じような桟敷席があり、そこにしつらえられた豪奢(ごうしゃ)な椅子に男の姿が見える。

アルカードはその場に棒立ちになった。

――どういうことだ。三百年の時を経て、再び宿命の血が集ったとでも言うのか……。

心臓に滲(し)み入るほど懐かしい、その男の血の匂いは――かつてこの城で出会い、共に力を合わせた三聖人の一人、ベルモンドのものに違いなかった。

「誰だ！」

短く誰何する。男は答えずに椅子から立ち上がると、なんのためらいもなく桟敷席から飛び降りた。

――ヴァンパイアキラー！

全身が総毛立ち、肌という肌が泡立つのを感じる。濃い色の長髪に、襟の高い青い外套を羽織った男――ベルモンドは、まさに三百年前ラルフ＝クリストファーがそうしたように、腰の後ろから長尺の鞭を取り出してアルカードを挑発した。

「怖れているな、吸血鬼(ヴァンパイア)。お前の恐怖がよくわかる」

「……アドリアン、できるだけ俺とあの男から離れていろ」
ベルモンドは低く笑っていた。その目は楽しくて仕方がないといったふうに爛々と輝いている。ほどけた鞭は石畳にわだかまり、蛇のようなとぐろを巻いた。魔性を食らう蛇――数多の闇のうからを灰にし、ドラキュラをしてその野望を挫かせしめた退魔の鞭、ヴァンパイアキラーが薄ぼんやりと発光を始める。
「供物盗人がまさか吸血鬼とはな……いいぞ、こいつも久方ぶりに面目を躍如するっ！」　目で追えぬ一撃を、アルカードは前に転がることでなんとか避けた。耳をかすって飛んできた鞭は、アルカードの立っていた石畳を身の毛もよだつ金属音を伴って粉砕する。一見しなやかな革でできているように見えるその鞭は、その実千条の鋼線を縒ったに等しい凶悪な破壊力を秘めている。
ベルモンドは獲物をなぶるように、鞭を引きずってアルカードの周りをゆっくりと歩き出した。
「おれではまるで相手にならんか？　ん？　そうか、それではお前もつまらんだろう。よしよし……宴を冷めさせないのも城主の器量よ。そうは思わんか？　吸血鬼！」
――こいつが、ベルモンドが城主？
「開け冥界の門！　出でよ我が僕よ！」
「ばかな……人間が闇の技を……」
アルカードは驚愕のあまり立ち竦んだ。ベルモンドは隠世から人外を召還しようとしている。そもそも人間はおろか、高位の魔族にしか行い得ない魔法のはずなのに。
闘技場の上に空気の揺らめきが起こり、重苦しい気配が六つ、そのうちより生まれ出た。
「さあ、闘え、者ども。斬れ。打て。射れ。突け。引き裂いて血を流せ！　闘え者どもっ！　我が城を汚す小賢しいハエを叩き潰せっ！」
ベルモンドの哄笑と共に、闘技場から六匹の人狼がよだれを引いて飛びかかってきた。各々がその手に異なる得物を持ち、まさに集

団で獲物を狩るオオカミのごとく陣形を組み出す。
「そらお前達、そこにもえさが落ちているぞ。吸血鬼(ヴァンパイア)とどちらが美味いか試してみろ！」　言うなり、闘技場の外で事態を見守っていたアドリアンの足下がはじけ飛んだ。鞭の一撃に二匹の人狼が新たな獲物をその眼に捉える。
「貴様……！」
残る四匹と数合を交えたアルカードは、今し飛びかかろうとしていた二匹に先行してアドリアンの前に飛び、体勢を整える暇もなくうち一匹に槍を投げつけた。跳躍した直後の人狼はろくな身動きも取れず、戦斧を振りかぶったまま槍に貫かれて果てる。
ほぼ同時に飛びかかってきたもう一匹の攻撃は受けるも避けるもならず。アルカードは戦槌の一撃をもろに食らって倒れ伏した。
「隠世のひずみより来たれ黒き炎！」
とどめの一撃は肩をかすって石畳に突き刺さった。血を吐いて転がりながら不自由な姿勢で魔力を解放する。戦槌を持った人狼は頭を炭にされて絶命したが、ろくな制御もできなかった隠世の炎はアルカードの左手をも炭に変えていった。
「……！」
一瞬にして左手の感覚が失せた。――まずい。片腕であの四匹とどうやって闘えばいい？
アルカードは身のうちから炎を呼び、目くらましのつもりで四匹に向かって放った。その隙に槍の突き立った人狼に向かって飛ぶ。素早く槍を引き抜き、振り返ったところで左腿(かえ)に反しのついた矢が突き刺さった。
同族を盾に炎を避けた人狼の一匹が弓を構え、腰に着けたやなぐいから長大な矢を引き出す。多少の火傷でむしろ闘争本能に火がついた残りの三匹も、銘々の獲物を振り回しながらこちらへ歩いてくる。アルカードは片手で槍の穂先の根本(ねもと)を握り、激痛に縛められた左足を引きずって魔法を練り出した。
矢が奔(はし)る。左腕でそれを受けると、間髪入れず三匹が時間差で襲

いかかって来た。一匹は下から剣で斬り上げ、残る二匹は左右に飛んで手に持った槍を振るう。――が、三匹の必殺の一撃はことごとく空を切った。

アルカードは霧に変じて剣を持った人狼の背後に回り、変身を解くやいなや右手に持った穂先を首に突き込んだ。一瞬、目標を見失って動きを止めた二匹をそのままに、アルカードは弓矢を持った人狼の元へ右脚だけで飛ぶ。放たれた三矢目が首をかすって血が吹き出る。槍を振り上げ、人狼は弓を捨てて短剣を抜く。アルカードの一撃を防ぎきれぬまま、短剣を持った腕ごと人狼は切り伏せられた。

――力が……。

余勢で石畳を打った衝撃に堪えきれず、アルカードは槍を取り落としてしまった。やはり槍は片腕だけでは扱えない。魔法を練ろうにも立て続けに隠世の炎を呼んだせいで魔力が足らぬ。背後に響く二匹の足音を聞いて、アルカードはせめてあの二人を逃がす方法はないかと必死に考えを巡らした。

「ふん、そこそこやるようだな」

ベルモンドの声と共に突風がアルカードの体を凪いだ。鞭の一撃が来たかと身を硬くしたもののアルカードには当たらず、代わりに背後に迫っていた残る二匹を消し飛ばした。

「なかなかの余興だったぞ、吸血鬼。だが……まだ足りんっ！」

瞬間、アルカードの意識はつかのま飛んだ。気がついたときには震えるアドリアンの足下に倒れ伏し、自分の体から流れ出た血溜まりのなかで痙攣していた。

――あの鞭、ヴァンパイアキラーの一撃か……。

左脇腹からみぞおちにかけて深刻な傷が走っている。まるで雷精を帯びたように体は痺れ、いくつもの魔導器に支えられたはずの体からは、しかしなんの力も湧いて来なかった。

「ア、アルカードさん、しっかりしてください。……あああ来た……」

耳元にからんと槍が放られた。

「どうした、吸血鬼(ヴァンパイア)。武器を拾え。拾って闘え。おれはまだかすり傷一つ負ってはおらんのだぞ。――さあ闘え……闘えっ！」
重い長靴が腹にめり込んだ。アルカードがくの字に体を折ると、それを期に雨あられと靴の底が降ってくる。
「お前もっ！　これで終わりなのか！　くそっ、クズめ！　話にならん！」
息を荒らげてひとしきり蹴りまくると、ベルモンドは虫の息のアルカードを見限って新しい標的を見つけた。
「……小僧、貴様も供物盗人のネズミか。その娘と同じく、貴様の目玉もくり抜いてやろうか。それとも舌がいいか？　――臆病者め！　震えてばかりいないでかかってこい！　その腰の剣は飾りかっ！」
ここで終わるのか――ドラキュラ討伐の宿命を狂気のベルモンドが阻もうとは、何たる皮肉だろう。ラルフ＝クリストファー、サイファ、グラントの遺志もかく潰(つい)えるのか。
「お嬢様だけはた、助けて。僕は闘えません。ぼ、僕はいいんです、お嬢様だけは許してください。こんな女の子が闘えるわけないでしょう？　お、女の子にまで闘えなんて言うなら、お前なんか腰抜けだ。……です」
「小僧……」
「……アドリアン、逃げろ」
ベルモンドの足首を掴んだ右手は、苦もなく蹴り払われた。
「おれを腰抜け呼ばわりするとは見上げた勇気だ、小僧。――喜べ、お前はヴァンパイアキラーの餌食となる最初の人間になるのだから」
ベルモンドが鞭をほどいて構える。途端、彼の口から獣のような絶叫が轟(とどろ)いた。
「ぐ……くそ……使えぬ鞭めぇっ！」
アルカードの横になった視界に、鞭の柄に接した右手のひらからおびただしい煙を上げてうずくまるベルモンドの姿が映った。その

苦しみようは尋常でなく、じき立ち上がるかとも思われた彼はそのまま地面を転げ回りだした。
「な、なんか……助かったみたいだ……あ、アルカードさん！　大丈夫ですか！」
じゅうじゅうと肉の焦げる音をたてて絶叫するベルモンドを尻目に、アドリアンが顔を覗き込んでくる。控えめに言ってもまったく大丈夫でなかった。もう一撃貰っていたら、おそらく灰になって滅びていただろう。
「き……貴様ら、待っていろ……このままで済むと……思うなよ……！」
はるか遠くでベルモンドの苦しげな叫びが聞こえる。――そうだ、あの鞭の暴走が収る前に逃げ道を見つけなければ……。
「アルカード様！　アルカード様ぁっ！」
聞き慣れた声と共に、アドリアンの背後の格子戸が轟音を立てて開いた。開ききる前に小さな生き物が飛び出てくると、伏したアルカードに向かって猛然と殺到する。
「イェル……か」
妖精はアルカードの首にかじりついたまま、声を嗄(か)らして泣き叫ぶのみだった。
「アドリアン、行け。早く……アリエルを連れて行け。礼拝堂でオルロックという人物を捜して……保護を求めろ。早く……」
アドリアンはアルカードの言葉を無視して槍を拾うと、彼の上着の襟を片手で掴んだ。
「よせ、やめろ。――俺は助からぬ。犬死にするな、アドリアン！」
「ぼ、僕にだって！」と少年が叫んだ。「僕にだって！　守らなけりゃいけない矜持(きょうじ)があるんだ！　護らなけりゃいけない人がいるんだっ！　畜生、畜生！」
泣きながらなにやらわけのわからない言葉を叫びつつ、アドリアンは背中にアリエル、左手に槍、右手にアルカードを掴まえて力の

限り走り出した。
守らなければならない矜持、か――地面の凹凸に揺られて、アルカードはアドリアンの言葉を反芻(はんすう)していた。――護らなければならない人。
暗い帳(とばり)が落ちた。

第二部

十字架が見える。

イコンの前で誰かがひざまずいている。この唸るようなスラヴ語は――ラルフだ。少し離れて同じような格好で祈っているサイファは、彼の祈りを妨げない程度の小声でギリシア語の聖歌を口ずさんでいる。二人とも敬虔な正教徒で、カトリックの礼拝堂しかないドラキュラ城では数多ある十字架や彫像には見向きもせず、各々懐にしのばせた小さなイコンを高所に立てて祈っていた。

少し離れて斧の刃に指を滑らせているのはグラントだろう。彼に信仰はなく、こんな時は下らないものでも見るような眼で二人を眺めていた。正教会から派遣されてきた二人とは違って、彼はたった一人の人間の身でドラキュラ城に立ち向かった真の勇者だ。捉えどころがなく、その根は限りなく法外者に近いけれど、アルカードに最初に手を差し伸べてくれたのも彼だった。

俺は眠っていたのか――ラルフとサイファの祈りを子守歌に、アルカードは再び安らかな眠りに落ちていった。

「私は大主教様に事を終えたを伝えなければならない。アルカード、君は眠るそうだが、次に起きたときは我が鞭をその体に受けることのないようにな！　君の心は善良だから、まさかそのような心配もなかろうが」

やや高めの声で短兵急にまくし立てるラルフの声。俺達はよくあなたの言葉を聞き逃して、いたずらにいらいらさせてしまった。

――待ってくれ、俺を置いて行ってしまうのか？

「わたしもラルフと共に行く。アルカード、もうこの現世では会えないだろうけれど、もし私たちのいずれかの子孫が貴方に助力を請うことがあったなら、どうか快く協力してあげてほしい。私たちの絆は貴方だけが未来へ持ち得るのだから」

女性にしては低い、ゆったりとした声。彼女は最初、自分が女で

あることを隠していた。夜中にこっそりと懐に隠した聖餅(プロスフォラ)をかじっていたのを、俺は知っている。

――どうしてそんな事を言う？　もう会えないなどと、一人だけで生きていく俺の身にもなってほしい。

「じゃあな、アルカード。ベルモンドとヴェルナンデスにゃ会えねえかもしれねえが、オレには会えるだろうよ。――ここだけの話だが、オレも親父をぶっ殺してんだ。オレ達ゃ地獄行きさ、近いうちにまた会おうぜ」

醜い顔と姿に宿る、清らかな勇気。俺達の誰もが二の足を踏むような切所(せっしょ)でも、お前は散歩にでも行くように歩いていってしまった。ことあるごとに信仰を迫るラルフとサイファの間に立って、魔族たる俺の立場を説いてくれた友。

――三百年待っても滅びは訪れなんだ。あと何百年待てばお前に会える？

眠りの覚めたこの世界に、貴方達がもういないなどとどうして信じられる？　叶うことなら貴方達と同じ時代を生き、同じ時代のうちに消えてゆきたかった。

――adveniat(アドヴェニアット) regnum(レンニュム) tuum(トゥウム), fiat(フィアト) voluntas(ウォルンタス) tua(トゥア) sicut(シクット) in(イン) caelo(チェロ) et(エト) in(イン) terra(テッラ).

御国の来らんことを、御旨の天に行われるが如く地にも行われんことを

懐かしい言葉。だが母のスラヴ語訛りのラテン語とはどこか違う。キリストの祈りの言葉に、アルカードは薄く目を開けた。礼拝堂――いや、それはもはや大聖堂と言っていい規模のものだ。

ルーマニアのほぼ全ての人々が正教(オーソドクス)を信じる中で、母はかたくなにカトリックを信奉していた。西から来た異教のキリスト者達を城

に招き続け、ために礼拝堂は改修と増築を重ねてこのような大伽藍となってしまった。

母があのような最後を遂げたのも、あるいはそれに一因があるのかもしれない。徹頭徹尾無宗教であった父をカトリックに改宗させたという根も葉もない噂は、心ない人々にとって魔女を討つための隠れた旗印ともなり得たであろう。

礼拝堂が肥大したために、いつしか城はどこから見ても収まりの悪いいびつな外観となっていった。父の苦り切った笑顔が思い出される。天上の神を信じなかった彼にとって、母は地上の神そのものだった。他のどんな贅沢も口にしなかった母のたった一つのわがままを、彼はいやな顔ひとつせずに叶えた。

――et dimitte nobis debita nostra, sicut et nos dimittimus debitoribus nostris;

われらが人に赦すが如く、われらの罪を赦し給え。

「……エト ネ ノス インドゥカス イン テンタツィオーネム、セド リベラ ノス ア マロー」

「あ、起きました？」

呟きが耳に入ったのか、アリエルが声を上げた。祈りの声は彼女のものだったようだ。アルカードは返事の代わりに「アーメン」と締めくくった。

「……無事に礼拝堂へ辿りついたようだな」

「はい、私はよくわからないのですけど、そのようですね」

「眼のことは……聞いたか？」

長い沈黙があった。あらぬ方へ顔を向けながら、アリエルは頷く。

「知ってました。だって……私のここ、なにも入ってないのだもの」

長い黒髪に白い肌、という特徴はエリオットの言質通りだが、鎧はとうに剥がされたのか、雑な造りの白い死衣をまとうのみだ。アルカードの巻いた目隠しの下から乾いた血が頬へ伝っている。

――せめて綺麗にしてやりたいところだが……。
水の一滴もない以前に、ヴァンパイアキラーによって受けた傷のおかげで歩くこともままならない。上体を起こそうとして炭化した左手をついてしまい、アルカードは横になっていたところから冷たい石床へ転げ落ちた。
「どうしました？」
アリエルはそう言ってしゃがみ込むと、赤ん坊がはいはいをするように手探りでこちらに向かってきた。
「……アリエル、大事ない。座っていろ」
そのまま通り過ぎていった少女に声をかけると、アルカードは痺れる足腰を励まして椅子に這い上がった。どうやら聖歌隊席に寝かされていたようだ。
「アドリアンとイェルは？」
「アドリアンはなんとかという人を捜しに出て行きました。……イェルというのは？」
「いや、いい。――出て行ってどのくらい、いや、俺が気を失ってからどのくらい経つ？」
アリエルは途方に暮れたように「わかりません」と答えた。なにも見えないのだから当たり前の話である。
――礼拝堂にも魔物はいるだろう。おそらくイェルもついて行ってはいるだろうが、アドリアンは無事だろうか。
アルカードはベルモンドとの闘いを思い起こした。あの二人を庇い、多勢に無勢であったとはいえ――ベルモンドは強かった。
特にあの鞭、ヴァンパイアキラー。三百年前、ラルフ＝クリストファーを試すために闘いを挑んだときにも、アルカードは同じような目に遭っている。もっともあのときの闘いはほぼ互角であった上に、叩き伏せられたアルカードに彼はとどめを刺さなかった。ラルフはどんな弱小の魔物に対しても、滅ぼす前に必ず神への帰順を説いていた。鍛え上げられた体にまったくそぐわない、あの隠者めいた瞳――あの瞳を受け継ぐはずの子孫が、あれほどの狂気に見舞わ

れるとは到底信じられない。
――しかしあの血の匂い。あれはまさしくベルモンドだった。
「……貴方はキリスト者なのですか？」
沈黙に耐えかねたのか、アリエルが独り言のように呟いた。
「母がそうだった。――神などおらぬ。少なくともキリストがそうであるとは思わぬ」
「……私、この間までウィーンにいたのです。別荘があって、とっても小さいのだけど。ピアノの勉強をしていました」
ウィーン……確かハンガリーのさらに向こう、ハプスブルグとかいう貴族が支配している街だったか。しかしピアノとは何の学問のことだろう――アルカードは世代の格差に頭をひねった。
「そこで先生をしてくれた方が、アルカードさんと同じことを言ってました。『キリストは神なんかではない。あの時代に磔台に上がれば誰だってキリストになれた』なんて大声で言って、家の者たちはそれはもう大慌てで……」
アリエルの声は話すうちに小さくなっていった。口の中でもぐもぐとなにごとかを呟いたあと、ぽつんと言い放つ。
「……ベートホーフェン先生の、アルカードさんの言うとおりですね。神様なんていませんでした。神様がいればこんなことにはならなかったのに。私、もう楽譜も読めない……！」
かける言葉も見つからない。声を押し殺して泣くアリエルを見ているのが辛くて、アルカードは目を閉じた。
やがて身廊（ろう）の方からぱたぱたと足音が聞こえ、アドリアンがイェルと共に帰ってきた。
「アルカード様！　お体は大丈夫ですか！」
矢のように飛んでくるなり、妖精はアルカードの首にかじりついた。慌てて引き剥がそうとするも、接着したようにくっついて取れない。
「よかったあ、気がついて。――その妖精さん、ずっとアルカードさんのこと心配してたんですよ」

アドリアンが走り寄ってくる。とりあえずは皆無事だったようだ——妖精を剥がすのは諦めて、アルカードは安堵の溜息をついた。
「アドリアン、オルロックは見つからなかったようだな」
横になって天井に架かる穹窿（きゅうりょう）を見上げながら、失望を声に出さないように努めた。これからのことを考えると頭が痛くなる。歩くこともままならないこの体と二人の荷物を抱えて、どのようにしてドラキュラ討伐を図ればいい？　アルカードは絶望しかけていた。
「え？　オルロックって誰ですか？」
「なに？」
「僕らが捜してきたのは」アドリアンが身廊を振り返る。「あの人ですよ」
アドリアンの指の向こうには、身廊の奥から歩いてくるマリアがいた。
「……なぜマリアが。——イェル、お前が？」
「その子に呼ばれて来たのよ。アルカードが大変だ、大怪我をしてるって。——大丈夫？」
マリアが来てくれたことにも安堵したが、それ以上にこの頑固な妖精が進んで人間と交わろうとしたことに、言いようのない喜びを感じた。
「人間嫌いは直ったのか？　我が忠良よ」
妖精は答えずに、首にかじりついたまま泣き出してしまった。
「とりあえず来てはみたけれど……なんだか大所帯になったわね」
アルカードの傍らまで歩いてくると、マリアはそう言って悪戯っぽく笑った。
「……そこに座っている少女はアリエルという。アリエル・ダナスティだ」
マリアの笑顔が凍り付いた。「……ダナスティってまさか、あの三聖人のダナスティ？」
「そうだ。彼女もまたドラキュラ討伐の目的の下に、この城へやってきた。——城主に捕らえられ、このような仕打ちを受けるに至

ったが」
アリエルは咎められたように頭を下げた。マリアは口を覆って彼女を凝視している。
「この機会に聞いておきたい。お前はこの城を消すためにやってきたそうだが、その他にも理由があるはずだな？」
天啓のようにひらめくものがあったが、アルカードはあえてそう聞いた。マリアは即答せず、アリエルの横に腰掛けると「拭いてあげる」といって小さな水筒を取り出した。
「……義兄を捜して来たの。リヒター・ベルモンドという人よ」
「ベルモンドって」アドリアンが割り込んでくる。「あの鞭の、三聖人の？」
「そう。その鞭のベルモンドよ。私は血のつながりがないから、ベルモンドではないけどね」
やはりそうか――ヴァンパイアキラーの残した傷がうずいて、アルカードは歯を食いしばった。
「五年前にドラキュラ公が復活したとき、私は彼と一緒にここにいたの。私は姉と一緒にドラキュラに攫われて、リヒターに救出された。幸いにも私には不思議な力があったから、彼の手助けができた。リヒターの手によってドラキュラ公は斃れ、城は崩壊した……」
「す、凄い。じゃあ貴女はヴァンパイアハンターなんですか？」
アドリアンが英雄を見る眼差しでマリアを見やる。マリアはアリエルの頬を拭いながら「そう名乗ったことはないけど、そう呼ばれることもあるわね」と自嘲気味に言った。
「そのリヒターが失踪したのが、一年前の話。一族総出で探し回ったわ。彼はベルモンド家の家宝を持ち出していたから」
「ヴァンパイアキラーだな」
マリアの貌に鋭い険が走る。「……なぜ貴方がそれを知っているの？」
ラルフは俺の頼みを聞き届けてくれたようだな――アルカードは自分の名前を正史に残さないよう、前もってラルフに図っておいた

のだ。
「見ろ」
途端、マリアが素っ頓狂な悲鳴を上げて後ろを向いた。
「マリア、よく見ろ」
「貴方って……度し難いわ……！」
服をはだけて胸をさらしたアルカードに、マリアは真っ赤になって抗議した。
「……なんなの、この傷……。なにをされればこんな……」
やや遠巻きにアルカードの抉(えぐ)られ焦げた傷をあらためながら、マリアは形の良い眉をひそめた。
「その家宝とやらでつけられた傷だ」
マリアとアドリアンが同時に驚きの声を上げた。
「じゃあ……あいつがリヒター・ベルモンドなんですか……？あの狂人が？」
アドリアンの言いように、マリアは味方から矢を射かけられたような顔を向ける。
「狂人って……」
「マリア」アドリアンに食ってかかろうとしたマリアを呼び止める。
「マリア、この城にリヒター・ベルモンドという人間がいるかどうかはわからぬ。が、ここからほど近い闘技場で、俺達はベルモンドの人間に遭った。彼は自らを城主と言い、闇の魔法を操り、長尺の鞭を駆って襲いかかってきた」
「人違いよ！　リヒターはベルモンド家の歴史の中で最も強力な力を持っている。その力を扱うに足る精神力と正義の心を持っているわ。悪魔城の城主になるなんてあり得ない」
「でもマリアさん、あの男は確かに鞭を――」
「鞭を持っていたからなに？　ベルモンドが鞭を振り回す絵なんて、パリ辺りの三流ゴシップ誌を開けばいくらでも載ってるわ！『ほら吹きベルモンド、吸血鬼の調教に成功』なんてね！」

ドラキュラの脅威を知らぬ西欧の人間が東欧の怪異に理解を示さないのは、三百年前も今も変わらないらしい。それも影に身を潜めるヴァンパイアハンター、この辺りではクルースニックと呼ばれる者達の、人知れぬ奮戦があればこそなのだが。

「リヒター・ベルモンドを侮辱する人は、私が許さない。――アルカード、貴方、何者？　貴方は魔族でしょう？　ベルモンドに親戚でも滅ぼされたの？」

首にくっついていた妖精が、堪えに堪えかねて堪忍袋を切ったように飛び出した。すんでのところでそれを掴み、暴れるこびとを懐に突っ込む。

「アドリアン、ベルモンドは俺のことをなんと言っていた？」

「吸血鬼（ヴァンパイア）……」

アドリアンの言葉に、水を打ったような静けさが訪れた。

「そうだ。俺は人が巷間（こうかん）言うところの吸血鬼（ヴァンパイア）だ。だからヴァンパイアキラーがどんなものか、よく知っている」

アルカードは巧みに論点をずらした。ヴァンパイアキラーはなにも夜の一族にだけ特別な力を発揮する類のものではないが、その味を知らない人間に話す分には十分な説得力を持つだろう。

「……でもアルカードさんは血なんか吸わないじゃないですか」

いまさら気がついたのか及び腰になりながらも、アドリアンは気を取り直したように言う。

「今まではな。――これからはあまり俺に背中を向けぬことだ。用心するがいい」

半分は冗談めかしたつもりだったが、アドリアンは額面通りに受け取って青くなった。

「私はアルカードさんを信じます」

今まで黙っていたアリエルが突然口を開いた。

「聖人と呼ばれているベルモンドの人は、私の眼を盗（と）っていきました。神様はそれを見てもなにもしてくれませんでした。でも吸血鬼（ヴァンパイア）と呼ばれたアルカードさんは、私をあの闇から助け出してくれま

した。私はアルカードさんを信じます。アルカードさんが血を欲しがるなら喜んで差し上げます」
「もちろん僕だって同じですよ！　アルカードさんが来てくれなかったらあそこで死んでたんですから、血のちょっとくらい……あのう、どのくらい飲むんですか……？」
「嘘よ……リヒターがこんなこと……」
マリアはアリエルの顔に巻かれた目隠しを見詰めながら、愕然としている。
「アドリアン、アリエル。安心するがいい、俺は血を吸わぬ。――マリア。一族の事だ、俺に口を出すどんな権利もないが、確認しに行くことだけはやめろ。もし仮にあのベルモンドがリヒターだとしても、おそらく奴にはお前がわかるまい」
よほど義兄を尊敬しているのだろう。まるで義兄の無罪を確信していながら、法廷で満場一致の有罪判決を宣告されたような、やるせない怒りと絶望にマリアは打ちのめされていた。
「……わかったわ、半分だけ貴方を信じてあげる。リヒターはそんなことはしない。でも、この城にはドラキュラ以外の強力な城主がいる。これでいい？」
勢いよく振り上げた貌は虚勢に満ちていた。この動顛（どうてん）から立ち直るには時間がかかりそうだ。
「いいも悪いも、俺はリヒター・ベルモンドを知らぬ。ただベルモンドにヴァンパイアキラーで襲われたというだけだ。自身に危険が及ばぬ範囲で、お前はお前の信じたいものを信じるがいい」
突き放した言い方だが、多分彼女にはこういう言葉のほうが慰めになるだろう。はたしてマリアは少しだけ救われたように顔をほころばせた。
「それで、私はなにをする為に呼ばれたの？　――血が欲しいの？」
「欲しければ最初会ったときに襲っている。心配は無用だ、既に血を絶って久しい。血の味などもはや忘れた」

これはアルカードにしてもすれすれの冗談だった。別してマリアの首筋はあまりにも危険に過ぎる。司書にマントを用意させたのも、半分はアルカード自身の眼から彼女の肌を隠す為だった。

「アドリアンもアリエルもよく聞いて欲しい。この城には信頼できる知己(ちき)がいる。オルロックという、俺と同じ夜の……吸血鬼(ヴァンパイア)だ。居場所はわからぬが、定期的にこの礼拝堂に来ているらしい。――マリア、すまぬがそのオルロックと接触を図って欲しい」

「……会うなり噛みつかれたりしないでしょうね」

「マリアさん、ここにある十字架とか持っていったほうがいいですよ。襲われそうになったら……ぎゃー！」

アドリアンがなにかに触って苦しむ真似を始めた。――ひょうきんな奴だ。

「アドリアン、吸血鬼(ヴァンパイア)が十字架に触れぬなどということはない。キリスト者の作り話だ」

「……そうなんですか？」

「ちなみにオルロックはお前くらいの年頃の少年をなによりも好む。オルロックの元へはお前に行って貰うのがいいかも知れぬな」

「……え？　ちょっと、僕、危なくないですか……？」

「冗談だ。――オルロックは俺と同じく血を忌(い)む、思慮深い好人物だ。決して人を襲ったりはせぬ」

アルカードは自信を持って言い切ってから、ふと一抹の不安が胸をよぎるのを感じた。――俺が今語ったオルロックは、三百年前のオルロックだ。俺もまた信じたいものだけを信じているのではないのか？

「……要はこの礼拝堂のどこかに、そのオルロックがいるのね？」

「来ていれば、だが……」

「わかったわ、やりましょ。貸し一つよ」

「待って下さい。皆さんも聞いて下さい」

マントを翻(ひるがえ)して出て行こうとするマリアを、アリエルが呼び止めた。

「アルカードさん、お怪我をしているのでしょう？」
「……そうだが」
何となくいやな予感がして、アルカードは慎重に答えた。
「吸血鬼（ヴァンパイア）の方は血を吸わないで生きていけるものなのですか？」
さて、なんと答えればいいのやら――アルカードは咄嗟（とっさ）の返答に窮（きゅう）した。アリエルの提案が読めるだけに、ここはよく考えて答えを探さなければ。
「滅びはせぬ」
「それは健康なときの話ではありませんか？」
「……」
「お嬢様、そのこころは……？」
アドリアンが無責任にも調子を合わせた。
「つまり……どのくらい必要かわかりませんが、血を吸えばお怪我の治りも早いのではないかと思ったのです」
再び水を打ったような静けさが訪れた。
「アルカードさん。誰に遠慮しているのかはわかりませんが、私なら構いません。血を差し上げます。遠慮をされるほうが私には心外です」
「あのう……僕も少しなら、いや、お嬢様と同じくらいなら……」
まずいことになった――自分でも忌まわしいことに、そう言ってくれる人間がいるとどうしようもなく心が掻き乱されるのだ。アルカードの誓いはもちろん堅固なものに違いはないが、その中心に『人は吸血を忌む』という大前提が通っていることは否（いな）みようがない。
「……ねえ、アルカード。正直に言って。私にもその用意はあるわ。三人が少しずつ貴方に与えれば、大したことにはならないと思う」
マリアまでがアリエルの提案に乗り出した。アルカードは鉄面皮の下で密かな葛藤を繰り広げる。
「……アドリアン」
「はぁい！」

何を勘違いしたものか、アドリアンは気をつけをすると素っ頓狂な声を上げた。
「仮にお前が指を切ったとする。――お前はその足で食事を取りに行くか？　普通は包帯を探しに行かぬか？」
「はあ……まあ……」
「それと同じだ。いくら人外の事とて、縛られることわりは人間のそれと大した違いはない。血を吸ったりかけたりして、どうして傷が塞がるものか」
事実はまったく逆だ。夜の一族にはまさしくその為の力がある。考えるだにおぞましいことだが、この三人の血を一滴残らず吸えば、すぐにでも完全に元の姿に戻ることができるだろう。
いや――アルカードは己の他愛のない思いつきを呪った。どうして元になど戻れる？　傷は塞がってもそれはもはやただの別人だ。アルカードではない。
「……私はアルカードさんを信頼しています。アルカードさんが嘘をつくはずはないと思っています。本当に血は要らないのですか？」
熱っぽく語るアリエルの言葉には暗に、むしろ血を吸って欲しいという明確な意志があった。夜の一族の魅了はまさに今のアリエルのような人間を作り出すために備わっているのだが、皮肉にもアルカードにはありがた迷惑でしかなかった。
「お前達の厚意はありがたいが、要らぬものを要るとは言えぬ」
「わーかった。じゃ、この話は終わりね。貴方はここでおとなしく寝てなさい。オルロックを捜しに行ってくるわ」
本当のことを知っているはずのマリアは、どうやらアルカードの意志を酌(く)んでくれたようだ。話を打ち切ると踵(きびす)を返して身廊を出て行く。あとは二人と共に吉報を待つしかない。アドリアンは暇を持て余したようで、聖歌隊席の正面にある内陣で物色を始めた。

「アルカード様」
襟の中から妖精が這い出てきた。
「……アリエルの提案ですが――」
「聞かぬぞ」
短く突っぱねた。妖精がなにを言おうとしているかは検討がついている。
「せめて左手だけでも元に戻さなければ……有事の際に困ります」
「言っておくぞ、イェル」アルカードは妖精にだけ聞こえるよう、声を低く絞った。「もしあの二人にそのことを話したら……そのときはお前を召し放す。どこへなりと失せるがいい」
妖精は洟をすすり上げると、再び襟の中に入っていった。胸の辺りから忍びやかな泣き声が聞こえてくる。
「……今は待つときだ、イェル。オルロックが来てくれれば、なにか手段を講じてくれるだろう」
――人任せというのも情けない話だが。
「アルカードさーん。ここ開きますよ」
内陣にしつらえたれた主祭壇の裏からアドリアンの声がする。
「アドリアン、あまりその辺りのものを触るな。じっとしていろ」
「うわあ……なんだこれ」
「アドリアン」
仕様のない奴だ――なんだか子守をしている気分で情けなさだけがいや増す。本当に少しかじってやろうかとアルカードは中っ腹になった。
アドリアンはなおもごそごそとした後、朽ちた木箱やら鍍金（めっき）の剥げた杯（カリス）やらを山ほど手に抱えて戻ってきた。飼い主が褒めてくれるのを待っている犬のような笑顔を浮かべている。
「あそこの裏、引き戸みたいになってたんです。なんだか色々入ってました」
一見してすべてゴミである。どうも壊れて使えなくなった祭具な

どが詰め込まれていたようだ。
「痛い目に遭わなければわからぬか、アドリアン。危険なものが潜んでいたらどうするつもりだった？　お前がその腰の剣で皆を護るつもりだったのか」
アドリアンは叱られた犬のようにしょげ返った。「……すみません」
「少し慎重になれ。危険にさらされるのは俺やお前だけでは――」
「人間の匂いがする」
身を乗り出してアドリアンを突き飛ばすと、アルカードは唯一自由になる右手で槍を取った。
「アドリアン、離れろ！」
言い終わる前に目の前のゴミが破裂した。四散した木屑の中から細長い影が飛び出てくる。
――アドリアンめ、言わぬことではない！
「夜の一族？」
地鳴りのような声。ゴミの山から出てきたのは、一見なんの変哲もない剣だった。――宙に浮いている事を別にすれば、だが。
「貴様、その槍でこの身をどうするつもりだ」
アルカードは槍を短く持って構え、相手の出方を探っていた。――剣の形をした魔族など聞いたことがない。これはなんだ？
「何者だ」
「貴様から名乗れ無礼者」
即座に返されてアルカードは答えに詰まった。
「うわあ……剣がしゃべってる」
剣が振り返る、というよりも半回転する。
「お前がしゃべっているのになぜこの身がしゃべるのを不思議がる、小僧」
「アドリアン、黙っていろ！――アルカードだ。お前は何者だ」
剣がまた半回転し、アルカードの真上まで飛んできた。
「名などない」

「……では質問を変えよう。お前は魔族か？」
どうも悪意を持った魔物ではないらしい。アルカードはおもむろに槍を下ろした。
「そうだ。だが今は違う。……よくわからん。思い出せん」
特に逃げる様子もないので、アルカードはそろそろと手を伸ばすと剣の柄を握ってみた。
――魔導器だ。
「……なんのつもりだ、貴様」
おとなしく握られてはいるものの、その声は剣呑（けんのん）である。振ったり裏返したりしながら細部を調べてみたところ、どうやらアルカードの槍のように武器に魔導器が付いているわけではなく、この剣自身が魔導器であるらしい。
――話す魔導器などというものが存在するのか？　少なくとも俺は聞いたことがない。
握りの部分に小さく金釘（かなくぎ）流の文字が彫ってあった。これがこの剣の名前なのだろうか。
「いい加減にせんと――」
「剣、本当になにも思い出せぬのか？」
「剣と呼ぶな」
扱いづらい剣だ――アルカードは声を出さずに溜息をついた。
「溜息をつくな」
「……で、どうなのだ」
「わからん。お前は夜の一族か？」
「そうだ」
「なんだか懐かしい気がする……」剣はアルカードの手を離れると、周囲をぐるぐると回り出した。「なにかされた記憶がある。貴様に。いや、違うな、うむ……」
剣は細かく震えながら考え込んでしまった。
「……ねえ、アドリアン。なんだか凄い音がしたけど、誰か来たの？」

「お嬢様、誰か来たとかそんなもんじゃないです。剣がしゃべってるんです。それも宙に浮いて」
「小僧黙れ。気が散る」
「……今の？」
「はい」
その後、待てど暮らせど剣は結論を出せないままぶるぶると震えていた。アドリアンはそのうち退屈したようで、またも内陣の中に入って行こうとする。
「アドリアン――！」
「貴様、夜の一族」
剣が震えるのを止めた。
「やはり貴様になにかされている、しかし貴様じゃない。そうだ、もっと濃いのだ。貴様はなんだか……薄い」
――こいつはひょっとして、ドラキュラの事を言っているのか？
「剣よ」
「剣と呼ぶな」
「呼ぶなと言われても、名前がないのだから呼びようがない。――お前は自分の名前が知りたくはないか？」
剣がこちらに切っ先を向けた。槍に手が伸びそうになるのを抑える。
「貴様がこの身のなにを知っている。適当な事を言うと容赦せんぞ」
「お前の柄に名前が彫ってあった」
そこからの剣の行動は実に滑稽（こっけい）なものだった。剣身に目があるのだろうか、柄の方を見ようとして激しく回転を始めたのだ。一部始終を聞いていたアドリアンがそれを見てはじけるように笑い出した。
――あまり頭はよくないようだ。うまくすればこちらの味方にできるか知れぬ。
たっぷり五分も回った後、今度は鏡を探して身廊の中を飛び回り始める。首尾良く内陣で鏡を見つけるも、悲劇的なことに彼の目の

ついている側と文字が彫ってある側は逆のようで、ここでも剣は往生際悪く回った。アドリアンは腹を抱えて痙攣していた。
「……気は済んだか？」
「無念だ。なんという不自由な体だ。この体を作った奴に復讐してやる」
「名前が知りたいか」
「この身にはそれしか縋るものがない。知りたい」
「ひとつ条件がある」
怒り出すかと思ったが、剣は神妙に浮いていた。怒っていたとしても外見からは判断がつかなかったが。
「俺に協力してほしい」
「協力とはどんな事をするんだ」
「俺の剣になって貰いたいのだ」
「貴様に使われろと言うのか」
「そうだ。いやならいい、お前の名前はこれから先ずっと『剣』だ」
剣は黙ってしまった。思っていた以上に単純なようで、名前を聞き出してから知らぬ振りをしようなどとは夢にも思わないらしい。
「それしか手段がないなら、仕方がない。不本意だが貴様の剣になってやろう。――さあ、この身の名を教えろ。嘘をつくなよ」
そう言うと、剣はアルカードの右手に収った。
「よく聞け。お前の名はヤドリギ（ヴァスク）だ」
「ヴァスク、ヴァスク……いい名だ！　ヴァスク！」
「アルカード様」
胸の辺りから籠もった声がした。そういえばいつまで経っても妖精は出てこない。
「イェル、服の中から出てくれ。落ち着かぬ」
「……あの方、高位の魔族のようです」
襟から顔だけを出すと、喜び勇んで名前を連呼するヴァスクを怖（こわ）々（ごわ）と見詰める。

「なにを怖れる。あれはそれほど悪質なようには見えぬが」
「む、妖精がいる」
妖精の怖れようはひとかたならないものがあり、ヴァスクが近づくなり目から下をアルカードの襟の中に隠してしまった。
「妖精、妖精……懐かしい気がする。うむ、確か、なかなかいけた」
妖精の顔は服の中に消えていた。

――やはり尋常の傷ではない。
脇腹から斜めに走る醜い傷を指でなぞる。
マリアが出て行ってから一時間も経っただろうか。アドリアンは聖歌隊席の一角に陣取って眠り、アリエルは服の端を揉みながら物思いに耽っている様子。首尾の如何にかかわらず、そろそろマリアが戻ってきてもいい頃なのだが。
魔導器の力のおかげで、先の戦闘で受けた傷は特に重かった左手を含め、ほぼ快癒しかけていた。――ベルモンドの一撃を除いては。
傷口から下の痺れが治まらない。傷自体も非常に治りにくいようで、炎の体を持つ蛇が這った跡のようなそれは、つけられたときとほとんど変わっていない。槍を杖にすれば歩けるかも知れないが、戦闘など絶望的だろう。
「人間が眠ったぞ。この身はいつ眠くなるんだ」
先程アルカードの剣になったヴァスクは、よくわからないことをぶつぶつと呟きながら、最前からその辺りを漂っている。目下、頼るとしたらこいつくらいだが――控えめに見てもあまり役に立ちそうにない。妖精は高位の魔族と言っていたが、ただ尊大なだけで品位のかけらも見出せない。魔導器が自我を持った、などという仮説も考えにくいが、少なくとも高位の魔族であると言われるよりは説得力があった。

「イェル」
声をかけたが答えはない。襟を開いて見ると、アルカードの胸の中で丸くなって寝息を立てていた。
「アルカードさん」
囁くような声に顔を上げると、アリエルが手探りでこちらに歩いてくるところだった。
「アリエル、いい。そこに座れ。俺が行く」
世話の焼ける――聖歌隊席の背もたれをなぞりながら危うげに歩くアリエルを見かねて、アルカードは槍を杖に立ち上がった。そのまま構わずに近づいてくるアリエルの肩を掴んで座らせると、自身もその隣に腰をかけた。
「何だ。お前も眠れるなら眠っておいたほうがいい」
「アルカードさんは、以前にもここにおられた事がありますね？」
「……以前もなにも、俺は魔族だ。ここにいて不思議なことなどあるまい」
アリエルの含みのある言葉に、アルカードは答えをはぐらかしてとぼけた。
「私のご先祖さまにグラントという人がいます。三百年以上前にドラキュラを斃した、三聖人と言われている人です」
「人間の間では有名なようだな」
「彼は文盲でした」見えぬはずなのに、アリエルの目のあった場所はぴたりとアルカードの瞳を捉えていた。「でものちに得た家族に口述筆記させて、たくさんの手記を遺しました。その中にアルカードという人が頻繁に出てくるのです」
グラントめ――あれほど俺の名を残すなと言ったのに、端から守る気などなかったのか。
「グラントはアルカードのことを『三人目の聖人』と言っています。彼は自分のことを聖人だとは思っていなかったし、呼ばせることもしなかったそうです」
「……」

「アルカードはドラキュラ公と人間とのあいだに生まれたダンピールでした。ドラキュラ公の悪事に心を痛めて、ラルフ＝クリストファー達三聖人と共に父親を斃したのち、そのことを恥じて永遠の眠りについたといいます」
ダンピールなるものの意味はよくわからなかったが、要はグラントはアルカードが余人に知られたくなかった事柄を洗いざらい白状してしまったということだろう。
「それが俺だと言いたいのか」
アリエルは唇を噛むと、心持ち仰向(あおむ)いた。遠くでヴァスクが「腹が減った。この身に腹などないのに。どこが減ったというんだ」と独りごちるのが聞こえる。
「……グラントは夭逝(ようせい)しましたが、今際(いまわ)のきわに最後の手記を三通遺しました。遺言です。それぞれラルフ＝クリストファー、サイファ、そしてアルカード宛に」
「三聖人ではなく、四聖人だったというわけか」
「はい。それぞれの内容はとても短いものでした。ラルフには『妻を労れ、子を多く成せ』と。サイファには『来世では自分が貰いに行く』と。アルカードには『待っているが急ぐな』と」
――急ぐな、か。あの寂しがり屋が柄にもない。
「俺はそれなりの時を生きてきたが、あのドラキュラに子供がいたことすら聞いたことはない。ましてそれが人間との子などと、魔族が聞いたら一笑に伏すだろう」
「……貴方はドラキュラを斃すためにこの城に来たのでしょう？ドラキュラの臣下たる吸血鬼(ヴァンパイア)の貴方が。主を斃すに足るほどの理由があるはずです」
吸血鬼(ヴァンパイア)、という言葉にぴくりと眉が上がるのを感じる。――やはりいつ聞いても快(こころよ)いものではない。
「遺恨(いこん)だ。――下の者が上の者を覆(くつがえ)すことなど、人の世にあってさえ珍しいことではない。お前は魔族を勘違いしている」
「アルカードは他の吸血鬼と違って人を理解しようと努め、その

血を忌み嫌ったといいます。同時に常に渇きに苦しんでいたそうです。グラントを初め三聖人は幾度か彼を哀れに思い、ナイフで指を切って血を与えようとしたそうですが、彼は牙を剥いて拒絶したと、そう書いてありました」

アリエルは挑むようにまくし立てた。まるでこれが動かぬ証拠だとでも言いたげに。

「貴方が血を吸わない理由を、お聞かせ願えませんか？」

「もう休め、アリエル。お前は俺を空想上の聖人に祭り上げたいようだが、こちらとしては迷惑もいいところだ。――父親を滅ぼすなど、人も魔族も禁忌であることに違いはない。その聖人のアルカードとやらもなにか考えがあってのことだったのだろうが、俺には理解できぬ」

それだけ言うと、アルカードは槍を杖にアドリアンの隣へ移動した。アリエルはまったく途方に暮れたように背中を丸め、今までアルカードが座っていた辺りに顔を俯けていた。

「眠れ、アリエル。心配するな、聖人であろうとなかろうと、アルカードはドラキュラに挑むだろう。一足先に家に帰る夢でも見るがいい」

聞こえていないかのように、アリエルは身じろぎ一つしなかった。ほんの少し視線を切っただけなのに、やけに背中が小さくなったような気がする。先の聖人アルカードの話は、彼女を支える張りの一つであったのだろう。

奇妙な罪悪感を胸に、アルカードは目を閉じた。

名前を呼ばれたような気がして、アルカードは浅い眠りから覚めた。

マリアは未だ戻っていないようだった。なにかあったのかも知れぬと辺りを見回せば――アリエルとアドリアンの姿が見えない。妖

精もヴァスクもいなかった。
「アドリアン、アリエル！　いないのか！」
アルカードの声は堂内に響き渡るのみだった。またアドリアンが内陣でとんでもないものを見つけたのかと辺りを探してみたが、手がかり一つ見当たらない。アルカードは眉を焼かれるような焦燥に駆られた。
「アドリアン」
かけられた声に振り返り、凍り付いた。聖歌隊席の傍らにオルロックが立っていた。
「オルロック……」
名前を呼び終えるや否や、オルロックは矢のようにアルカードに向かってきた。身構える暇もなく抱き付かれる。嗅ぎ慣れない香水が強く香る。締め殺されるのではないかと疑うほどの、それは強い抱擁だった。
「アドリアン、逢いたかったぞ！」
「オルロック、お前が香水を？　母上が見たらなんと言うだろう！」
「措け。私だって香水くらいつける。男装に眉を顰めていたお前が今それを言うのか！」
腰まで届く暗い銀髪をまとわりつかせて、オルロックはその麗貌に零れるような笑みを浮かべた。
「オルロック、お前に頼みたいことが――」
「なにも言うな。今は再会を喜んでくれ！　アドリアン、今まで本当に色々あったが……いや、そんなことはいい！　再び逢えて本当に嬉しい、アドリアン」
アルカードの肩に頬を埋めて、オルロックは泣いているようだった。彼女の肺腑の言葉に、気を失ってその場に倒れ伏しそうなほどの安堵と喜びが体を貫いた。
――ああ、全ては杞憂だった！　オルロックは昔と変わらぬ情を、俺に持ち続けてくれていたのだ！

「オルロック、これだけは言わせてくれ。あの日お前の言葉に背いたことを詫びなければ――」
「馬鹿！　あのときはお互いの立場があっただろう？　今はないのだ！　もうそんなことはどうでもいい！」
再会の喜びに小さな釘が突き刺さった。――今もあるのだと言えば彼女は喜ぶまい。だがなんとかして説得しなければ。
「オルロック、ここに俺以外に誰かいたはずだ。彼らを知らないか？」
「心配するな、ちゃんと別の場所に移しておいた。今頃は丁重にもてなされているはずだ。――お前とは二人だけで逢いたかった。でも」耳朶を噛むように、オルロックは甘く囁く。「できればもっと早く逢いたかった。だが繰り言は言うまい、お前は戻ってきたのだから」
オルロックは抱擁を解くと、含み笑いながら後退った。左目にかけた単眼鏡がきらりと光る。
「……さあ、三百年以上も意地悪をされたのだ。今度はお前が私に会いに来てくれ。城の地下、地底湖にある離宮で私は待っている。早く私を捜し出して抱きしめてくれ。そして来し方をともに語り明かそう」
歌うようにそう言うと、オルロックは忽然とかき消えてしまった。
「オルロック……」
香水の残り香とオルロックの髪の感触だけが残った。なにも考えられない。ふらふらと突っ立ったまま、アルカードは未だオルロックという酩酊のうちにいた。
「おい、起きろ、貴様」

「アルカード様、アルカード様」
「やはり刺そう。死なん程度にすればいいのだ。この身が刺せば大概死ぬが」
「またお戯れを！　ヴァスク様は過激に過ぎます！　アルカード

様、起きてください」
アルカードは目を見開くと跳ね起きた。肩に手をかけていた妖精が余勢でキャアと吹き飛ばされる。
「……なにがあった。アドリアンとアリエルは？」
「すみません、私も眠っていて……。でもヴァスク様が見ています」
「おい、それよりあれは放っておいていいのか」
「ああもう……なにからお伝えすればいいのか……」
妖精は混乱の極みにあるようだった。
「落ち着け、イェル。順序を追って話せ」
「順序を追っていたらあれは死ぬぞ。いや、最初に追えば死なんか」
「少し黙れヴァスク！　――いや待て、死ぬとはなんのことだ？」
「黙れとはなんだ貴様――」
「マリアが大怪我をしていますっ！　そこにっ！」
妖精が金切り声を上げた。
彼女が指さした身廊の隅に、行き倒れるようにして血まみれのマリアが俯せていた。背中には切り裂かれて端布（はぎれ）のようになったマントが辛うじてくっついている。
「マリア、なにがあった」
「ごめんなさい……やっぱり、貴方の言う通りだった……」
駆け寄って抱き起こすと、マリアはうわごとのように呟いた。濃密な血の匂いに牙が伸びてくるのを感じる。この血に濡れた娘の肌はどんな味がするだろう――アルカードは抜き手を二の腕に突き刺して妄想を振り払った。
「ベルモンドに会いに行ったのか……！　あれほど――」
「違うの。礼拝堂に彼が……魔物を大勢引き連れて。ここには貴方達がいるから……なんとか注意を逸（そ）らそうと思ったんだけど……」
苦しげに呟く間にも、マリアの体からはじくじくと血が滲（にじ）み出てくる。早く処置をしなければ早晩マリアは死ぬだろう。

もはや迷っている暇はない――アルカードは傷つけた二の腕から血を絞(しぼ)り、マリアの体に注いだ。
「なに……？」
「安静にしていろ、傷を塞ぐ。――ヴァスク！　来い」
紋切り口調で呼びつけると、ヴァスクはぶつぶつ言いながらも飛んできた。
「俺の胸にできるだけ大きく、だが死なない程度の傷をつけろ」
「アルカード様！　いけません、まだご自分のお怪我が……！」
妖精にそう言われると、今頃になって体の痺れが消えていることに気づいた。胸をはだけてみれば、醜く這っていたヴァンパイアキラーの傷は、引き攣(つ)れたような跡を残す程度にまで治っている。
――オルロックの仕業か。
「難しい注文だ。殺す気でやればいいのか、生かす気でやればいいのか。……迷う」
俺はこいつに滅ぼされるかも知れぬ――マントを外し上衣と肌着を脱ぎ捨て、あるだけの魔導器を握りしめると、アルカードはつかのま恐怖に囚(とら)われた。
――これは賭だ。二人とも助かるか、二人とも死ぬか。
「どこに当たると死ぬんだったか。心臓はどうだったかな、あれは大丈夫だったか。よく思い出せん」
「……心臓は避けろ。出血を起こせばそれでいい。さあ、やれ」
「アルカード様、どうしてそこまで人間に――！」
「ヴァスク、早くしろ！　俺とて恐ろしいのだぞっ！」
アルカードが怒鳴り終えるや否や、音もなくヴァスクが振り下ろされた。一拍遅れで血がしぶき、もう一拍遅れて火がついたような激痛が襲ってくる。堪(たま)らず一度膝をつき、マリアの元まで這っていって彼女の体を抱き締める。
「ちょっと……！」
「死にたくなければ……我慢しろ」

傷口をじかに接触させ、魔力を触媒とし、他人の生き血を生体組織に変質させる。――夜の一族にとって基本的な自己蘇生術も、他人に使う場合には文字通り命がかかる。アルカード自身、他人に使うのは初めてだった。

「貴方って本当に……度し難いわ……」

マリアが呟く。いまや血まみれどころか、彼女の上衣は血に浸けたように真っ黒になっていた。

――次は、背中。

マリアの体を前に向けると、今度は背後から抱き竦めた。雲の上にいるかのように姿勢が安定せず、視界はぼやけ、体内の血と魔力が恐ろしい勢いで外へ流れ出ていくのを感じる。アルカードは意識を失う前にマリアの背中を放した。

「これでいいだろう……」

マリアが血に染んだ自分の体を恐るおそる検めている。粘つく赤い液体を手で拭い払うと、その下からは元の通りの滑らかな肌が現れた。

――次はこちらの番だが……。

血は容易に止まらなかったが、問題はそれではない。大量の失血と魔力の消耗をみて、体が形振り構わず他人の血を求め出している。眼球が圧迫されたように視界が赤く染まり、耳は血が血管を流れるごおごおという音ばかりを追う。アルカードが立てた誓いも、過去に起因する様々な人間への思い入れも霞がかったように不鮮明になり、生けるものはひとしなみに抗えぬ生存本能が首をもたげる。ここで意識を失えばおそらく、次に気付いたとき最初に目に映るのは、干涸らびたマリアの死骸だろう。

「妖精、小僧はなにをしたんだ？　自分を斬れと言ったり、人間にくっついたり、まったくわからん」

「アルカード様はご自分の血で人間の怪我を治したんですっ！」

ヴァスクを怒鳴りつけると、妖精はマリアを睨みながらアルカードの元まで飛んできた。

「イェル、魔導器を……」
震える手を妖精が掴む。「すみません、触れません。――お願いです、血を吸ってください。マリアも嫌とは言いません、言わせません。このままではアルカード様が――」
「その子の言う通りよ、アルカード」マリアが膝をついて這い寄って来る。「わがままも大概にしなさい！　勝手に人に恩を売って、自己満足して滅んでいくつもり？　さあ！　私の気が済まないの。血を吸いなさい！」
言葉の途中でマリアは泣き出してしまった。今やこの娘の存在こそが、真に俺を脅かしているというのに――できるものなら立ち上がってこの場から走り去りたかった。
「小僧、貴様は滅びそうなのか？」
「……見て判断できぬか、ヴァスク。お前でもいい、ドラキュラの血を……」
「わからん。わからんが……なんだろう、胸に迫るものがある。……この身に胸なんかあったかな」
ヴァスクはまったく役に立ちそうもない。
「アルカード、これ？」マリアが床に散乱した魔導器の中から、ドラキュラの血を掴み出す。「あのお爺さんから貰ったものでしょう？　これが欲しいの？」
できるだけマリアのほうを見ないようにしながら魔導器を引ったくる。最初の賭にはなんとか勝ったようだが――赤い球体を口に放り込むと、アルカードは一瞬躊躇した。
この賭ははっきり言って分が悪すぎた。魔導器の破壊が、果たして城にどのような影響を及ぼすのか見当もつかない。一つ失われたくらいでは変わりはないか、城の一角が崩れる程度で済むか――あるいはカードで作った塔のように全てが崩壊するか。
ままよ、と口中の球体を噛み砕いた瞬間、アルカードの意識は消し飛んだ。

真っ暗だ――アドリアンは薄っぺらい毛布をはね除けると、硬い寝台から身を起こした。

「母上？」

室内に架け渡された仕切布を退ける。誰もいなかった。半開きになった出窓からは月明かりの一条すら入っては来なかったが、この頃はなぜか暗闇でも周りが見えるのだ。母はやたらとそれを興がり、「アドリアンがいればロウソクがいらないわ」などと喜ぶものだから、最近は暗くなれば用もないのに母にくっついている。父がそれを見つけるたびに「少しは母親離れせんか」と窘めるけれど、父はきっとやきもちを焼いているだけなのだとアドリアンは気にも留めていなかった。

――伯父上のうちに来てたんだっけ。

シビエルに居を構える伯父セルジュの家は、父の巨大な城とは比べるべくもない、茅で葺いた質素な木造家屋である。なんで母上の兄上がこんな小さな家に住んでいるんだろうと疑問に思うこともあったが、正直を言えば厳めしい城よりも、この可愛らしい佇まいのほうが気に入っていた。

この家の隣にもう一軒同じものを建てて、そこに住めればどんなにいいだろう。この間父に話してみたら「母上がいいと言ったらいいぞ」と言っていたので、近いうちに聞いてみようとアドリアンは思った。

次の間にも人影は見えなかった。火の気の失せた暖炉の上には聖ゲオルギウスと聖マリア、その二人に挟まれたイエス様のイコンが飾られ、その後ろに隠すようにして、十字架にかけられたイエス様の像がひっそりと置いてある。伯父いわく、聖ゲオルギウスは祖父ゆかりの聖人であるらしく、その陶製のイコンも他のものと比べて一回り大きい。伯父も伯母も最初は必ずこの聖ゲオルギウスに祈りを捧げるのだった。

――みんな、どこに行ったんだろう。
背の高い卓によじ登り、麻布をかけてあったママリーガの残りをちぎってつまむ。
――まさか僕を置いて、どこかにの家にお呼ばれに行ってしまったのかしら。
そう思うといてもたってもいられず、アドリアンは椅子を蹴立てて家を飛び出すとあてもなく走り出した。
――なんてひどい裏切りだろう。今頃は母上も伯父上も伯母上も、おいしいものをたくさん食べて僕のことなんか忘れているに違いない。
月は雲に隠れていた。橋を渡って麦畑を縫い、肺が破れそうになるほど走ったところでなにかに蹴躓(けつまず)いた。胸の中に膨れあがっていた悲しみに膝小僧を擦りむいた痛みが加わり、アドリアンは地にまろびながら泣き出した。
「おい、アルカード。起きろ、泣くな」
転んだ辺りからなにか声が聞こえたけれど、涙に歪んだ視界にはなにもかもおぼろであった。その辺りの土や石ころを掴んで声の主に投げつけながら、アドリアンは声を上げて泣いた。
「うるさい、どっか行け！　僕がお腹を空かせてたって誰も気にしないんだ！　母上なんか大っ嫌いだ！」
そうやって泣いていれば母が大慌てで迎えに来てくれると思っていたのだが、実際は母が来ることはなく、先程の妙な声がわめくのみだった。
「アルカード、ここはなんだ？　いや、それはいい。起きろ」
「うるさい、もう起きたよ！――うわっ！」
目を拭って立ち上がると、目の前にはアドリアンの身の丈ほどの剣が浮いていた。お化けだ――アドリアンは再び尻餅をついた。
「アルカード、夢なんか見てないでさっさと起きろ。あの小さい人間共が攫われたままなんだぞ。うむ、別に人間共がどうなろうと知ったことではないか」

「……アルカードってなんだよ。僕の名前はアドリアンだ。父上がつけてくれたんだぞ」
「アドリアン？……それはあの小僧のことではなかったか？　お前はアルカードだぞ、なんだか小さいが」
きっとわけのわからない事を言ってどこかに連れていくつもりなんだ――伯父が見せてくれた地獄絵の壁掛けを思い出して、アルカードは土を蹴って一目散に逃げ出した。
「こら、逃げるな。せっかく感心したというのに、もう失望させる気か。アルカード」
お化けは背後にぴったりとくっつきながら後をついてくる。アドリアンはただただ恐ろしくて、声の限り叫びながら駆けた。
「母上ぇ！　伯父上ぇ！　伯母上ぇっ！　助けてえ！　お化けに攫われる！」
「なんという言い草だ。この身をお化けだなどと――」
「アドリアナ！」
土手の下から声を聞いた気がして、アドリアンは立ち止まった。
――僕をアドリアナと呼ぶのは……伯父上だ！
女の子みたいだという理由で、伯父はアドリアンの事を女の子のようにアドリアナと呼ぶ。普段は嫌でいやで仕方がないその呼び名も、お化けに背後を慕われている今では天使の声だった。
お化けはアドリアンの背中に衝突すると、びいんと細かく振動しながら吹き飛び、「急に止まるな馬鹿者、貴様にはほとほと失望したぞ。貴様なんか貴様で十分だ。お前呼ばわりすらもったいない」と勝手に憤(いきどお)った。さっきからぺちゃぺちゃしゃべってばかりいるけれど、どうもお化けはお化けでも無害なやつのようだ。
無視しよう――アドリアンは土手の際まで行くと下を覗き込んだ。
「伯父上、そこにいるの？　晩御飯を――」
「逃げなさい、アドリアナ。ポエナリへ、来た道を戻って……」
そう言うと伯父は濡れたような咳を連発した。草叢(くさむら)の中にいてよくわからないけれど、伯父は俯せているようだった。

「母上はどこ？」
「お前の母さんは村の……いい、早く……」なにか吐き戻すような音がして、それきり伯父はしゃべらなくなった。
よくわからないなりに、アドリアンは立ち上がった。母は村に行ったらしい。伯父の言いつけには逆らうけれど、あとで母に言って取りなして貰おう――アドリアンは相変わらずよくわからない事をわめく剣を従えて、村へと歩き出した。

村の広場を遠巻きに眺めて、アドリアンは立ち止まった。
広場には赤々と灯火が据えられ、その周りを村人達が取り囲んでいる。皆が地面にあるなにかに向かってわいわいとはしゃいでおり、中には杯を傾けて笑っている者もいる。村中の人々が会しているのではないかと思うほどの熱気に、アドリアンは得心がいった。
――今日はお祭りだったんだ。
きっと母も伯母もあの中でご馳走にありついているに違いない。駆け出そうとしたとき、人の輪の中から細長いなにかがぐいぐいと持ち上がるのが見えた。屈強そうな男が十人程、それに縄をかけて引っ張っている。広場に立てられたのは十字架だった。
――母上？
アドリアンは猛然と人の輪に突っ込んでいった。十字架には人が縛められていた。最初こそ人形かなにかだと思ったが、その人形は遠目にも動いているのがわかる。困り切ったように下の人々を見回すその顔は、母にそっくりだった。
「母上！」
――なんで？　なんで母上があんなところに？
「その声は、アドリアン！　そこにいるの？　なんてこと、どうして来てしまったの！」
母が喜んでいるのか悲しんでいるのか、アドリアンにはよくわからなかった。十字架に取り付くと、母の足首を縛めた枷（かせ）を力一杯引っ張る。魔女の子だ、というざわめきが辺りから起こった。

「来ちゃ駄目、アドリアン！　下がりなさい！　伯父上の家に戻って！」
枷はびくともせず、そうこうしているうちに周りの人間達が近づいてきて、アドリアンの腕を掴むと乱暴に引っ張った。頭上の母が半狂乱になって「子供は関係ありません！　子供は許して！」と泣き叫ぶ。
緋と黒の祭服に身を包んだ僧侶が「子供を打擲（ちょうちゃく）してはならん」と言うなり、アドリアンは十字架の根本に放り出された。
「母上、どうして？　なにかの間違いだ！　父上に知らせなきゃ！」
「いいのです、アドリアン。彼らは自分がなにをしているのかわからないの。私の命で皆の気が済むのなら、皆に幸せが訪れるなら、私は喜んで死を迎えましょう」
「駄目だ、そんな事！　なんで母上が死ななくちゃいけないんだ！　嫌だ、そんなの嫌だぁっ！」
アドリアンは泣きながら十字架の根本を素手で叩き、爪で引っ掻いた。十字架は母の命の重みを受けたように堅固で、傷一つ付けられなかった。
「ごめんなさい、アドリアン。貴方にばかりつらい思いを……」
「……人間の匂いじゃないぞ、こりゃ」
ずっと無言で浮いていた剣が、背後で独りごちた。なぜか周囲の人々は後ろのお化けには目もくれない。
「でも、私からの最期の言葉を心に留めて生き続けて。――人を憎しみなさい。そして殺しなさい」
――なに？
「生き続けて罪を重ねるよりも、死んだほうが人間にはよいのです」
「母上――」
「さあ！　そこの人から殺しなさい！　アルカード！」
「違う……」

「どうしたのです？　アルカード」
周りにいた人間達がまぼろしのように消えていき、静けさと共に十字架だけが残った。
「そんなことは言っていないはずだ……」
「なにを言っているの？　――殺して皆を幸せにするのよ」
アドリアン――アルカードは背後のヴァスクを引っ掴むと、頭上の何者かに突きつけた。
「断じて母ではない！　貴様、何者だ！」
母の姿をした何者かがにやっと笑う。瞬間、十字架が爆ぜ、広場に赤い髪の魔物が舞い降りてきた。黒い翼を生やした半裸の女は、アルカードの顔を舐めるように見詰めながら舌なめずりする。
「わたしの呪縛を破るなんて、気に入ったわ。アルカード」
「貴っ様……」
女は大きく伸びをすると、上げた手をこちらに向けて招くように指を動かす。その貌には挑発とも誘惑ともつかない妖艶な笑みが浮かんでいる。
「でも貴方が悪いのよ？　わたしの住処を壊してしまうんだもの。――だけど、許してあげる。貴方、わたし好みだわ。食べてしまいたいくらいよ」
こいつはなにをした？　アルカードはヴァスクの柄を砕けよとばかりに握りしめた。牙が伸び、口中に己の血が満ちる。――こいつは俺にとって絶対に触れてはならぬものを、もっとも汚らしいやりかたで侮辱した！
「……貴様を罵る言葉が思いつかぬ。貴様にはどのような業苦も中らぬ。許さぬ……貴様には死すら生ぬるい……」
「ゆっくりと虜にしてあげる。いらっしゃい――坊や」
女の脇腹の辺りから無数の黒いものが奔る。アルカードは避けも防ぎもせずに全て体で受け止めた。
「おい、貴様。なぜ避けん」
困惑げに抗議するヴァスクを黙殺すると、アルカードは体に突き

刺さった触手を掴んで手繰(たぐ)り始めた。余りの怒りにもはや痛みなど感じず、勝敗の行方にも関心が及ばなかった。
「あら、早く私に来て欲しいのね？　せっかちな殿方だこと。もう少し焦らさなきゃ、貴方もつまらないでしょう？」
女の哄笑と共に、体内で突き刺さった触手の先端が一斉に開くのを感じた。口の端から血が吹き出る。それでもアルカードは手繰るのを止めなかった。
「……そんなに早くひとつになりたいの？　しょうがないわねえ。わたし達は相思相愛ってことかしら」
「今行くわ、愛しい貴方」と言うなり、女はこちらに向かって低く飛び掛かってきた。その両の翼が斧のように変質し、左右からアルカードを襲う。
まやかしのシビエルの村に絶叫がこだました。
「こ、この血の匂い……なぜ夜の一族の血の匂いが……まさか」
左の翼をヴァスクで断ち切り、右の翼を手で握り潰すと、アルカードは呆然とする女の頭を掴んだ。その胸に機械的にヴァスクを突き込む。
「なに？　こ、これは……力が、ああっ」
「おお、うむ、なかなかいけるぞ、これは」
剣魔――ヤドリギ(ヴァスク)の名を冠する魔導器に精を吸われて、女は堪らず膝をついた。ぬめるような艶を湛(たた)えていた肌は急速に衰え、しなび、たちまちにして醜い老女のそれへと変貌していく。
「この力、そして美しさ……ああ、間違いないわ。貴方は、ドラキュラ様の……」
「ヴァスク、滅ぼすな」
ヴァスクは吸精を止め、変わり果てた女は乾いた音を立てて地にまろんだ。
「貴様の持てる全ての力は殺した。が、貴様は滅ぼさぬ。滅んで隠世(かくりよ)に還ることなど許さぬ」氷のような声でアルカードは言い放つ。
「これよりここが貴様の世界だ。いかなる力も望めず、いかなる希

望も持てずに、抜け殻のまま永遠に彷徨うがいい」
「お待ちを……お許しを！　お慈悲を！」
女の憐れみを乞う声が遠ざかっていく。アルカードは眠りに落ち行くように、夢の世界から遊離していった。

開けた光景は妙な既視感を伴う。ここでこうやって目を覚ますのは何度目だろう――アルカードはおもむろに上体を起こした。
――城の崩壊は免(まぬが)れたようだ。あるいはどこか崩れたのかも知れぬが。
「アルカード様っ！」
まったく予想通りに妖精が飛んでくる。泣き虫の妖精を胸で受け止めた途端、背後からもっと重いなにかが飛び掛かってきた。想定外の攻撃に息が詰まる。
「マリア……！」
「これはお返しよ、アルカード」
背後からこちらを抱き竦めながら、マリアは軽くアルカードの頭を叩いた。芳しい血の香りにまたぞろ妄想が起こったが、今度はさほど苦もなく押さえ込めてしまう。
――今までにもあったが、どうやらこれは魔導器の力ではない。吸血衝動が増すことこそあれ、減じることなどないはずなのだが。
「上出来だったぞ、アルカード。おかげで腹もくちくなった」
「ヴァスク、礼を言う。お前が来なければ生還は覚束(おぼつか)なかっただろう」
アルカードは目を閉じた。忘却の雪に埋もれかけていたあの日の記憶が、みがいたばかりの銀のようにありありと思い起こせる。闇の中でかじった冷めたママリーガの味。アドリアナと呼ぶ伯父の最期の声。母の遺言。そして――生まれて初めて味わった人間の血の味。

背中のマリアの温もりが、あの日の前夜、母に抱き竦められて眠った床の温もり、人に理解を示す基となってアルカードを支え続けたあの血の温みを鮮明に蘇らせる。
「マリア」と妖精が短く言った。
「アルカード、これ」
肩越しに白い腕が伸びてきて、アルカードの手に小さなものを落とす。石から削り出した黄色の十字架と、金でできた少年の人形――まぎれもない魔導器だった。
「マリアが取ってきました」
「私はこの子の案内で回収してきただけ。お礼ならこの子に言って」
「二人共、面倒をかけた。礼を言う。――ヴァスク」
呼ばれて半回転したヴァスクは、気のせいか心持ち長くなったように見える。
「なんだ」
「アドリアンとアリエルの事だが」
「ああ……お前はもう忘れていると思っていた。――あれは亡者どもが攫っていった」
「いまさら言っても詮ない事だが……それをお前は指をくわえて眺めていたのか？」
「この身に指などない。あってもくわえたりせん」
「……どのような様子だった？　あの二人も眠りが深かったはずはない」
「抵抗して叫んでいたぞ、お前の名前を」実に他人事のようにあっけらかんと言い放つ。「そこの小娘はいなかったし、お前は呼んでも起きん。刺してもよかったが、それはそこの妖精に止めるように言われていた」
アリエルの話を聞いた時点で目を閉じてしまったのが、いまさらのように悔やまれる。危険なものが潜んでいるかも知れないと言ったのは誰だ？　――畢竟、俺はオルロックとの再会に酔って、あの

二人の助けを呼ぶ声に耳を塞いだにひとしい。
「そこに俺と同じ、夜の一族はいなかったか？　髪の長い、黒い服を着た」
「うむ、夜の一族はいなかったぞ。見た目はばらばらでいまさら区別などつかん」
オルロックはいなかったのか――香水の香りと彼女の髪の感触が、今も生々しく残っている。あれは夢だったのだと言われてもにわかには信じられないが。
――城の地下、地底湖の離宮と言っていたな。
丁重にもてなすとオルロックは言っていた。が、ヴァスクの見た限りではその丁重さは伺えない。その離宮とやらでどのような扱いを受けているにせよ、彼らを取り返しに行かなければならない。
――オルロックは共闘に肯(がえ)んじてくれるだろうか。
「イェル、城の地下へ行ったことは？」
「地下、ですか？　いいえ、ありません。あそこは危険だったので……」
「地下へ行く。――マリア、手を放せ」
「なかなかそう言わないから、ずっとこうしていて欲しいのかと思ったわ」マリアは背中から離れると、そう言って笑った。「悪いけど、肌着だけ借りたわ。――凄くいいものね、これ」
裸で気を失ったアルカードの体には、上衣だけが肩に引っかけられていた。忙しくそれに袖を通し、傍らにかけてあったマントを着ける。ちゃらちゃらと音を立てる懐の魔導器に新しく得た二つを足すと、アルカードはようよう聖歌隊席から立ち上がった。
――ドラキュラの血は予想以上に効いたようだ。
出血の影響で未だ多少の浮遊感はあったが、行動に支障が出るほどのものではない。槍を掴めば新しい魔導器の力で心は奮い立った。
「アルカード、オルロックはいいの？　探してたんじゃ……？」
「オルロックは地下にいる。――お前はここへ残れ」
「もちろん私も行くわ」

マリアは平然とのたまった。その顔色は大量の失血を経て、お世辞にもよいとは言い難い。
「ならぬ。あの出血量でまともに動けるはずがない。足手まといだ」
「それはお互い様」
「人間と魔族をひとしなみに――」
「考えるわよ、もちろん。誰かさんが言ってたわ、『いくら人外の事とて、縛られることわりは人間のそれと大した違いはない』とかなんとか」
大袈裟(おおげさ)に口調まで真似されて、アルカードは絶句した。
「……地下へは行ったことがあるわ、貴方の行きたいところかどうかはわからないけど、少なくとも途中までは案内できると思う」
「……」
「置いて行ったって勝手についていくわ。先導して前に立つか、後をつけるか、それだけの違い。――さ、どうする？　私を縛る？」
アルカードは暫時(ざんじ)、本当に縛り上げて主祭壇の中に放り込んでおこうかと悩んだ。
――しかし……ここも安全だと決まったわけではない。先に反省したばかりだというのに、また同じ愚を犯すこともできぬ。
「……条件を呑め。道の中途で戦闘があったとしても手を出さぬこと。もし俺が滅ぼされたならその場から逃げ、速やかに城を出ること。オルロックとの話には口を出さぬこと。――これを誓うなら連れて行こう」
「……道案内をするっていうのに凄い条件付きね」
「呑めぬならこの場で縛る。仰向(あお)けと俯せとどちらがいい？」
「わーかった。わかったわ、誓う」
ぞんざいに片手を挙げて宣誓するような仕草をすると、マリアは呆れたように溜息をついた。
まだマリアの闘っているところを見たことはなかったが、単身悪魔城に乗り込み、魔導器に触れることができるくらいだから、それ

なりの力も覚悟もあるのだろう。それでもアルカードは人間に進んで魔族を滅ぼさせることはしたくなかった。マリアの為だけではなく、同族の為にも。

「ではマリア、道案内を頼む。先に立って行ってくれ」

「マリア、俺がなにを言いたいか……わかっているな？」

「……ちょっと……休んでる……だけでしょう？」

壁に手をついて、マリアは息を整えながらうるさげに答えた。

マリアいわく、地下は「あともうちょっとよ、黙って着いてきなさい」という曖昧（あいまい）なところにまで来ていたが、ここへ来るまでに彼女は何度も立ち止まって小休止を挟んでいた。顔色は悪くなる一方で、アルカードの肌着一枚という薄着にも拘わらず、額には玉の汗を結んでいる。

――出血の影響が色濃い。

「マリア。地下まで行ったというのは、嘘だな？」

「……」

道を知っているにしては、マリアは頻繁に道に迷った。すでにかなり下の方まで来ていることは確かだったが、行きつ戻りつする間にもマリアの容態はじりじりと悪くなっていく。怪我の功名で、道中さらに二つの魔導器を手に入れられたのは僥倖（ぎょうこう）だったが、遠からずこの道案内が歩けなくなることは確実だった。

アルカードはこれで何度目になるかも定かでない溜息をついた。

「マリア、この辺りの安全な――」

「聞かないわよ……」

どこか安全な場所を探して待てと言ってもずっとこの調子である。

「強情な小娘だな」

「強情な人間ですね」

妙に感心するヴァスクに、まったくの呆れ声で妖精が答えた。まるで他人事だな――アルカードは誰にも聞こえないように舌打ちをした。

「よくなったわ。……行きましょう！」
己を鼓舞するように明るい声を出してもその足取りは危うく、マリアは何歩も歩かないうちに左足に右足をひっかけて転んだ。そのまま荒い息をつきながら立ち上がろうとしない。
「マリア――」
「わかってるわよっ！」
「マリア、聞け」いささか強い調子で言う。「わかっているとは思うが、お前は俺の足を引っ張っている。すでに多くの時間を費やした。これ以上足踏みすることはできぬ」
「……」
慰めも励ましもこの誇り高い娘を傷つけるだけだ。だからこそ幾度も立ち止まるたび、アルカードは無言で待っていた。が、それにも限度がある。
「もはやお前のわがままには付き合えぬ。――もう一度だけ聞くぞ。お前はまだ歩けるのか？　もう歩けないのか？」
「……歩けるわよ。ただ……脚が動かないのよ……！」
肩を震わせて床を掻きむしりながら、マリアは涙声で呻いた。負けず嫌いもここまで来れば始末に負えない。アルカードは深呼吸のような溜息を一つつくと、マリアの前でしゃがんでみせた。
「背負ってやる、乗れ」
「……アルカード――」
「早くしろ、時間がないと言ったぞ。嫌ならそこで横になっていろ。帰りに寄ったときまだ生きていれば拾ってやる」
「……」
マリアは無言でのし掛かってきた。後ろ手に槍を持ち、彼女をそれに座らせる格好で背負うと、アルカードは再び歩き出した。
「ヴァスク、前に来てくれ」
縛り上げて礼拝堂に放っておいた方が良かったのかも知れぬ――一度揺すり上げると、マリアは眠る子供のように頭を預けてきた。

「寒い……」
背中のマリアが耳元で呟いた。マリアの言を待たずとも、周囲の気温が下がってきていることは体感できた。
アルカードは岩肌の剥き出した薄暗い空間にいた。内装らしいものがまったく見受けられないことからも、ここがすでに城の中ではないことが伺える。マリアが倒れたところはちょうど城の最下層と地下を結ぶ分岐点であったらしく、ほどなく下へ通じる階段を発見した。
城の地下は一見して、広いのか狭いのか判別がつきかねた。天井も見えないような大空間があったかと思えば、妖精がやっと入っていけるような小径（こみち）が現れる。その道も城の中のように前か後ろかではなく、文字通り縦横無尽。半病人を背負って行くには少々心が折れる道行（みちゆ）きである。
「なにもないな、ここは。危険なのではなかったのか。期待してたんだぞ」
「はあ、すみません。あのう、私も話に聞いていただけなのでよくは……」
ヴァスクは魔物に会いたがっているふしがあった。魔物の精を求めているのか退屈が嫌なのかは定かではないが。
アルカードはなるたけ平らな足場を探すとマリアを下ろし、その肩にマントをかけてやった。マリアの唇は青く、意識も朦朧（もうろう）としているようで、最前（さいぜん）からなにか話しかけても返事が返って来なかった。もしなんらかの病に冒されたのだとしたら――まったくのところ、礼拝堂を出てより頭痛の種にだけは不自由しない。
「イェル、ヴァスク、なにか変わった匂いはしないか？」
「私は特に……」
「この身にも感じられんな」
「……アルカード様、そのオルロック様は地下のどこにいらっし

やるのですか？」
「地底湖にいると言っていたが……地底湖などどこにもない」
地下の空気はひんやりとしていたが、水気には乏(とぼ)しかった。小さな支流でもあればそれを辿(たど)ることもできたが、ここへ下りてきてからはそんなものすら見かけてはいない。
「チテイコとはなんだ？」
「地底にある湖のことです。湖というのは水たまりのことです」
ヴァスクと妖精が小声で話し合っている。ことこういった場面でヴァスクが役に立つことなどなさそうだ――アルカードはマリアの様子を伺った。
寒いのなら震えるなり歯を鳴らすなりしてもよさそうなものだが、マリアは真っ青になって仰臥(ぎょうが)したまま、死んだように動かなかった。
――人間の病には疎(うと)いが、これはかなりまずい兆候(ちょうこう)なのだろうか……。
「アルカード様」
アルカードは黙って振り返った。
「ヴァスク様が――」
「なんだ、ヴァスク。地底というのは土の中の事だぞ」
口調はどうしてもうんざりしたものになった。まさに八方塞がりの感がある。マリアの容態は非常に悪く、来た道も行く道も知れない。急がなければという気持ちばかりが募(つの)る。
「お前、この身を馬鹿にして――」
「ヴァスク様、ここは抑えて下さい。お話を先に進めましょう。ね？」
妖精はこの短時間でヴァスクの操縦のこつを習熟しつつあるようだった。単純で尊大なヴァスクを操るには、むしろ格下の妖精のほうが適任なのかも知れない。
「……水の匂いならすると言ったんだ」
「……」
一瞬、へし折ってやろうかとも考えたが、すぐに思い止まった。

アルカードは理性のありかを知っていた。
「……よし、案内しろ。――マリア、時間だ」
傍に行って肩に手をかけても、マリアはまったく反応しない。名前を呼びながら手の甲で頬を叩くと、彼女はうっすらと目を開けた。
「……アドリアン」
「マリア？」
「遅いぞ、アドリアン」マリアがそのかんばせに相応しからぬ妖艶な笑みを浮かべる。「案の定迷っていたみたいだな。すまぬ、お前は地図も持っていないのだったか」
「オ、オルロックなのか……？」
不覚にも驚いてしまった。マリアは吊り上げられるように立ち上がると、滑るようにアルカードの胸に収まり、優雅な挙作（きょさ）でその腕を取った。
「ずいぶん遠くに来たのだな、どこから下りてもこんなところには来ないはずだが……まあいい。さあ、私に逢いに行こう。アドリアン」
「……イェル、ヴァスク、行くぞ。道案内が来た」
妖精とヴァスクが呆然と見守る中、アルカードはマリアに腕を取られて道なき道を歩き出した。

目の前に広がる地底湖は、ドラキュラ城をも凌（しの）ごうかというほどの大きさだった。
天井は高すぎて闇にしか見えず、はるかな向こう岸も同様である。ドラキュラ城のような巨大な建造物の下にこのような広大な空間があることが、ひどく危ういことのように思える。
「今、城が落ちては来ないかと考えただろう？」
マリアの口を借りたオルロックが妙に鋭いことを言ってくる。できるだけ取り澄まして否定しても、彼女は見透かしたようにころころと笑うだけだった。
「大丈夫だ、安心しろ。その為の魔導器だ」

――あの宮殿にも魔導器が……。
地底湖の中央に蓮の花のように座す宮殿は、高さこそそれほどでもないが、幅はドラキュラ城を二回りほど小さくした程度にはある。まさか昨日今日作られたものでもあるまいが、ここに住んでいたアルカードでさえ、城の地下にこのような地下空間があることは知らなかった。
「ここはドラキュラ様の離宮だ。上の城が隠世に在るときも、この離宮は現世に在り続ける。――私が管理を仰せつかっていた」
行こう、と言うと、マリアは地底湖に架かる細い石橋へと歩いていった。
ドラキュラの離宮――ドラキュラ復活の準備をする為の基地、とでも言えるのだろうか。ドラキュラが現世からいなくなっても魔物が各地にぽつぽつと出現するのは、あるいはこれがその原因の一端なのかもしれない。水や森に住む妖精の類ならいざ知らず、高位の魔族ともなればその住処もおのずと限られてくる。
あの宮殿にはおそらく、平時にはドラキュラ城と同等程度の戦力が備えられているに違いない。オルロックは現世に駐屯するドラキュラ軍の、司令官とでも言うべき存在なのかもしれない。
「アドリアン！　待ちくたびれてしまうぞ、早く来い」
橋の中程で、マリアが両手に腰を当てて大声を上げていた。
――オルロックがドラキュラ以外の城主を戴くことは考えにくい。ベルモンドのことでなにか聞けるかも知れぬ。
軽く手を振って応えると、アルカードは石橋に足をかけた。奇妙に細いその橋は、人が二人並べるか並べないかといった程度の幅しかない。行儀良く並んで出入りするならともかく、いわば裏ドラキュラ城とも言えるこの宮殿の性格を考えれば、一度に多くの兵をやりとりする為の通路がないのは少し不可解であった。
「堪らんな……嫌な臭いだ。なぜこの身には鼻がないんだ」
背後でヴァスクが呻くように独りごちた。
「私には特に感じられませんが……」

「なにが臭う、ヴァスク」
肩越しに尋ねた。ヴァスクの鼻は少なくともその頭よりは役に立つ。
「亡者(タキシム)だ。ありゃ不味(まず)い、もの凄く臭うぞ。ああ、指が欲しい……鼻がないか」
人間の死体が動き出したものが亡者の正体だが、それを言えば上の城にも多数いたはずだ。なぜ今この時にそんなことを言い出すのか――アルカードは先を急ぎながら訝しんだ。
門の前でマリアは待っていた。アルカードが近づくとまたもするすると胸に飛び込んでくる。
「私の道案内はこれで終わりだ。門をくぐれば別の者が案内する。――支えてやれ」
にやっと笑ったなり、マリアの全身から力が抜けた。橋に頭をぶつける寸前で抱き留める。
「……え？　な、なに？　なに？　なんなの？」
「地下に着いた」
腕の中で目を白黒させるマリアの顔には、地下に下りてきたときの病的な青白さは伺えない。ずっと背負って歩いた分、少しは体力も戻っただろう。
「……なに、ここ」
「今からここに入る。歩けるな？」
「ええ……」
マリアを助け起こすと、橋と同じく妙に細長い形の扉を押した。途端、扉の隙間から白い顔がにゅっと出てくる。きょろきょろと辺りを見回していたマリアが短い悲鳴を上げた。
「いらっしゃいませ、アドリアン様。城代がお待ちでございます」
小さく抑揚のない声を出したのは、どう見てもまだ六歳くらいの童女だった。が、紙のように白い肌がその正体を如実に語っている。
「なんてことを……こんな小さな子まで……」
「人間とて殺す。立って動くか、土中で腐るか、それだけの違い

だ」
案内の亡者がてくてくと歩き出した。彼女の歩幅に合わせて廊下に延べられた毛氈(もうせん)の上をゆっくりと歩く。
「凄いですね、お城の他にこんな場所があったなんて……」
「おそらく限られた者しか立ち入れないのだろう。俺も初めて入る」
妖精は好奇心剥き出しであちこちを飛び回り、案内の足が遅いのをいいことに列を離れ、開いている戸などに素早く入っては溜息をつきながら帰って来たりした。他愛のないものを拾って来て喜んでいる妖精は、なんとなくアドリアンを彷彿(ほうふつ)とさせる。
――攫われてから半日も経っただろうか。二人とも無事だといいが……。
「アルカード、オルロックってどんな人なの？」
「友だ」
「……人となりを聞いてるんだけど」
「……いい奴だ。男勝りで、情熱的で」
「……貴方の笑顔って、初めて見たわ」
じろりと睨みつけても、マリアは目を半月形にたわめてにこにこしている。
「よっぽど大切な友達なのね。――うん、わかるわ。私が小さい頃、近所に無口で無愛想な男の子がいたんだけど、彼、滅多にしゃべらないのに結構人気があったのよ。そういう子に限って友達が多いのよねえ」
マリアの四方山(よもやま)話は黙殺した。
「ヴァスク、まだ臭うか？」
「臭うもなにも、どんどん酷(ひど)くなるぞ。なんてところだ、ドラキュラは鼻がおかしい」
妖精とアルカードがヴァスクを注目し、それを見ていたマリアが一拍遅れでそれに倣(なら)った。
「……ヴァスク様、今、なんと？」

「臭くてかなわんと言ったんだ。くそ、誰か鞘でも作ってくれんものか」
「お前はドラキュラを知っているのか？」
「……お前、知らんのか」
驚いたように言われて、アルカードは再び目の前の剣をへし折ってやりたい衝動に駆られた。
「ヴァスク様、つまり……ヴァスク様はドラキュラ様にお仕えしたことはありますか？」
「どうしてこの身があれに仕えなけりゃならん」
即答だった。考えたこともないといったふうがある。
「お前を作ったのはドラキュラでは――」
「こちらです、アドリアン様。城代がお待ちでございます」
亡者はそう言うとぺこりと頭を下げ、光沢のある樫材の扉を押し開けた。
いつか嗅いだ香水が香る。中は鏡のような大理石を敷き詰めた、美しい調度の立ち並ぶ大広間だった。青白い炎を灯した無数のロウソクが立ち並ぶ、豪奢（ごうしゃ）な装飾照明が頭上から客を睥睨（へいげい）し、部屋のあちこちにもみがいた銀の色をした背の高い燭台が置かれている。光溢（あふ）れる大広間の中央には円卓が置かれ、それにかけてある精緻（せいち）な刺繍を施した雪白（せっぱく）の卓布がきらきらしく目を射た。
一枚の絵のようなその部屋に、オルロックはいた。円卓の奥側にしどけなく腰をかけ、部屋の前に立ち竦む客を慈母の笑みで迎える。左目の単眼鏡こそそのままだったが、髪を結い上げ、胸ぐりの開いた黒いドレスを身につけたオルロックの姿は、男装を見慣れたアルカードにとっては目も眩まんばかりであった。
「かけてくれ、アドリアン」
オルロックはそう言うと、マリアには微笑を送って着席を促（うなが）した。マリアはすっかり上がっているように見える。
「ちょっと……女の人だったの？」
アルカードの隣に腰掛けると、マリアが小声で話しかけてきた。

「見ればわかるだろう」
「もう……こんな服で来るところじゃないわよ……」
アルカードの肌着を情けなげにつまむと、マリアは真実情けない声を上げた。
「椅子には座れんぞ、この身はどこにいればいいんだ？」
「わかりません、隅っこにいましょう」
ヴァスクと妖精は小声でなにごとか相談すると、一緒に広間の隅に引っ込んでいった。
剣魔と妖精が落ち着くまで目で追うと、オルロックはゆっくりと口火を切った。
「ようこそ、我が館へ。ようやく逢えたな。――この服、似合うか？　着慣れないからきっと滑稽に映るだろうけれど」
「男装を止めろと言ったのは間違いではなかったと、今では確信している。よく似合っているぞ、オルロック。――母上にも見せて差し上げたかった」
「……きっと隠世でご覧になっている。お前が女装すればもっとお喜びになると思うがな。アドリアナ？」
アルカードは眉を顰めた。「アドリアナ」呼ばわりは伯父の専売特許ではなく、オルロックがアルカードを虐める時に呼んだあだ名でもあった。
「古い話を……。だが、本当に綺麗になったな、オルロック。見違えたぞ」
「元がいいのだ、少し磨けばよく光る。――でも、ありがとう。他ならぬお前にそう言って貰えて、私も嬉しい」
傍らのマリアが二人をちらちらと盗み見ているのを感じる。話題について行けていないのは明らかだったが、ことオルロックとの対談においてはついて来てもらうつもりもなかった。
「オルロック、昔話はあとにしよう。聞きたいことがある」
「喉が渇いただろう、飲み物を持たせよう」
「今はいい。ドラキュラのことだ」

「いいや、渇いているさ。――時間はあるのだ、ゆっくり話そう」
オルロックが繊手(せんしゅ)をぱちぱちと叩くと、間髪入れず先程の亡者が盆を捧げ持って部屋に入ってきた。盆の上には銀杯が三つと瓶が一つ。
「毒でも入っているかもな」
亡者の給仕で杯を受け取る。瓶から注がれた液体は赤い。
「お前が用意してくれたものなら、毒杯でも呷(あお)る。――これはなんだ？」
マリアもその色を警戒したのか、満たされた杯の中を凝視するのみだ。酸味のある香りがするそれは血ではないようだったが、アルカードはあえて聞いた。
「ただの火酒(ツィカ)だ。血だと思ったか？」
口に手の甲を添えて、まこと女性らしい仕草でオルロックは笑った。男らしい挙作のみで構成された昔のオルロックしか知らないアルカードにとっては、そんななんでもない仕草一つ取っても感慨深いものがある。
「さあ、なにに乾杯しよう？　アドリアナの久闊(きゅうかつ)に？」
「俺はお前の女装にこそ捧げたい」
「女装と言ったな、食えぬ奴」
「……では、ポエナリに」
「ポエナリに」
杯を軽く挙げる。隣でマリアが申し訳なさそうにそれに倣った。
「つよ……」
軽くむせるマリアを横に、二人は唇を濡らす程度に杯を傾けた。オルロックが杯を置くのを見計らって話を切り出す。
「オルロック、お前にとって快い話ではないと思うが、俺はドラキュラを滅ぼしに城へ来た」
「そうだろうな。お前なら、少なくとも私に逢いに来てくれたという理由よりは納得がいく」
「お前に逢いに来たのはついでではない。ないが、それとはまた

別に話があって来た。――ドラキュラ討伐に協力して欲しい」
アルカードは単刀直入に言った。オルロックに小細工など通用しないし、そんなものを弄(ろう)してもこちらの誠意を疑われるだけだ。
オルロックは相変わらず微笑を浮かべたまま杯の中を見詰めていたが、ややあってぽつりと呟いた。
「ドラキュラ様は復活されてはいない」
「えっ？」
マリアが腰を浮かせて驚きの声を上げた。アルカードが視線で窘(たしな)めると思い出したように腰を下ろしたが、見開いた眼はオルロックの麗貌に注がれている。
「……城主がベルモンドであることと関係がありそうだな」
オルロックの笑顔が吹き消えた。真顔で杯を呷ると、にわかに力を失った眼をアルカードに向けた。
「じき食事が来る。それまでの間、先に私の話を聞いてくれ」

第三部

「ドラキュラ様は百年に一度、隠世よりお帰りになられる。私が管理を仰せつかったここは、それをお助けし、また御復活の成った暁には城の諸事を率先して統括し、その為の手勢を温存する、そういう施設だ。この離宮の規模を考えれば大方察しはつくかも知れないが」

おおむねアルカードの考えた通りのようだ。デスがドラキュラの右腕なら、オルロックはさしずめ左腕といったところか。

「二年ほど前のことだ、いったいどこから嗅ぎつけたのか、一人の人間がこの離宮の門を叩いた。といっても彼に体はなく、霊魂のみの存在だった。意志はあったが雑霊に近い。彼は自らを暗黒神官と称し、キリスト教のある影の一派で秘術によって体を捨てたこと、五年前には独力でドラキュラ様を復活させたなどということを吹聴し、私達に協力を求めてきた」

ドラキュラを斃すのもキリストなら、甦らせるのもキリストか――アルカードは腹の底で嗤った。

「馬鹿げた話だ。ドラキュラ様は人間達の下意識に宿る闇の気配を頼りに甦る。一人の、それもいかに体を捨てたとはいえ、只人ごときがやってやれるような次元の話ではない。だが、彼のような人間が増えればそれだけ御復活も近づく。彼の求める協力――とても呑めるものではなかったが、私はそれを丁重に断った上で、人間達の間でお前の考えを広めて欲しいと説いた。彼は無言で去った」

「……その協力とは？」

「血の指輪を貸せ、と。なぜ只人がその存在を知っていたのかはわからぬが」

「その血の指輪というのはなんだ」

「ドラキュラ様が常に指に嵌めていらしている、赤い指輪だ。ドラキュラ様の力が具現化したもので、闇のうからにしか眼に映すこ

とはできないと言われている。ドラキュラ様が幾度斃れようとも滅びぬのは、これの力による。ドラキュラ様がお隠れになったときは、私が責任をもってこの離宮で管理して差し上げているのだが」

そんなものが存在したことにも驚いたが、人間であるマリアが隣に座っているにも拘わらず、平然と魔族の極秘を話すオルロックにも驚かざるを得ない。人間には見えないからこそ滅びを免れてきたというのに、今それを人間、それも歴(れっき)としたヴァンパイアハンターに知らせてしまっていいのだろうか。人間の側に立ちドラキュラの滅びを願うアルカードですら、いささか気が揉(も)める。

「……その一年後、彼は、彼奴(きゃつ)は再びこの離宮に訪れた。ある人物を伴って……」

隣のマリアが息を呑んだ。アルカードと同じ事を考えたのだろう。

「長尺の鞭を駆る、クルースニック……。彼奴は今度は門を叩くこともしなかった。同行したクルースニックは離宮に押し込み、迎撃に出た数多(あまた)の闇のうからをことごとく……信じられるか？　たった一人！　たった一人に、我らは誰一人敵し得なかった。人には見えないはずの血の指輪をどうやってか手にした彼奴は、私に向かって言い放った。百年は待てぬ、と」

マリアは蒼白になって一言も発しなかった。

「……残ったのは運良く滅ぼされずに済んだ亡者がいくたりかと、敵に敗れ任に及ばなかったこの体だけ。――それでも、私はお前を待っていた」

突然、背後の扉が開き、マリアが驚きの声を上げる。亡者が数人、手押し車を伴って部屋に入ってくる。その上には釣鐘蓋(つりがねぶた)をした皿が四つと、銀の小皿が三つ置いてある。

「……なぜだ、オルロック」

部屋の隅で縮(ちぢ)こまっていた妖精とヴァスクが、アルカードの背中に集まってくる。マリアですらその皿の中身に見当がついたようだ。

「……食事にしよう、アドリアン。肉餅(グラタール)も羹(チョルバ)もないが、口に合えば幸いだ」

疲れたような声でオルロックは言う。亡者達は機械的に皿を卓に並べ、それが終わると一斉に釣鐘蓋を持ち上げた。濃密な血臭が立ちこめる。

皿の上には変わり果てたエリオットの首が置いてあった。

「なぜだオルロック……我らの誓いを忘れたのか！」

思いきり叩き付けても、卓はびくともしなかった。オルロックはなにも答えず、目の前に盛られた臓物を素手で掴む。

「やめろ……」

それは優雅さからはほど遠い、獣の食事だった。手も顔も血に塗れながら、オルロックは幼児がそうするように両手で晩餐（ばんさん）を貪（むさぼ）った。

「どうした？　若いのもいいが、ある程度年経（へ）たものもなかなか乙だぞ」

マリアは既に席を立ち、口を手で覆って顔を背けている。

「オルロック……どうして？　俺を苦しめるために呼んだのか……？」

ごくりと口の中のものを飲み下すと、オルロックは席を立って円卓の脇まで歩いてきた。そのままなんの躊躇（ためら）いもなくドレスを下に落とす。

「見ろ、アドリアン」

強い香水に混じってかすかな腐臭がする。それもそのはずで、ドレスの下から現れたオルロックの姿態は、その所々が腐って落ちていた。そしてその腐った肉を縫うようにして全身に這った蛇の跡は――ヴァンパイアキラーによるものだろう。

「血を絶ち続けたこの身には、奴に抗し得るどのような力も残ってはいなかった。恥を忍んで命を乞うたけれど……私は滅んだ。……わかるか？　全てはお前に逢う為だった。この腐臭を放つ体を養い続けるのも、全てはお前に逢う為だった！」

「……」

「彼奴は滅んだ私の体を、亡者として現世に留（とど）めた。滅びたかった。このような醜い有様を誰に見せられる？　――アドリアン、こ

のドレスは二百年以上も前に誂(あつら)えたものだ。いつかお前が帰ってきてくれたなら、これを着て迎えようと。これを着て迎えれば……ちゃんとした女の姿で迎えたなら――」

オルロックの不気味なほど白い頬を、大粒の涙が伝って落ちた。

「――お前は私と一緒になってくれると夢を見ていた！　笑えるだろう？　お前のために誂えたこの服は、今や私のこの醜い体を隠す為だけの、ただの布切れになってしまった！　笑ってくれ。この腐った体にお前が微笑(ほほえ)んでくれるはずはないのだから、せめて笑ってくれ。笑って、アドリアン……」

体の中で何かが折れる音がした。アルカードを長年に渡って支え続けた、その支柱の二つに折れるさまを、アルカードは確かに見た気がした。

「……オルロック、どうしてそんなことを言う。お前は夢など見ていない。俺は帰ってきたではないか。もうどこへも行かぬ、ずっとお前とここにいよう」

「アルカード――！」

アルカードはオルロックに歩み寄ると、その腐った体を抱きしめた。ドラキュラ討伐の宿願(しゅくがん)も今は頭の中になかった。ただ自分を三百年の間待ち続け、想い続けていてくれた友がひたすら憐れだった。

「……やめろ、アドリアン。同情でお前に抱いて欲しくはない。もし……もしお前に私に対する一片の情でも残っているなら、どうかお前の手で私を滅ぼしてくれ」

「どうしてそんなことができる。お前が三百年の間、俺を待ち続けてくれたように、俺もまたお前を想わぬ日はなかった。莫逆(ばくぎゃく)の友よ、お前が滅びるのなら、せめて俺も共に滅びよう」

「アルカード様、なんてことを！」

妖精が飛んできて髪を引っ張った。「ヴァスク様！　オルロック様を斬って下さい！」

「なんと胸に迫る……涙が止まらんわい……眼なんかないが……」

「ヴァスク様の役立たずっ！」

妖精の金切り声もろくに耳に入ってこない。オルロックはアルカードの肩に顎を乗せると、あの夢の中でそうしたように囁いた。
「……本当か？　本当に、私と共に滅んでくれるのか……？」
「続きは隠世で語らおう、オルロック」
「アルカード。私、貴方達のこと、なにも知らないけど――」ずっと成り行きを見詰めていたマリアが口を開く。「アドリアンとアリエルはどうするの？　この子は？　ヴァスクは？　私はどうしたらいいの？　今ここで貴方にいなくなられたら、私はどうすればいいのよっ！」
「……女」
アルカードの肩に首を預けたまま、オルロックは虚ろな声で言った。
「最初お前を見たとき、殺そうと思った……」
「……そうしなさいよ。すればいいわ、でもアルカードは連れていかないで！　この人を待ってる人がたくさんいるの」
「アドリアンの隣にいるお前が憎かった。この離宮に入れてからは、引き裂いて喰らってやろうと思っていた。ゆっくりと、指を一本ずつちぎって……お前の泣き叫ぶ顔が見たかった。――だが、もういい。もう欲しいものは手に入れた」
オルロックは抱擁を解くと、左目の単眼鏡を外してアルカードに手渡した。
「……これは？」
「馬鹿、冗談だ。誰がお前など待ったりする……ものか――」オルロックの顔が涙で歪む。「――三百年前のオルロックを忘れないで、アドリアン」
アルカードが左手に持っていた槍を引ったくると、止める間もなくオルロックは自らの体に突き立てた。
「オルロック……！」
そのまま膝をつき、うずくまるような格好でオルロックは床に伏した。

「あの人間達はここには……いない。あの……クルースニック……が」
「オルロック」
「ふふ……馬鹿なアドリアナ……弱虫の……泣き虫」
オルロックは灰となって床に散乱した。
「オルロック」
槍が乾いた音を立てて大理石の床を転がった。アルカードはオルロックの肩に手をかけた姿勢のまま凍り付いていた。
「アルカード」
「……ああ」
床に撒かれた灰を一掴み集めると、アルカードはそれに口づけた。
――俺もじき逝こう。もうお前を待たせたりはせぬ。
「アドリアン様」
振り返ると、最初に道案内をしてくれた亡者が無表情に立っていた。
「ご案内致します」
それだけ言うとてくてくと歩いて行ってしまう。アルカードは気力を振り絞って立ち上がった。そう、まだやることはある。
オルロックの単眼鏡をしまい、卓の上に乗ったエリオットの首を見詰める。この男は逝ったが、息子まで送るわけにはいかない。槍の穂先で彼の遺髪を切り取ると、卓布を引き裂いたものでそれを縛った。
「……アルカード様、案内が行ってしまいます」
腫れ物に触るかのような妖精の声に答えると、遺髪を懐に収めてアルカードは部屋を後にした。

「アルカード……話しかけない方がいい？」
「なんだ」
「その、オルロックさんのことは残念だったわ。本当よ」
「……」

幼い亡者の背中を追って、アルカードは再び毛氈の敷かれた廊下を歩いていた。この上どこに案内しようとしているのかはわからなかったが、今はどんなものでも導いてくれるものの意志で、惰性で動くことしかできそうにない。芯が折れたように背中を丸めて歩いているのが自分でもわかる。

「ねえ、あの単眼鏡、着けてみたら？」

「……なに？」

「……ごめんなさい」

睨んだつもりもなかったが、マリアは眼を伏せてしまった。

おもむろに懐から単眼鏡を取り出すと、マリアに言われたように左目に着けてみた。着けたかったから着けたのではなく、ただ単に言われたからそうしただけなのだが。

「結構似合ってるじゃない。……ごめんなさい――」

「度が入っていない」

「え？」

「思った通りだ、度が入っていない……」

オルロックがそれを着けて現れたときから、あれに度は入っていまいとアルカードは考えていた。

「オルロックには……そういう悪癖があった。ただの格好付けで、周りの大人達がありがたがっているものならなんでも欲しがった。爺が煙管を吹かしているのを見て、あれが欲しいと駄々を捏ねたこともあった。……火の付け方も知らぬくせに」

目の前が涙でなにも見えない。涙は出るのに、慟哭の代わりに口から溢れてくるのはオルロックの思い出ばかりだった。

「……そう」

「自分にはいつになったら髭が生えるのだろうと、朝晩には必ず鏡を見ていた。男物の服ばかり着ていた。俺が……男物は似合わないと言っても……聞く耳も……」

「……腕、取ってあげる。もっと話して」

マリアに腕を引かれて、アルカードは涙を流しながらオルロック

の思い出を思いつく限り語った。マリアはそれきり悔やみも励ましも口にせず、ただ言葉少なに相づちを返すだけだった。昔、オルロックに虐められて泣き帰ったアルカードの話を、母がそうして聞いてくれたように。

「アドリアン様、こちらです」

思い出話もいい加減出尽くしてしまった頃に、亡者はようよう止まってそう言った。亡者が示したのは小さな部屋で、床も壁も天井も陶器のような一枚板で覆われている。アルカード、マリア、ヴァスクが入ってしまえばかなり窮屈になるだろう。

「ここからドラキュラ城最上階へ飛べます。ご利用下さい」

オルロックめ――最初からこうするつもりだったようだ。

「……アドリアン。私は――」声はそのままに、亡者はオルロックの口調を真似て話し始めた。「――もうお父上を討つなとは言わぬ。暗黒神官は血の指輪を持っている。恐らく、ドラキュラ様に代わって世界に覇を唱えるつもりだろう。あのクルースニックも暗黒神官の操り人形に過ぎぬ。彼奴らを排し、城の秩序を取り戻したなら、後はお前の思う通りに行動して欲しい。ドラキュラ様の復活を阻むのなら、血の指輪を破壊するがいい」

亡者はそれだけ言うと灰になった。

「……まめな奴だ」

「大丈夫？」

「……涙は溜めておくものではないな。泣いたら心が晴れた。礼を言う」

マリアは曖昧に笑ったあと、「行きましょう」と言って部屋の中に入る。足が床につくのを見届ける暇もなく、彼女はかき消えた。

飛んだ先は城の頂上部分の露台だった。柵がない上に高所である為突風が吹き荒れ、妖精などはなにかに掴まっていなければどこか

に吹き飛ばされてしまいかねない。
「私、ここに見覚えがある」
風に髪を嬲(なぶ)られながらマリアが独りごちた。露台は奥に向かって先細りになっており、その先端から上空に向かって大階段が伸びている。どうやらその終点が最上階であるらしかった。
「多分あの上にリヒターがいるわ。本当なら私が止めなきゃいけないんだけれど……」
「わかっている。ただし、期待しないで欲しい」
アルカードの言葉に、マリアが固唾(かたず)を呑んだ。
「俺はリヒターが憎い。が、私情は交えまい。オルロックはリヒターの事を操り人形だと言っていた。ならば生かして止めることができるかも知れぬ。しかし、それでも保証はしかねる」
「……いいわ。いいえ、選択の余地なんかないの。貴方の思う通りに行動して」
「アルカード様、本当に御城主…ドラキュラ様を討たれるんですか？」
「俺もお前も、その為に闘ってきた。いまさら志の変わろうはずもない。――イェルは迷っているのか？」
「私はアルカード様と一心同体です！」ヴァスクの柄に掴まりながら、妖精は胸を張った。「アルカード様に迷いがなければ私にもありません！」
――よく言った、わが忠良よ。
「……アルカード、貴方はドラキュラを滅ぼすためにここへ来ていたのか」
「そうだが……やけに丁寧だな。どういう風の吹き回しだ？」
「そうそう、貴方を正式にこの身の使用者として認めるぞ」
「……イェル、なにがあった」
「あのう……オルロック様との一件を見て……その、いたく感動されたそうで」
「……」

「さあ、ドラキュラなにするものぞ。いざ往(ゆ)かん」
ヴァスクを先頭に、アルカードははるかな大階段を登り始めた。
――リヒターと暗黒神官、この二者を相手に俺はどこまで闘えるか……。
手元にある魔導器はヴァスクを入れて九つ。単純な魔力だけでいえば、三百年前の方がまだしも強かっただろう。しかし既にそういった外面の力以外のものが体に備わっていることに、アルカードは気付いていた。
――リヒターを殺せば、マリアは俺を怨むだろうか。オルロックを滅ぼされた俺がそうするように。
マリアの横顔を見ながらアルカードは思案に耽(ふけ)った。畢竟、こうやって怨みの輪は途絶えることがないのかも知れない。もし殺してしまったら――その時は討たれてやろう。血の指輪を破壊しさえすれば、もはや現世に残る意味もなくなるのだから。
「声がする。あの小僧の声だ」
一足先に登り切ったヴァスクが上で騒いでいる。駆け上がった先は城主の坐(いま)す謁見の間というよりは、罪を犯した貴顕(きけん)を幽閉するための牢といった趣(おもむき)のある、至極(しごく)殺風景な塔が建っているだけだった。鉄枠で補強した木の門が半分だけ開いており、かすかな人声がそこから漏れ聞こえてくる。
――生きていたか。
やや遅れているマリアを待たずに門をくぐる。塔の中はまったく外見に相応(ふさわ)しく、およそ内装や調度といったものは見当たらない。壁材をそのまま切り抜いた採光用の穴窓が散見できる程度で、あとはただ薄闇と古びた石があるのみだった。
「アドリアン！」
――リヒター・ベルモンド！
最奥(さいおう)にある玉座の下に一脚の簡素な椅子が置いてあり、リヒターはそれに腰掛けていた。その傍らには両腕と両足首を縛められて膝立ちになったアドリアンの姿。

「待ちかねたぞ、吸血鬼(ヴァンパイア)」
「アルカードさん……お嬢様が……」
アルカードは立ち竦んだ。玉座を正面にリヒターの反対側の位置に、奇妙なものがぶら下がっている。
「アリエルなのか……」
拷問具かなにかだろうか、奇形の架台に両手両足を吊り上げられたアリエルの姿がそこにあった。足が上、頭が下になるように配置された彼女の下には、血で満ちた水盤(すいばん)が無造作に置かれている。
アリエルは喉(のど)を掻き切られ、全ての血を失って死んでいた。
「……あえて聞こう。人間の側に立って闘ってきたはずのベルモンドが、なぜこのようなことをする。なぜドラキュラ城の城主を望む。答えろ、リヒター・ベルモンド」
「……おれがこの城の城主になってから、お前と同じ下らん事を聞くハンター共がちらほらと現れた。この鞭は有名なようだな。皆この鞭を見て、なぜベルモンドが、なぜヴァンパイアハンターの筆頭がなどと口を揃えて吠(ほ)えた。――どうやらこの鞭の名前もリヒター・ベルモンドというらしい」
リヒターの持った鞭がほどけて奔(はし)り、石床の一角を打ち砕いた。その音に傍らにいたアドリアンが飛び上がるようにして驚く。
「おれは五年前、この城でドラキュラとその配下共と闘い、奴を斃した。知っているだろう？　吸血鬼(ヴァンパイア)」
「……」
「素晴らしい時間だった。おれの最初の目的は恋人を助ける事だった。だが、追われ、追い、斃して生き延びるうちに……そんなことはどうでもよくなっていった。このヴァンパイアキラーは絶えず魔物の穢血(おけつ)を欲し、おれはあの生死の境目のちょうど真ん中、あの剣が峰(みね)に置いてある高揚感と充実感を求めて闘い続けた。おれが恋人を、囚われ人を助けたのも、ドラキュラを斃したのも、全てはその過程に過ぎん」
「嘘よっ！　貴方はそんな人じゃない！　貴方は操られているの

よ！」
門から駆け寄りながら叫ぶと、マリアはアリエルの死体を発見して悲鳴を上げた。
「マリア、生きていたのか。ふん、まがりなりにもドラキュラを相手に闘った戦士ということか」リヒターは椅子から立ち上がるとアリエルの方へ歩き出した。「操られているだと？　今までが操られていたのだっ！　首尾良くアネットを連れて凱旋したおれに、宗家の爺共はなんと言ったと思う？　これからは平和のうちに暮らし、子を多く成し、その技を一つでも多く正確に後代に伝えよだと？　ふざけたことをっ！」
リヒターが鞭の柄でアリエルの頭を持ち上げた。首を切り裂かれた為に異様な角度に曲がった顔は白く、くり抜かれた眼窩は虚空を凝視している。
「人殺し……どうしてお嬢様が死ななきゃいけないんだっ！　なにかの間違いだろ……おかしいじゃないか！　お嬢様に殺されなきゃいけないどんな理由があったっていうんだ！　畜生ぉ！」
血を吐かんばかりの肺腑の声。アドリアンが感じているであろう理不尽と憎悪は、まさに四百年前のシビエルにいた同じ名前の少年が感じたものと同じであった。
「……ドラキュラ公は百年に一度しか甦らん。人間達にとってみれば、百年に一度の災厄を防いだおれの役目は終わったのだ。だがおれの血が、この鞭が闘いを求めている。奴さえ、ドラキュラ公さえ復活すれば、おれの役目も新たになろう。闘いは永遠に続いていく！」
暗黒神官の意志か、それとも表向きそう言わされているだけなのか――少なくともリヒターはドラキュラの復活を求めて行動していたようだ。
「なんてこと……」
マリアはがっくりと膝をつくと、絶望の涙を零し始めた。まるで義兄が過去に積み上げてきた栄光を、自ら踏みにじったその姿に打

ちのめされたように。
「ヴァスク、なんでもいい。人間以外の匂いはしないか？」
マリアの打ちのめされた姿が、かえってアルカードの憎しみを鎮めた。なんとかしてリヒターを、少なくとも操られる前の姿に戻してやりたい。たとえその後にアルカードの断罪が待っていたとしても、このまま殺されるよりはまだしも救いがあるだろう。
「かすかだが、する。どこかはわからん。もっと近づけばあるいは」
――この部屋にいるということか。
「繰（く）り言を聞かせたな、吸血鬼（ヴァンパイア）。さっそく始めたいところだが、その前に……」
リヒターの鞭が空を切り、膝立ちになっていたアドリアンの首に巻き付いた。
「止めろ！　リヒター、晩節（ばんせつ）を汚すな！　なんの力もない子供を殺すのが貴様の闘いか！」
「そうだな、お前の言うとおりだ、吸血鬼（ヴァンパイア）。この小僧は以前におれを腰抜け呼ばわりした。万死に値するところだが……しかし吸血鬼（ヴァンパイア）、妙に人間に優しいじゃないか？」
アドリアンは首を絞められて声も出ない様子だった。会話を長引かせても窒息死してしまうだろう。
「俺も貴様も闘いに生きる者だ。誇りある闘いを知る者に、闘えぬ者を手にかけて恥じぬ者などいない」
「言うな、吸血鬼（ヴァンパイア）風情が。……しかしそうだな、吸血鬼がそこまで慈悲をかけるのだ。同族のおれが無情になるのも妙な話――」リヒターはかっと眼を見開いた。「良かろう、小僧には慈悲を与えてやろう――苦痛なき死という慈悲をっ！」
「ヴァスク！　リヒターを殺せ！」
アドリアンの首が宙を飛び、マリアの絶叫が虚ろな室内にこだました。
「そうだ、怒れ！　闘え！　おれを楽しませてくれ！」

――殺す。マリアの思惑などもういい、殺す。
オルロックを滅ぼした。アリエルを殺した。アドリアンを殺した。
――リヒターを生かしておく理由などかけらも見つからなかった。
ヴァンパイアキラーは槍で払っても、まるでそれ自体が意志を持っているかのように不規則に動き、見事に死角を狙って襲いかかってきた。
「いいぞ、これだ。おれはまさしくこれの為に生きている！」
リヒターはアルカードとヴァスクの二者を相手に、鞭を縦横に振り回し、わざと隙を作って短剣を突き込んできたりと、まさに鬼神の強さであった。槍も剣も当たるには当たってもその傷は浅く、リヒターは傷つけられるのが嬉しいかのようにどんどん前に出て来る。勢い二手に分かれて攻め、一方が押されたらもう一方が背後から攻撃を仕掛けるといった挟み撃ちを狙うが、それすらリヒターにはなかなか通用しない。――リヒターはまさしくドラキュラを斃した男だった。
――歯が立たぬ。
「アルカード！　こりゃきついな、なんなのだこの鞭は！」
退魔の蛇に噛まれてヴァスクが泣き言を叫ぶ。リヒターが背中を見せた隙に炎を呼び、目くらましのつもりで放った。
「ヴァスク！」
素早く顎で天井を指す。上から行け、という暗喩（あんゆ）をヴァスクは酌（く）んでくれた。
「死ね！」
大声で注意を引きながら捨て身で炎の中に突っ込んだ。どちらを迎撃するにせよ、もう一方の攻撃は躱（かわ）せないはず。
はたしてリヒターは炎をかいくぐってアルカードに肉薄してきた。が、その右手の鞭は見もせずにヴァスクをたやすく打ち払い、こちらに向けた左手からは雷精が迸（ほとばし）る。
――奴が魔法を使うことを失念していたか！

とっさに槍を手放すことで避雷(ひらい)に成功したが、アルカードは無手のまま横に転がり、ヴァスクは玉座の脇まで飛ばされて落ちた。
「……？」
なぜかリヒターは槍を手放したアルカードに止めを刺さず、離れた位置にいたヴァスクに猛然と襲いかかっていった。慌てて浮き上がったヴァスクは防戦一方で、玉座から引き剥がされるようにマリアの方へ追い詰められていく。
――まさか……。
アルカードは槍を引っ掴むとリヒターには目もくれず、まっしぐらに玉座を目指した。途端、まるで背中に目がついているかのようにリヒターが振り返る。
やはりなにかいる――リヒターが追いつく寸刻の間、アルカードは玉座の近辺に目をこらした。左目に着けたオルロックの単眼鏡に、紫色のなにかが一瞬よぎる。
「もう終わりか、吸血鬼(ヴァンパイア)！　なにを休んでいるっ！」
リヒターの攻撃は明らかにこちらを潰そうとするものではなかった。鞭の連撃は全て玉座側、こちらから見て左側からしか飛んでこない。箒(ほうき)で掃くような単調な動きはまさしく、アルカードを玉座から引き離そうと意図されたものだ。
「マリア、鏡をくれ！」
誘いのつもりで叫んだこの一言が決定的だった。リヒターはその凶相をマリアに向け、今までのような余裕の全くない敏捷(びんしょう)な動きで突進していった。
「ヴァスク！　一分でいい、マリアを守れ！　絶対に退(ひ)くなっ！」
「あ、おい！　無茶な……！」
ヴァスクが悲鳴を上げる。アルカードはその場から逃げると見せて少し離れ、素早く単眼鏡を外すと、玉座の辺りが映るように角度を微調整した。
――いた。
どこか異国風の紫色のローブを身に纏った老人が、玉座の傍らに

立っていた。マリアの方へ両手をかざし、口角を上げて笑っている。
「隠世のひずみより来たれ、黒き炎」
――こいつが暗黒神官、全ての元凶か！
アルカードの言葉にぎょっとこちらを向くと、慌ててのろのろと移動しながらこちらへ手のひらを向ける。門の方角から狂ったようなリヒターの喊声（かんせい）が近づいてきた。
間に合わぬ――暗黒神官がにたりと笑うのが見える。
突然、すぐ横まで迫っていたリヒターが足を止め、何かに殴られたように呻いた。見ればいつの間にマリアの元を離れたものか、妖精がその顔に食らいついているではないか。
「イェル、離れろ！」
「羽虫っ！」リヒターが妖精を引き剥がして床に叩き付ける。
アルカードが炎を放つのと、リヒターが妖精を踵（かかと）で踏み潰すのは同時だった。
隠世の炎は暗黒神官を直撃した。すぐそこまで迫っていたリヒターは床に引かれるように崩れ落ち、叫びながらアルカードの背後を転がっていく。
「くっ、しくじったか……！」
暗黒神官は暫時明滅（めいめつ）を繰り返したのち、その姿を現した。
「だがまだ終わらぬ。あと一息なのだ……」
アルカードが槍を突くよりも一瞬早く、暗黒神官は玉座の後ろへ飛んだ。そのまま壁に激突するかと思われたが、どうしたわけかなんの抵抗もなくすり抜けてしまう。
――この壁はまぼろしか。
「なんだ、腕が……！」
声に振り返ると、リヒターが左腕を庇（かば）いながら立ち上がるところだった。転んだ時に骨でも折ったのか、しきりに二の腕を撫（ぶ）している。
――奴を追うよりも、この男の断罪が先だ。
「リヒター！」

マリアが泣きながら走ってきて、困惑顔のリヒターにむしゃぶりつく。
「リヒター・ベルモンドだな」
「待って、アルカード。待って！」
「ヴァスク、来い」
アルカードがなにをしようとしているのかを察したか、マリアは立ち上がるとリヒターを背に庇った。
「……マリア、おれはなにかしたのか？」
「リヒター、それは――」
「いや、お前に聞くより、そちらに聞いた方が早そうだ。――アルカードと言われるのか？」
こちらの殺気は感じているはずだった。リヒターはなにもわからないなりに、自分が殺気を向けられるようなことをしたのだと自覚している。――恐らくは殺される覚悟も。
「そうだ」
「……貴方は、我が祖ラルフ＝クリストファーと共にドラキュラに挑んだ、あのアルカードなのか？」
ラルフめ――結局アルカードの頼みを聞いてくれた者はいなかったという事か。
「そんなことはどうでもいい。――お前は操られ、ドラキュラ城の城主としてここにいた。覚えてはいないか？」
「覚えていない。……ここはドラキュラ城なのか？」
「そうよ、貴方は――」
「マリア、黙っていろ」
マリアは唇を噛むと、諦めたようにリヒターの前から離れた。もはやできることはこれだけとばかりに跪（ひざまず）き、アルカードに向かって手を合わせている。
「リヒター……」声は凄まじい怒りと、まったく等量の深い悲しみで震えた。「あれを見ろ」
槍を指した先には、変わり果てたアリエルの姿がある。マリアが

涙声で「いまさら知らせてどうなるっていうの？　なんの意味もないわ」と呟いた。
「……死んで……いるのか」
「そうだ。彼女の名前はアリエル・ダナスティ。貴様の祖ラルフ＝クリストファー、サイファ、そして俺と共にドラキュラを斃した、グラント・ダナスティの末裔だ！　貴様が殺した！」
マリアの悲痛な泣き声が響く。リヒターは凍り付いたように身動き一つしなかった。
「まだ終わりではない。あの首を失った少年を見ろ、貴様は無抵抗の彼をそのヴァンパイアキラーで、草でも刈るように殺した！」
リヒターが震え出す。
「まだある。貴様は我が莫逆の友を殺した。我が忠臣を殺した。ダナスティ率いる五百人の人間を殺した！　皆貴様が殺した！」
「やめて……リヒターを苦しめないで……」
「……マリア、いい。たとえ歩いてきた道がわからなくとも、自分の足跡は確かめなければならない」
リヒターは蒼白になってその場に座り込むと、アルカードに向かって頭を垂れた。
「……おれはダナスティの血脈を絶ち、ヴァンパイアキラーを殺人の具とし、貴方の近しい人の命を、大勢の無辜の人々の命を奪った。――一他にはないだろうか」
「俺が知っているのはそれだけだ。――それで十分だ」
リヒターの眼にはもうあの逆らんばかりの狂気の色はなく、かつてのラルフ＝クリストファーを彷彿とさせる、あの隠者のような光を湛えているのみだった。
「わかった、一死をもって償う」
リヒターの逆手に持った短剣が心臓に突き刺さる寸前に、アルカードは槍の腹でそれを払い飛ばした。
「……まだ殺し足りぬというのか」
アルカードの取った行動は、思っていたこととは裏腹に全く正反

対のものだった。どれほど激しく怒ろうと、どれほど深く嘆こうと、結局、アルカードにリヒターを殺せるはずはなかったのだ。ダナスティの末裔が流した血に、ラルフの末裔の血を混ぜるなどあってはならなかった。

「……リヒター、操られていたお前に罪は……ない。ドラキュラ城の主だったベルモンドは既に死んだ。この上人間たるお前が死んだところでなんの意味もない。九十九を殺すとも、百の死を俺に見せるな」

マリアは地に伏し、リヒターは天を仰ぎながら、共に涙を流した。その涙の性質こそ全く違うものであったが、たとえ時間はかかろうとも、これで二人とこの城にまつわる全ての悲劇は濯(すす)がれていくだろう。

「ありがとう……リヒターを、助けてくれて……」

子供のように泣き、しゃくり上げながら、マリアはようよう感謝の言葉を述べた。

「マリア、リヒターを連れて城を出ろ」

「……貴方は？」

そう言ってから、マリアは思い出したように眼を落とした。畢竟(ひっきょう)、マリアの目的はどこまでもリヒターの救出にあったのだ。アルカードとはその宿命のありかが違う。

「奴を滅ぼす。――リヒター」

リヒターが悔悟(かいご)の涙に濡れた眼を上げる。

「自決を考えているな。――この城で流された無念の血は、もはや人間一人の死などで濯げる性質のものではない。勘を違(たが)えぬことだ」

本心を見透かされたようにリヒターは俯いた。震えながら髪の中で「わかった」とだけ呟く。

「イェル……」

玉座の近くの床に、潰れた妖精の亡骸があった。胴と頭を踏み潰され血餅(けっぺい)となったそれの中に、生前の愛らしい面影など見つけよう

もない。絶命の一撃を免(まぬが)れて転がっていた彼女の脚を拾い上げると、アルカードはそっと口づけた。
――ご苦労だった、我が忠良よ。しばしの別れだ。
「妖精は滅びてしまったのか」
ヴァスクの言葉には、少なくとも表向きはなんの感情も伺えなかった。
「いい妖精だった。うむ、礼儀を知っていた」
「お前と二人だけの道行(みちゆ)きになるとは思わなかったぞ、ヴァスク」
「なに、ドラキュラなんぞ貴方とこの身だけで十分。妖精は一足先に休ませてやればいいのだ」
休ませる、か――彼女は今頃、隠世のどこかで心安らかに飛び回っているのだろうか。喧しいことを言う主人の元から離れてせいせいしているのだろうか。それとも皆と別れて寂しい思いをしているのだろうか。
――再会の暁(あかつき)には聞いてみよう。だが、その前にやることがある。
「……行くぞ、ヴァスク」
アルカードは暗黒神官の消えていった壁に触れた。

――城の中ではないな。現世(うつしよ)ですらないのかも知れぬが。
壁の向こうはとてもあの塔に続いているとは思えない、暗く長大な隧道(すいどう)が広がっていた。人間なら鼻をつままれてもわからないほどの真の闇で、床も壁も天井も継ぎ目のないつるりとした同一の素材でできている。地下の離宮にあった移動用の部屋に似ていると言えば似ていた。
「いるな、大物が。この奥に」
ヴァスクが場違いにのんびりした声で言った。最後まで正体がわからずじまいであったが、それもここまで来てしまえばどうということもなかった。アドリアンの好奇心がなければこうしていること

もなく、ともすればここへ辿り着くことなくリヒターに滅ぼされていたかも知れない。
――アドリアンに感謝しなければな。
「暗黒神官か？」
「わからんが、どうも二人いる。場所は多分違う」
戦慄が走った。ドラキュラはもう復活したのかもしれない。オルロックの読みは外れるが、その力によって脅かされる人間達にとってはなんの違いもない。
「急ぐぞ。もはや手遅れかも知れぬが」
言いながらアルカードは走り出した。暗黒神官の手に血の指輪があるうちに奴を滅ぼす。だがそれが叶わなければ、目覚めた直後を狙う。もしドラキュラの眠りがアルカードのそれと同じ性質のものなら、目覚めてしばらくは立って歩くことも難しいはずだ。
――もし全(まった)き復活を遂げたなら……。
「アルカード！」
アルカードの目の前に迫っていたものをヴァスクが剣身ではじく。隧道の奥からなにかが飛んできたようだ。
「気をつけろ、アルカード。ありゃ魔法だ」
話している間にもそれは飛んできた。魔力で作られた矢のようなもので、ヴァスクがぶつぶつと文句を呟きながらその全てをはじき飛ばす。進むにつれて矢が飛んでくる間隔は刻々と短くなり、ただ闇のみであった隧道の奥に空間らしきものが見えてきた。
「……おい……このままでは……保(も)たん……」
ヴァスクが苦しげに呻(うめ)く。切れ目なく水をかけるように飛んでくる矢を防ぐ為に、既にその剣身は目で追えないほどの動きになっている。
――見えた。
「ヴァスク、三つ数えたら防御を解け。――いくぞ」
「なに？　おい……！」
「一」アルカードは槍を逆手に持ち直すと、隧道のはるか奥に立

つ紫色のローブに向かって思い切り投げつけた。「二」
「三！」
ぴたりと動きを止めたヴァスクを引っ掴むと、アルカードは投げ槍の結果を確認せずに猛然と駆け出した。狙い通り矢の驟雨（しゅうう）が止む。
行く手にかなり大きめの部屋が見える。そしてその前で槍を躱し、今し体勢を立て直そうとしている暗黒神官の姿も。
「ヴァスク、飛べ！」
ヴァスクの了解も得ぬまま投げつける。「隠世（かくりよ）のひずみより来たれ黒き炎」
暗黒神官は部屋の中に退き、ヴァスクがそれを追う。一拍遅れでその中に踏み込むと、アルカードは暗黒神官に向かって隠世の炎を放った。
「く、小賢（こざか）しや……」
紫のローブが黒い火炎に嬲られる。唸（うな）りを上げて迫るヴァスクから逃げながら、暗黒神官は口惜しげに吐き捨てた。灼けぬもののないといわれる隠世の炎を、彼はその体に二度までも受けて立っている。血の指輪を所持している可能性は高い。
部屋は巨大な墓のようだった。四方を何段にも分かれた石棚がぐるりと囲み、その中には名前の記された金板を貼った石柩が整然と安置されている。その中の一つ、見慣れた竜公（ドラクル）の家紋のついた石柩が眼に飛び込んできた。祖父ヴラド・ドラクルの柩――ここはおそらくこの家歴代の墳墓の地、ツァラ（ワラキア）・ロムネヤスカを統べる者の安息の地なのだろう。
「お……おお……？」
猛追していたヴァスクが、急に力を失ったように床に落ちた。
「魔導器か魔族かは知らんが、まこと小賢しい。――アドリアン様ですかな？」
ヴァスクはかたかた震えながら「くそ、動かん。やい貴様なにをした」などと叫んでいた。一応無事のようである。
「……貴様にその名で呼ばれるつもりはない」

「おお、これは……離宮におった頑迷者が最後まで叫んでいたので、つい呼んでしまいました。これは失礼を致した」
暗黒神官はにやにやと笑っている。オルロックのことを言っているのだと気付いた途端、殺意で一瞬目の前が真っ暗になった。
「……ベルモンドを操っていたのは貴様だな」
「いかにも。我こそは暗黒神官シャフト。この世に破壊と混乱を導く者」
得意げに僭称するシャフトの右手には、赤い指輪が嵌められていた。
「シャフトとやら、貴様は元は人間であったと聞く。なぜ世界を滅ぼそうとする」
「愚問ですな。それが神の、ドラキュラ様の御意志だからです」
ドラキュラを神格化しているのか――シャフトの眼には盲信者に特有の、鉛硝子のようなとろりとした濁りに満ちていた。
「貴様はかつてキリストを神として――」
「キリストは神ではないっ！」突然怒声を上げると、シャフトは人が変わったように言い募った。「キリストがかつて一度でも祈りに答えたことがあったか？　人間のもっとも汚らわしい想念が凝り固まって生まれたあの偶像に、愚昧極まる人間共は嬉々として法外な布施を支払い続け、その大部分が神の名の下に不当に低い身分をあてがわれている。当の愚民共はどうだ、いもしない神を信じて、ほんの一握りの頭の回る屑共の為に禁欲的な生活を送り、その屑共の手先の妄言を鵜呑みにして死んでからのことばかり考えおる！　なんという下らぬ生物、迷信に満ちた世界！　私は存在せぬ神を見限り、存在する神を信じただけだ！」
シャフトの言葉からは、彼が体を捨てるに至った経緯がなんとなく察せられた。またドラキュラを信奉する者達の中には、多かれ少なかれこういう考えの持ち主がいるということもアルカードは知っていた。彼らの祈りを、願望を嗅ぎつけて、ドラキュラは自身の復活への糧とするのだ。

「……シャフト、貴様の考えもまた真理。世にキリスト教以外の教えも数多(あまた)あろうが、それとて名前が違うだけのこと。貴様には間違いなく一理がある」
はたしてシャフトは得たりと頷(うなず)く。
「だが残りの九理は間違いなく人間達にある。なぜなら――ドラキュラは神ではないのだから」
「……所詮子供は子供、いかにあの尊いお方の御血族であろうと、下賤の血を引く貴方に理解せよという方が無理な注文ですな。――さあ、話しているうちに我が同士が来ましたぞ」
部屋の中に懐かしい気配が満ち、次いで灰色の髑髏(どくろ)が虚空より浮かび上がる。呪われた血染めのローブをはためかせ、赤錆びた大鎌を手に携えたドラキュラの右腕。
――奴はこれを待っていたのか！
先程投げた槍は歩いて十歩の距離にある。シャフトの足下に転がったヴァスクが回収できない以上、なんとかしてあそこまで移動しなければ。
「シャフト、娘の血と魂は配し終わった。指輪を渡せ」
「おお！　遂(つい)に御復活の時が来たか！　デスよ、丁度よい。御復活のお祝いだ、このお方の体も生け贄として捧げようぞ。我らでかかれば易きことよ」
「……」
デスは無言で大鎌を振りかぶり、シャフトはその背後に隠れるようにしてこちらに手を突き出した。アルカードは必死に考えを巡らせながら、霧に変じる魔法を練り出す。
――これで凌(しの)げるのもほんの一瞬。せめて槍だけでも……。
デスが大鎌を振り下ろす瞬間、アルカードは霧に変じた。が、急速にぼやける視界に飛び込んできたのは、振り返ってシャフトに斬りかかるデスと、右腕を斬り飛ばされて地にまろぶシャフトの姿だった。
「な、なにをする！　血迷うたか、デス！」

「貴様が指輪を渡さぬからだ」
デスはシャフトを見もせずにそう言うと、彼の右腕が落ちた辺りで指輪を拾い、それを手のひらの上で消した。
「……まさか、デス、お前は」
ようやく自分が利用されていたことに気付いたようだった。尻餅をついたままシャフトは後退る。
「話が違う！　私もお前も共にドラキュラ様の――」
「話が違う？　呼んだではないか、わしを」無表情の骸骨がつかのま笑ったように見えた。「わしの名を、デスを。お前はお前の死（デス）を呼んだ。わしは呼ばれて来たに過ぎぬ」
「私の体は斬れぬぞ……我が霊体にかすり傷一つ――」
「貴様の右腕はどこへいった？　――たかが人間の魂一つ、利用価値がなくなればいつでも消せた。そして……残念だが今がその時だ」
デスの大鎌がシャフトの胸を抉（えぐ）る。断末魔の悲鳴すら残せず、まことあっけなくシャフトは滅びた。
アルカードは我に返ると素早く槍を拾い上げた。デスは黙ってそれを見届けると、ややあってぽつりと呟いた。
「……あの人間もどきの妄言はお気になさいませぬよう」
「妄言とは？」
「アドリアン様の御血筋を云々（うんぬん）言うた事です」
「……元よりそれこそがこの身の唯一の誇りだ」
それからしばらくの間、二人は城門でそうしたように睨み合っていた。まるで睨み合うことでお互いの翻意（ほんい）が叶うとでもいうように。アルカードにはデスがなにを言うかわかっていたし、それは向こうも同じはずだった。
アルカードはデスの眼窩から視線を外すと、転がったままのヴァスクに視線を転じた。それを待っていたようにデスが話を切り出す。
「……ここまで来てしまわれましたか。その後、翻意の余地はございませぬか？」

「ない」
「では重ねてお頼み申す。アドリアン様、数多の闇のうからの為、我らが元へお帰り願いたい」
「言ったはずだ、デス。闇のうからの故郷は一つ――隠世だ」
「……もう一度だけ申す。父君の為、手を引かれよ」
「最初からその気はない」
全ての力が抜けてしまったかのように、デスは髑髏を俯けた。
「……わしがお教えした闇の技、よもや錆び付かせてはおりますまいな」
「師がよかったのだ、錆び付かせようにも錆びぬ」
「万策尽き申した。許されよ、アドリアン様」デスが大鎌を持ち上げる。「我が主の為、その魂頂く。――三百年前のようにゆくとは思われるな」
「隠世のひずみより来たれ雑霊ども」
アルカードの頭上の空気が揺らめく。それが一瞬収り、次いで霧のような雑霊が一斉に吐き出された。
「……隠世のひずみより来たれ、役霊ども」
デスがローブの前を開く。剥き出しになった二十四本のあばら骨が外れ、それぞれが鋭利な湾刀にその姿を変えていく。
雑霊はじきに蹴散らされるだろう。雑霊を目がけて飛んでいく湾刀を尻目に、アルカードは大鎌を振り上げるデスに肉薄した。
「そのようなものを呼んだとて、時間稼ぎにもなりませぬぞ」
唸りを上げて降ってくる鎌の腹を槍で払い、勢いのまま床に押さえつける。ほんの寸刻、二者は身動きのならない体勢のまま固まった。
――こちらが本命だ！
「ヴァスク！」
デスの背後で息を潜めていたヴァスクが、背後から正確にデスの頭骨を貫いた。押さえ付けていた大鎌から力が抜ける。
「ヴァスク、よくやった」

「なぜだ……精が吸えん」
ヴァスクの言葉に槍を構え直す暇もなく、無数の湾刀が背中を抉っていった。
「……わしに同じ手が二度通用すると思われるな、アドリアン様」
割れた頭から不気味な声が響いた。ヴァスクの奇襲になんの痛痒も感じていないように見える。落とした大鎌をゆっくりとした動作で拾い上げると、仕切り直しだと言わんばかりに鎌を振り上げた。
血の糸を引きながらアルカードは間合いを取った。三百年前のデスとの闘い――あの時はラルフとグラントが正面で囮になり、サイファが奇襲すると見せかけてアルカードが頭上を襲った。サイファはのちのドラキュラ戦が絶望的なほどの重傷を負い、グラントは湾刀に斬られて片目を失明したが、アルカードは狙い過たず抜き手でデスの頭を砕いたのだった。
――ではどこを攻めればいい？
頭を除けば、デスの体は単純な骨の組み合わせで構成されていた。もしあの無数の骨のどれか一つが本体なのだとしたら――いちいち一つずつ破壊していくなど不可能だ。
二十四本の湾刀は一度デスの頭上に集まると、それぞれが不規則な運動を始めた。
「終わりですかな。ならば今度はこちらから参る――隠世のひずみより来たれ黒き炎」
アルカードは槍を床に突き立てた。「……隠世のひずみより来たれ黒き炎」
デスは片手で隠世の炎を呼び、もう片方の手で大鎌を保持すると、無数の湾刀を従えながらゆっくりとこちらに向かってきた。隠世の炎の直撃を受ければアルカードでも滅びは免れ得ない。が、それは向こうとて同じであるはず。お互いが持つ中でもっとも強力な魔法を手に、二者の間合いはじりじりと狭まっていった。
「ヴァスク、あばらは任せた」
「……一対二十四だぞ、責任は持てんからな」

ヴァスクが先行してデスの頭上に突っ込む。湾刀は二手に分かれ、一方がヴァスクの足止めをし、もう一方はそのまま主人に付き従う。デスは何事もなかったように向かってきた。

彼我の距離が五歩まで近づいた時点で、デスが湾刀をけしかけた。数本が頭上に残り、あとの湾刀が一斉にアルカードに殺到する。

――来た！

飛んできた湾刀を隠世の炎でなぎ払うと、デスは体勢を崩した一瞬の隙に黒い炎を突き込んできた。アルカードはなぎ払った余勢で回転し、デスの炎に背中をなすり付けるようにして回避する。永きに渡って数多の刃を防ぎ、幾多の魔法をはじいてきた愛用のマントが炎で捲れ、耐えきれずに灰になっていく。

己の背中の焦げる臭いを嗅ぎながら、アルカードは隠世の炎をデスの体に叩き込んだ。血染めのローブは一瞬にして消し飛び、その体に大穴を開けてデスは倒れ伏す。

「アルカード！　まだ滅びちゃおらんぞ！」

下から掬い上げるような一撃に槍の防御が間に合わず、大鎌は二の腕の半ばまで食い込んだ。槍の柄を大鎌の刃にあてがって抵抗しながら、アルカードはなぎ倒されまいと足を踏ん張る。

――なぜ滅びぬ、こいつは不死になったのか……？

「……死は死を知りませぬ、アドリアン様。生きとし生けるものが死にばかり眼をこらし、その実生きてなどおらぬのと同じように」

ほとんど体のなくなったデスは、それでもその声から余裕が消えることはなかった。その背中越しに、ヴァスクが刃こぼれだらけになりながらもこちらに向かって来ようとするのが見える。

――ドラキュラでさえ滅びるのだ。デスが不死であるはずがない……。

「アルカード……！」

「幕でございます、アドリアン様――隠世のひずみより来たれ黒き炎」

「隠世のひずみより……来たれ、黒き炎」

「アルカード！　あばら！　一つだけ動いておらんのがいる！」
「……！」
デスは大鎌を引き戻すと、ろくに見もせずに背後のヴァスクへ投げつけた。同時に隠世の炎をアルカードに直接押し付けてくる。槍を手放して同じ魔法で受け止めながら、デスの頭上に眼を向けた。
あった――ヴァスクの言葉に警戒したのだろう、湾刀は一つところに固まり、なにかを守るようにぐるぐると回っている。
「いまさら気付こうとも遅い！　もはや勝負は見えた……！」
デスはまったく余裕を失ったように、一気呵成に力で押してきた。そのままじりじりと後退し、背に石柩の頭がぶつかる。ヴァスクは大鎌の一撃をもろに受け、湾刀に攻め立てられながら今し床に落ち行くところだった。じきにあの湾刀もこちらに加勢に来るだろう。
「隠世の、ひずみより、来たれ……役霊ども！」
「往生際の悪い、この部屋に貴方の魔法が通用するようなものは――」
隠世の炎を操っていたデスの左手が斬られて飛んだ。役霊の宿る槍はそのままの勢いで飛び、アルカードの脇の石柩をぶち抜いた。
デスの炎が消える。
「デス、隠世に帰るときが来た！」
デスの頭上にわだかまっていた湾刀に向かって、アルカードは隠世の炎を放った。湾刀に擬態（ぎたい）していたデスの本体は逃げる気配を見せたが間に合わず、黒い炎に呑まれて消滅する。
「ドラ……！」
デスは主の名を叫び終えぬうちに灰となって滅びた。
――時間がかかりすぎた。
デスはシャフトを滅ぼす前に指輪を主の元へ送っていた。ドラキュラの復活は既に疑いようがないだろう。だが――今ならまだ完全に眠りから目覚めてはいないはずだ。
「……ヴァスク」
湾刀に切り刻まれて、その剣身は刃のこぼれていないところの方

が少ない。半ばまで斬り欠かれている致命的な箇所も散見され、もはや戦闘には耐えないことは明白だった。
「……アルカード、下だ。いるぞ、とびきりの奴が」
「わかっている、お前はここにいろ。よくやってくれた」
「すまんがな……少し休憩するぞ」
そう言うとヴァスクは動かなくなった。
デスが滅びたせいか、ドラキュラが復活したせいか――いつの間にか部屋の中央に大きな井戸のような穴が空いていた。間違いなくこの下がドラキュラの玄室だろう。
――これで全ては終わる。ラルフ＝クリストファー・ベルモンド、サイファ・ヴェルナンデス、グラント・ダナスティよ、願わくば俺に過日の力を甦らせ給え。そしてドラキュラ公に全き滅びを。
アルカードは暫時立ったまま祈ると、大穴に身を投げ出した。

「父上……」
壁も天井もない闇の中に、その男は佇んでいた。
「おお、誰かと思えば。……久しいな、我が息子よ」
そう言って振り返った父を見て、アルカードは痛恨の舌打ちを漏らした。
――あれはアリエルの血か……！
アルカードのマントと同じ拵えのものを着け、短いあごひげを蓄えた長身の男は、赤い指輪の嵌った手に血の満ちた銀杯を持っていた。その足下には城主の間でアリエルの血を受けていた水盤が置いてある。目覚め切っていないどころの話ではない、彼は今や完全に復活を遂げていた。
「できることなら会いたくはなかった。俺も貴方も、このまま誰にも知られずに消えてゆければよかったものを」
「我が名を、我が力を知らぬものなどおらぬ。別して人間はそう

だ、アドリアン。知っておろう、私はいつの世も自ら蘇ることなどせぬ」
そう言って笑うと、ドラキュラは艶っぽい仕草で軽く銀杯を挙げた。
「ダナスティに。――お前も飲(や)るか」
「……こうなってしまった以上、ここから先へ行かせるわけにはいかない。ヴラドとリサの子、アドリアンは死んだ。ドラキュラを覆(くつがえ)す者、アルカードが再び貴方に挑もう」
ドラキュラは「アルカードか」と鼻で嗤うと、ふと沈んだ表情を浮かべた。
「……デスは、逝ったのか？」
「はい。オルロックも」
「デスが、置いていった。お前のものだ、返す」
ドラキュラが無造作に手を振ると、アルカードの目の前になくした剣と盾が落ちてきた。槍を床に置き、懐かしい思い出の武具に身を固める。母もまさか、自分の贈ったものが夫に向けられるとは思っても見なかっただろう。
――それでも母上は納得して下さるはずだ。
「……血を吸っておらぬな。そんなものに頼らざるを得んほどに衰弱して、それで私に挑むなどと、見くびられたものだ」
「……」
「相も変わらず人間共の味方をしておるのか。お前が血の涙を流して私をその手にかけたとき、その尻馬(しりうま)に乗って名を上げた憎きベルモンドの味方を」
「我らは四人で挑み、四人で打ち勝った。ヴァンパイアキラーの味を忘れる貴方ではあるまい」
「ヴァンパイアキラー……よくも名付けてくれたものだ。――お前は知るよしもないが、私は再三に渡って彼奴らに苦汁を飲まされておる。同じ天を戴けぬ仇敵(きゅうてき)よ、彼奴とてそれは同じに違いあるまい。ドラキュラを覆す者よ――」

ドラキュラは杯を投げ捨てると、ゆっくりとこちらに歩いてきた。その目はひたすらに静かで、往年の人間達に対する瞋恚の炎は垣間見えず、ただ刻んできた年輪と英知のみが寂びた光を放っている。今この瞬間、目の前の男は魔王ドラキュラではなく、在りし日の父、君主ヴラディスラウス小竜公であった。

「アルカードよ、この父の元に戻れ。三百年前のことに遺恨などない。デスも、あれもよほどお前に目をかけていた。お前と共に闘った人間は既に現世にはおらぬ、お前を絆すものはもうなにもないのだ。いつまで人間共に吹き込まれた自分本位の思想に囚われておるつもりだ」

「……父上、伯母上をお斬りになりましたな？」

「……古い話を」

伯父が私刑に遭い、母が十字架にかけられたあの日、アルカードは自衛の為に数人の村人を殺し、伯父の家に隠れていた。父がシビエルに来たのはほんの数日後――伯母が早馬を駆り、ポエナリ城へ母の急を告げたのだった。しかし伯母は『妻を助けなかった』という理由から真っ先に広場で串刺しの刑に処され、それを皮切りにシビエルの老若男女、事件を知らなかった者を含む約六百人が全員処刑された。朝な夕なに引きも切らず続いた彼らの悲鳴が、魔王ドラキュラ伝説の序曲となった。

「俺もまたいくたりかの人を殺しました。恐ろしかった。母を処刑した彼らがただただ恐ろしかった。返り血に染んだ服のまま寝台に丸くなって、俺は貴方が抱き留めてくれる時をただひたすら待って震えていた！」

「我が子よ、お前の――」

「だが貴方はなにをした？　母の亡骸を回収するや否や、せめて俺だけは助けようと馬上の人となった伯母上を、貴方はゆえもなく斬り、亡骸を辱めた。俺の嘆願など貴方は聞く耳も持ちませんでしたな。貴方はあの酸鼻を極める地獄絵図をあの村に出現させた後、俺の肩一つ叩くこともなく引き上げていった。――父上、拾うのを

忘れていた息子が城の中にいて、さぞ驚かれたことでしょうな？
俺を見つけてポエナリまで送ってくれたのはオルロック縁（ゆかり）の者でした」
「アドリアン、私は――！」
「あの日は貴方にとって妻を失った日であったかも知れぬ。だが俺にとっては二親（ふたおや）が死んだ日だったのだ。あの日より百年の間、俺は貴方の暴虐から目を背け続けた。それを正してくれたのは人間だった。――彼らが今生きているかどうかなど関係ない。母の血の枯れぬ限り、また貴方の捨てたこの身を救ってくれた人間の意志の潰（つい）えぬ限り、我が剣が貴方に与することはないだろう」
ドラキュラの瞳から光が失せ、暗い炎が灯った。
「――忘れたのか、アドリアンよ。リサが一片の咎（とが）なくして十字架にかけられ、その白い肌を槍が貫き、その亡骸は四つに分かたれ、埋葬すらされず泥に塗（まみ）れて路傍に打ちやられたあの日を。我が妻を掻き集めながら、共に流した涙を。――よもや忘れたわけではあるまいな、アドリアンよ。奴等が、人間共がお前の母親にしたことを、忘れたわけではあるまいな！」
「忘れられるものか。どうして忘れられよう、陽が消え、月が滅し、よって立つ礎石（そせき）の永遠に失われたあの日を！　だが母は人間への復讐を望んではいなかった。今際のきわまで人間たちの未来と、貴方の行く末を案じていた！」
壁が迫ってくるような威圧感がドラキュラから放出される。彼の瞳に映る男は既に息子アドリアンではなく、人間に与（くみ）する反逆者アルカードだった。
「この期（ご）に及んでまだそんな世迷い言を言うか。人間共の忘恩と背信、獣心のことごとくをその瞳に焼き付けておきながら。――まあよい。私は甦り、お前はこの場に居合わせた。宿命と思うがいい、今度こそ下賤の血を消し去り、我が眷属に加えてやろうぞ！」
――母上、再び彼に刃を向ける勇気を与え給え。友よ、再び彼を斃す力を与え給え。

「母の名にかけて、我が半身に宿る聖性にかけて。ヴラディスラウス・ドラキュラ！　再び貴方を倒す！」

――これがあのドラキュラ？

ドラキュラの魔力は無尽蔵とも思われた。アルカードの与り知らぬ未知の魔法を使いこなし、ふっと消えたかと思えば、背後から盾をもひしゃぐ抜き手が飛んでくる。こちらの剣の一撃を素手で受け止め、隠世の炎でさえ苦もなくはじき飛ばした。だが――それだけだった。

これがあの強大だったドラキュラなのか――ドラキュラの攻撃はアルカードに当たらなかった。既に数百合を交わしたはずだったが、お互いに細瑕（さいか）も負わず息も乱れず、闘いが始まった直後となにも変わっていなかった。

「……アドリアン、どうやら腕を上げたようだ」ドラキュラは肩の力を抜くと、かすかに不審げな表情を浮かべた。「正直お前がここまでやれるとは思わなんだ。既に数百年の間血を絶ち、人間共のように武器を頼るお前が、なぜここまで私と拮抗しうるのか……」

三百年前の魔力にも及ばぬこの身が強くなったはずがない。それではドラキュラが弱くなったのか――父と同じく不審に思いながら、一方で父の力が今のアルカードの力で十分比肩（ひけん）しうることに、自分でも驚くほどの失望と寂しさを覚えていた。

――なんということだろう。三百年前のあの苦痛に満ちた闘い、その中にさえ俺はドラキュラの強さに対する憧れを見出していたのだ。

ドラキュラの魔法はことごとく外れ、アルカードの剣はことごとく防がれた。決着の付き得ぬ闘いの中、アルカードは父が腕を振り上げるたびに、もっと強く、もっと早くと願い続けた。それでは俺には当たらない、なぜ本気を出さないのだ、と。

「埒（らち）があかぬ。この体で決着がつかぬのなら……いいだろう！」

ドラキュラは一度飛び退って間合いを取ると、傍らにあった血の

水盤に手を浸けた。はたしてドラキュラの気配が変化していく。
気配だけではなかった。その長身痩躯の輪郭（りんかく）は歪み、人外の形を目指して膨らんでゆく。アルカードの心は新たな脅威に対する恐怖と、父の力が増した事への喜びで相半ばした。
やがてアリエルの血を吸い上げたドラキュラは、異形の怪物へとその姿を変えた。
「これが真祖の力よ、アドリアン。――お前の力を惜しんで最後に聞く、私と手を組め」
「答えはわかっているはずだ、ドラキュラ」
「よう言った。ではお前の汚らわしき半身を引きちぎり、賤しき血を残らず絞った上で改めて聞くとしよう！」
異形となったドラキュラの攻撃を紙一重で避け、振り払われた腕に剣で斬りつける。
――剣が……！
母の形見の剣は、その半ばから折れて飛んだ。ドラキュラがにたりと笑う。折れた剣を捨てて槍へ駆け寄ろうとしたアルカードを、床に押さえ付けるようにして両の腕が掴んだ。
「掴まえたぞ、アドリアン。さて、ここからお前はどう足掻（あが）く」
ドラキュラがなぶるように少しづつ締め付けてくる。全身の骨が軋み、ひびが入る音を聞きながら、アルカードは最後の抵抗を試みた。
「隠世のひずみより……来たれ……役霊……」
遠くで槍が持ち上がり、矢のように奔る。槍はアルカードの狙い通り、ドラキュラの背中に突き刺さった。
「……これが最後の足掻きか、アドリアン」背後に腕を回して槍を引き抜くと、ドラキュラはアルカードによく見えるように示して見せた。「これか？　こんなものが私の体に効くとでも――」
突然、ドラキュラは言葉を切ると、耳をつんざく絶叫を上げてのたうった。アルカードは宙に放り投げられ、そのまま弧を描いて地面に激突する。

「……ヴァスクか」
ドラキュラが激痛に身をよじって暴れ回っている。その背中――アルカードの槍が作った傷口に、ヴァスクの剣身が深々と刺さっていた。
「待たせた、アルカード」
「貴っ様……ガラモスかっ！　処分されたはずの貴様がなぜここに！」
「ガラモスだと？　そんなのは知らん。我が名はヴァスク！　ヴァスクの方が格好よかろうが！」
魔王ガラモス――ドラキュラが闇のうからの頂点に立つ前にその座に君臨していた、伝説上の大悪魔の名前だった。
――俺はこんな危険な代物を顎（あご）で使っていたのか……。
「ぐ……力が……くそ、吸精か……！」
「……こりゃまずい。入らんぞ。ドラキュラはさすがにでかいな」
ドラキュラの体がじりじりと小さくなっていくにつれ、ヴァスクの剣身がぽろぽろと欠け始めた。大きすぎる力を魔導器が吸収しきれないでいるのだ。
「ヴァスク！　もういい、離れろ！」
「離れようにももう動けん。うむ、こんな大物と差し違えるんなら本望、本望」
「死に損ないめぇっ！」ドラキュラがヴァスクを掴む。
「……アルカードよ、一足先に逝くぞ。ゆっくり来い」
ヴァスクはドラキュラの中で爆発した。背中と掴んでいた右手を吹き飛ばされて人の形に戻ったドラキュラは、爆炎に衣服を焦がされながら地面に弾んだ。
やったか――満身創痍で立ち上がると、アルカードは折れ飛んだ母の剣を探した。彼に、ドラキュラにとどめを刺さなければならない。
はたしてドラキュラは息を吹き返した。仰向けになっていた体をごろりと俯せると、瀕死の犬のような呻き声を上げながら床を這い

出す。
「血……血……血……」
残った左腕と両足を虫のように駆使して、魔王ドラキュラは血の水盤へと無様に這いずっていく。
――やめろ。
アルカードは顔を背けた。今この瞬間、父は真に孤独であった。誰にも顧(かえり)みられず、己の体一つ持て余し、ただ生きんが為に血を欲して這いずる、独りぼっちの吸血鬼。
アルカードは折れた剣身を見つけると、それを拾ってゆっくりと父を追いかけた。苦労の甲斐あって水盤に辿(たど)り着いたドラキュラは、下品な音を立てて僅かに残った血を啜(すす)る。
「……愚かな、私が恢復する前にやればよかったものを」
鼻から下を血まみれにして、ドラキュラは立ち上がった。忙しく辺りを見回し、アルカードの槍を見つけるとそれに飛びつく。もはやドラキュラにも魔法を操る力は残っていないようだった。
お互いにその足取りは覚束(おぼつか)ない。歩み寄るようによたよたと肉薄し、アルカードは折れた剣を、ドラキュラは槍を、それぞれの体へ突き込んだ。
「こっ……」
「在るべきところに帰れ、ドラキュラ。これ以上母を……苦しめるな」
槍は度重(たびかさ)なる酷使の果てに、持ち主の手元から折れていた。ドラキュラの名を逆に刻んだ槍はまさにその名のごとく、ドラキュラの意志を覆したのだった。
「……なぜ？」
――ああ、彼にはとうとう理解できなかったのだ。
「なぜだ……なぜ私は――」心臓に突き刺さった刃に力なく手を添えると、ドラキュラはアルカードの耳元で囁いた。「――力の差は歴然であったのに……なぜ私はこうも……破れる」
ドラキュラの肩を抱き、二人は崩れるようにして膝をついた。耳

の裏で父の苦しげな喘鳴(ぜんめい)が響く。
「力とは、護るものがあってこそ限界を超えることができる。父上、かつて人の血を忌み、魔力を枯らして吸血衝動に耐え、本意ならずその手に剣を取った在りし日の貴方は……今の俺よりもよほど強かったのだ」
アドリアンの言葉が耳に甦る。守るべき矜持、護るべき者――今なら理解できる。この背に庇い、またこの身を助け、逝ってよりのちもこの胸の中で、消えぬ灯となって支え続けてくれた人々。アルカードの失われた力を補い、渇きを抑え、業敵に立ち向かう勇気をくれたものの正体はそれだったのだ。
「……」
「愛する者を失い、愛することを止めたとき、貴方は既に負けていた。……おわかりにならなんだか、父上！　貴方の求め続けたものはあの日、とうに貴方の眼から流れ出てしまっていたことに！」
泣き声とも笑い声ともつかない呻きが、父の口から漏れた。
「……そうか」ドラキュラは肩を震わせて泣いていた。「……皮肉なものだ。力を求めるが故に……失ったものが、私の敗因であったとは……」
「……」
「……アドリアンよ、教えてくれ。リサは、最後になんと言ったのだ？」
「人間を怨んではいけない。もし人間が許されない存在であるなら、自ら滅びの道を選ぶ。その世界の住人に在らざる者は手を出すべきではない、と」
母は槍で突かれた後、途切れとぎれにそう言って死んだ。アルカードにもわからなかった。長じてからですら半信半疑だった。しかし今なら、父の肩に頭を預け、お互いの命の旦夕(たんせき)に迫らんとする今ならわかる。きっと父にもわかって貰えるはず。
「――そして父上、貴方を永遠に愛していると」

「リサ」
「……」
「リサ、私は……間違っていたのか」
ドラキュラは息子の胸の中で滅びた。
床に降り積もった灰の中に、小さく光る赤い指輪が落ちていた。
滅ぶべきだった父を鞭打ち、生かし続けた彼自身の負の力。
「父上、おさらば。――アドリアンもじきに参りましょう」
アルカードはそれを拾い上げると、手のひらに乗せて握り潰した。

「イェル、おらぬか」
悪魔城はアルカードがよろぼい出るのを見計らったように崩壊を始めた。アルカードを支え続けた魔導器は、時を追うごとに一つまた一つと灰になってゆく。しかしもはや消えていく魔力も、故郷が崩れ去る音も、アルカードにとってはどうでもいいことだった。
「ヴァスク、支えてくれ、足元が覚束ぬ」
日の出にはまだ時間があった。マリア達はどこだろう――アルカードは人間の姿を探して崖際をよたよたと歩いた。
「アドリアン、やけに静かではないか。ちゃんとアリエルの手を――」
「アルカードー！」
声に顔を上げると、正面からマリアとリヒターが走ってくるのが見えた。生きていたか――その場に膝をつきそうになるのを堪えて、アルカードは胸を張った。
「よかった、アルカード！」走ってきた勢いのままにむしゃぶりついてくる。「無事だったのね、よかった……！」
「……無事だったようだな」
血の匂いはしなかった。もう血は必要ないのだと体が言っているかのように。

「すまない。おれのせいで、また実の父を……」
「気にするな、奴と俺の宿命ゆえにこうなったのだ。いや、誰が手を下さずとも、奴はきっと今日この日に滅びただろう。ドラキュラはかく生き、かく滅びた」
「そう言ってくれると……助かる」
「リヒター。そしてそれは人とて同じだ。――よく覚えておいて欲しい、この世界に破滅をもたらすことができるのは、奴ではない。人間、自分自身だと言うことを」
「わかった。肝に銘じておこう」
自責の念が彼を苛んでいるのが傍目にもわかった。この短時間の間に頬は痩け、堂々とした体躯からは年相応の激しいものが微塵も感じられない。それでも、この強靱な男はそれに十分耐えぬくことだろう。あのラルフ＝クリストファーの血と骨をその体に持っているのだから。
「アルカード。これから、どうするの？」
ようようアルカードを解放すると、マリアは気遣わしげにそう言った。
「……俺の体に流れる呪われた血は、この世界には不要だ。人目につかぬ方が良かろう」
「アルカード、我が郎党の元へ来ては貰えないだろうか」アルカードの言葉に重ねるようにして、リヒターは切り出した。「貴方に帰るところがあるようには思えない、故郷がおれのせいでこうなってしまったのだから。心配しなくても、ドラキュラを二度に渡って斃した貴方を怖れる者などいない。おれの、いや、我が一族の永代の賓客として、貴方の信じた人の世の行く末を見届けて欲しい。もし貴方がどうしても眠りにつきたいと言うのなら……玄室も用意しよう。誰にも近づけさせはしない」
「素晴らしいわ！　アルカード、ぜひそうして。リヒターのご先祖様のこと、皆に話してあげてちょうだい。ね？」
アルカードはここに来て初めて、笑い出したい衝動に駆られた。

それを堪える必要ももうないのだと気付き、アルカードは天を仰いで笑った。その手を握ったままマリアが呆然としている。
「ア、アルカード？」
「ああ、はあ、リヒターよ、血は争えぬな！　ほとんど同じ言葉を、俺は三百年前に一度聞いている。ラルフ＝クリストファーも似たようなことを言ってくれたのだ」
「ああ……そうなのか……」
「心配りはありがたいが」未だ含み笑いながらアルカードは謝した。「闇のうからには、魔族には共通の故郷がもう一つあるのだ。俺はそこを頼ろうと思っている。だから心配には及ばぬ」
「そうか……行くところがないのなら、と思ったんだが、そうか。次に向かう場所があるというのなら、仕方がない」
「リヒター！」マリアが非難の目を義兄に向ける。「……アルカード、貴方には本当に迷惑をかけたわ。私も、リヒターもよ。きっとご先祖様もそうだったと思う。――私達に恩返しをさせてくれない？」
「お前と同じだ、マリア。俺も恩返しをしたかった。俺があの三人に受けた恩を、せめてお前達に一端（いったん）でも返せたなら僥倖（ぎょうこう）だ」
「アルカード……」
「マリア、これを」アルカードは懐から三つの遺髪を取り出した。「アリエル・ダナスティとその家臣、エリオットと息子のアドリアンのものだ。もし俺にいささかでも恩を感じてくれるのなら、どうかこれをダナスティの一族へ渡して欲しい。彼らも、彼らが率いた者達も立派に闘った、と」
三人の遺髪に目を落として洟をすすり上げると、マリアは「わかったわ」と呟いた。
「では、さらばだ。マリア、リヒター・ベルモンド」
「アルカード！　貴方の行くところって、どこにあるの？」歩き出そうとすると、マリアはそう言って呼び止めた。「ここから遠いの？」

「お前達には来られぬ。少なくとも、今はまだ」
「また会える？」マリアは顔を覆って泣いていた。
別れを惜しんでくれる人のいることが、アルカードにとって最後の救いとなった。悪魔城で得た様々な痛みもこれで帳消しにできる。誰に恥じることなく、この城での出来事を語ることができる。快哉(かいさい)のうちに去って行ける。
「きっと会える。――ではな」
二人に背を向けると、それきりアルカードが振り向くことはなかった。朝日を一番に拝める場所を求めて、アルカードは歩き出した。
背中に少女が呼ぶ声を聞いたが、アルカードは聞こえない振りを通した。

ずいぶん高い位置まで来たな。もう指一本動かせぬ。
山の稜線(りょうせん)が輝き出したようだ。じき陽も昇ろう。
考えてみれば三百年前のあの日、俺はまたどうして地下になど潜ったのだろう。眠りにつくのならこうして露天に横たわって、日の光を拝めばよかったのだ。なにも息子が行かなくても他の者がドラキュラを滅ぼしただろう。そうすれば今頃は母上と共に、父上の遅い帰宅を迎えて差し上げられたであろうに。
母上、父上をお責め下さいますな。父上があのように心を疾したのも、全ては母上を愛するがゆえでした。今はもう瓦礫の下となりましたが、あの母上の礼拝堂、父上はいささかも損ずることなく完全な姿のままを保っておられましたよ。
父上、二度までも貴方を討った俺を、お許し下さいなどとは言いませぬ。しかしせめて隠世に腰を落ち着けた暁(あかつき)には、在りし日のように母上と共に、お心平(たい)らかにお暮らし下さい。しばしば隠世と現

世を往復していたようですが、これからはその機会もないのですから。
朝日が頭を出したな。頬がなにやらちりちりするが、うむ、気分は悪くない。
――アドリアン。
その声は、母上なのですか？　母上がお迎えに来て下さるとは、これはこのような高いところまで登ってきた甲斐もありました。
――アドリアン、さあ立って。皆様が来ているわ。
母上、アドリアンはもう立てませぬ。ここまでようよう足を引きずって参りましたが、口を動かすのも精一杯なのです。お察し下さい。
――いいや、君はぴんぴんしているじゃないか。試しにやってみたらどうだい。
ラルフ、貴方なのか？　いや、恥ずかしいところを見せる。貴方が来るのならもう少し低い位置で待っていればよかった。
――わたしの手を取るんだ。引っ張ってあげよう。
サイファ！　もう会えぬなどと言って俺を驚かせたこと、今でも少し怨みに思っているのだぞ。しかしそれもこれで帳消しだな、では手を借りるとしようか。
なんだ、まだ全然動けるではないか。体も軽い。今なら飛ぶことだってできそうだ。
――よう、アルカード。やっと会えたな。
ああ、グラント。それはこちらの台詞だ。急ぐななどとよくも言えたものだ。大方あちらでも寂しくて泣いていたのではないのか？
――アドリアン、もう現世に未練はないの？
はい、母上。全くないといえば欺くことにもなりましょうが、俺の知己の多くは既にそちらへ参りました。俺もそちらへ行くときが来たのです。
――そう、わかったわ。では行きましょう。貴方のお友達がたくさん待っているわ。

貴方達に話したいことがたくさんあったのだ。言ってやりたいことも、聞きたかったことも、たくさんあった。
だがもうなにも思い出せぬ。母上、涙をお笑いになられぬよう。アドリアンは現世においてはほとんど泣くことができなかったのです。お察し下さい。
イェル、エリオット、アドリアン、アリエル、ヴァスク、オルロック。ああ、皆いるではないか。これはいい、皆俺を待っていてくれたのか。素晴らしい。
ああ、涙が溢れる。涙が……。

朝日が昇る。
秋の涼風(すずかぜ)が岩地に積もる灰をさらって飛ばした。風は稜線をなぞるように下へ流れ、目に入れるまいと顔を庇った少女の金髪を嬲って通り過ぎていく。何かを探すようにきょろきょろと辺りを見回す少女のかんばせには、色濃い期待が刷(は)かれている。弾(はず)む足取りで灰を踏み散らすと、彼女は疲れも見せず軽く小走りに駆けていった。

終

第三部（後書き）

……あれ？　アルカード死んじゃったＹＯ！　おっかしいなあ……。

えーキリスト教徒の方、シャフトさんの言うことは鵜呑みにしちゃダメですよ？　彼なんてったって暗黒神官なんだから。

・相当お話変えてしまいました。ここまで読んで下さった方、ほとんどいないはずですがまことにありがとうございました！　イェル、ヴァスクなどの名称はルーマニア語から採りました。ドラキュラシリーズは北斗の拳真っ青の後付設定満載なので、取捨選択に悩みましたが、基本的に十一世紀のドラキュラが人間だった頃の話（ゲームなんていったか覚えてない）は無視しています。血のロンド、月下に実在したワラキア公ヴラディスラウス・ドラクリヤの話を適当に混ぜたというところでしょうか。

・ラルフ・Ｃ・ベルモンドのフルネームですが、子孫にクリストファー・ベルモンドがいること、昔は聖人の名前などを自分の名前とくっつける合名―（＝でくっつけるやつですね）が行われていたことから、ラルフ＝クリストファー・ベルモンドとしてみました。まあ単純にミドルネームとしてラルフ・クリストファー・ベルモンドとしてもよかったような気がしないでもないですが……。えーちなみにクリストファーはラテン名クリストフォルスといって、幼子イエスを担いで激流を渡ったことで有名な聖人です。

・なんでデスが英語なんだよと言われる方、ええ仰るとおりです。ルーマニア語なんてほとんどわからんとです。許してください。石なげてください。

・アルカードが剣使ってねえじゃんと言う方、察して下さい！　筆者はＳＳ版持ってなかったんです！　アルカードスピア使いたかった……！

・正教にはスラヴ語圏とギリシア語圏があったそうな。―（かなりいいかげんな調査です。鵜呑みにしないで……）ラルフとサイファは別々の国から来たんですねえ。よく言葉わかりましたねえ……orz。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1017d/

月下の夜想曲

2010年11月23日17時13分発行